

裁判所へ引立てられることになつた。

此顛末を配布するに當つて、福澤諭吉の名前は著はしてあるけれど、本人の福澤がやつたのではなくして、井上がやつたのであるから、是は明に私書偽造であるといふ理窟を牽強けて、強ひて井角を獄に投込んで見たやうなもの、社會の非難は起つて來るし、又斯様な事が所謂私書偽造になるか何うか、それも疑問であるから、政府も苦んだ餘り、今度は官吏侮辱罪に依つて處罰することに、此方は巧く成立つて、裁判所では井角に對して、官吏侮辱罪に依つて、一年の重禁錮を命じた、井角は是が爲に、市ヶ谷の監獄へ送られて、酷い取扱ひを受け、大に苦んだといふことであるが、實に氣の毒なのは此人であつた。

事は朝鮮に於て起つただけで、結局は支那兵との争ひであつたから、そこで日本政府と支那政府の間の交渉になつて、大分難ましい談判が始つた。其結果、伊藤博文は西郷從道と共に、大命を拜して天津へ乗込む。支那の方では、李鴻章を代表者として、談判は開始されたのである。此時に今の政友會の總裁原敬が、天津領事を勤めて居て、伊藤と李鴻章との間に往來して、頻に交渉の任に當つた。其時の原の行動が、如何にも慧敏であつたといふので、原が長州閥の政治家に認められて、後に外務次官になつたのは、全く此時に信用を得た結果とも見られる。伊藤と李鴻章の間に結んだのが、即ち有名な天津條約なるものであつて、總て是が日清

戦争の因をなしたのであるから、事の因縁は實に恐ろしいものである。

(六)

金村等は、固より朝鮮の國事犯者であるから、日本政府は之に對して、十分の保護を加へる義務がある。同じ犯罪でも、國事犯は堂々たる名譽罪であつて、而も自分の一身を空しくして一般の國民の爲に、政府の改革を計らうとしたのであるから、さういふ犯罪者に對しては、相當の敬意を拂ふべきであつて、日本政府の方にして見れば、甚だ迷惑ではあるけれども、逃げて來られた以上は、十分の保護を加へなければならぬことになつて居るのだ。所が、當時の政府が、如何にも卑劣な了簡であつた。いふ實例は、我公使館は焼討をされ、公使は負傷をして逃歸へる、いふやうな酷い目に遭つて居ながら、尙支那政府を憚ることが甚しく、朝鮮政府に對しても、金村等を保護するのは、何さなく遠慮勝で、最初の中は一箇月に百圓づゝの生活費を、警視廳から渡して居たのだが、年を経るに従つて、之を段々減額して行つたのだから如何にも卑劣な了簡が見え透いて、可笑い位であつた。殊に金玉均に對しては、警視廳も非常に警戒を嚴にして、他の者は其取扱ひが、全く別であつたやうに思はれる。百圓の生活費が七十五圓に減せられ、それから五十圓となり、更に四十圓といつたやうな工合で、遂には十七

圓にまで下けてしまつた。二十五年頃からは、全然一文も渡さぬやうにして、金等に對する政  
府の取扱は、實に苛酷を極めたものであつた。

左様なつて見るに、民間の有志が、金玉均に同情して、彼等を保護する者が續々出て來て、  
一三年前に上海で死んだ岡本柳之助などは、殆ど此問題に狂奔するの模様で、頭山滿や犬養毅  
は、特に金玉均と深い交際を結んで、之を助けた位であつた。明治二十年に金玉均は、小笠原  
島へ送られて、二十二年に北海道へ移され、二十四年には東京へ歸ることを許されたが、始終  
斯様なことで東西に漂流して、日本に居た十年の生活は、實に悲惨なものであつた。

此時に面白い逸話がある、犬養が金を連れて、上野にあつた日本鐵道の社長小野義真へ談じ  
込んで、金玉均を助けさせやうといふ所存で、犬養はまだ小野には會つたことはないけれど、  
紹介の勞を取つて、兩人が揃つて小野の所へ會ひに行つた。所が金玉均は、却々に日本語に巧  
みで、又其服装から様子が、日本人と少しも異なる所はなかつた。雄辯滔々、韓國の事などに  
付て話し始めるに、其傍に犬養が附いて居て、時々、嘴を容れて居たのだ。小野は談話が一段  
落付くに、犬養に向つて、

『何うも足下の日本語は、實に巧妙なもので、何時の間にか左様覺えたのですか』

といふ質問を發した。流石の犬養も莞爾と笑つて、金の顔を見たが、何とも答へなかつたとい

ふことである。小野は犬養を金玉均と思つて、金が流暢な日本語で喋り付けたから、朝鮮人に  
是程日本語が出来ると思はず、時々、嘴を容れた犬養を、全く金玉均と思違ひをしたのであつ  
たといふので、今だに笑話に残つて居るのだ。此一事を以ても、金玉均の如何に才物であつた  
かといふことは分る。

明治二十六年の春頃から、朝鮮の内部に何となく變調を來たして、内亂の兆が見える。是は  
我外務省でも大分警戒はして居たし、又金玉均は同志から屢々の報告に依つて、近中に事が  
起ることは分つて居たのだ。其時分には金玉均は頻に煩悶して、是非朝鮮へ乗込みたいといふ  
考は有つて居たけれど、何事をするにも金が先に立つことではあるし、旁々思ふやうなことが  
が出来ずに居た。そのうちに夏の頃になるに、例の全羅道の古阜に東學黨の亂が起つて、全棒  
準と崔時亨が盛な謀反を始めた、左様なるに、金玉均の心は彌々動いて、早く故郷へ歸つて一  
大活動をしたといふので、東奔西走の勞は取つたが、其時思ふやうにならなかつた。その  
うちに二十六年も暮れて、もう二十七年の春を迎へるこゝになつたが、朝鮮に渡るべき目的は  
更に立たなかつたのである。

其頃には、麴町の有樂町に家をもつて居たが、多くは芝浦の海水浴に行つて居たのだ。或事  
情から同國人の洪鐘字といふ者と懇意になつて、洪は頻りに金を訪ねて來ては、慷慨悲憤して

故國の狀態を論ずる、日一日其交情は深くなつて來た。此洪が朝鮮政府の命を受けて、金を暗殺する爲めにやつて來た刺客であつた。兎に角、刺客にでもならうといふ奴であるから、相當に目先の智慧も廻つて、人に對する取扱にも巧みな所があつて、金玉均も此洪の爲に欺かれて、遂に支那行を決心するこゝになつたのである。洪が金を説いたのは、

『自分は幸にして李經芳と懇意である、それには斯ういふ書面もある』

と言つて、先づ李經芳からの書面を見せて、充分に信用を受けて、それから更に進んで、

『李經芳の父たる李鴻章の力に依つて、朝鮮政府に復歸するこゝにしたら宜からう、それまでは獨立云々いふやうな議論はせず、先づ朝鮮政府に入つて、相當の權力を握つてから、漸次改革を計つて行くには、李鴻章の後援があつたならば、十分の事も出来るであらうから是非李經芳に一度會つて見たら何うだ』

といふ風に説きつけたのだ。金玉均は極めて惻かな男だから、斯様な馬鹿らしい説に、欺かれるやうな人物ではなかつたけれど、何分十年も日本に放浪して、日本政府に有らゆる虐待を蒙つて、日本の一部の人は信を置けるけれど、もう日本政府には到底事を共にすることは出来ぬ、と云ふ覺悟になつて居る折柄、此説を吹込まれたので、遂に金玉均は心が動いて、洪と共に支那へ渡る決心をしたのである。

乍併、頭山と大養には、今までの關係上、一應は此事情を話して、承諾を求めて置かなければならぬ。そこで頭山に之を語るに、頭山は例の調子で、暫く考へて居たが、

『それは頗る危い、洪といふ奴、此頃頻にお前の所へ行くやうであるが、何でも俺は彼奴を怪しいと見て居るが、何うだ』

『左様です、僕も左様思つて居る、何うも彼は怪しい奴に違ひない、併し虎穴に入らずんば虎兒を得ずといふこゝがあるから、兎に角、欺かれると知つて行つて見やう、と覺悟したのです』

『左様か、それまでの覺悟なら行くも宜からう』

頭山は斯ういふ場合に、強ひて他を引止めるやうなこゝはしない。一應は注意して見たが、虎穴に入らずんば云々の一語を聞いた以上は、最早止めた所で致方がないから、様々の注意は與へたが、支那行のこゝを承知したので、それから更に大養を訪ねて、此事情を話すに、大養は諄々として其不可を説いたけれど、金玉均は其決心を語つて、遂に大養を承知させた。洪は何處から工面して來たか、此時に莫大な金を渡したといふこゝである。

明治二十七年の三月二十日に、大阪に向つた金玉均の從者には、和田延次郎といふ者があつた。是は小笠原島に居た時に、極く小さい小供の時から、可愛がつて育て上げたのだ。それが相當の齡になつて、舊恩を思ふて從者として、上海に渡るこゝになつたのである。頭山は流石に金玉均の將來を想つて、明日をも知れぬ露の命に等しい金玉均を、今俄に手を別つに忍びなかつたけれど、金玉均の決心が確いから、何うも致方がない。大阪まで見送つて、自分は淀屋小路の越長といふ宿屋に泊つて、其の様子を見て居た。そのうちに一切の準備が出来て、二十三日の西京丸に乗つて、神戸を出發するこゝになつたから、頭山は船まで見送をして東京へ歸つて來たのである。

海上は何等の支障もなく、二十七日に船は上海に着いて、直に亞米利加の居留地に在る、東和洋行といふ日本人が經營して居る宿屋に這入つた。金は二階の一室、洪鐘宇と和田は、階下の室に泊つて、其日は無事に寝てしまつたが、翌二十八日の午前に、和田は上海の見物に出掛けやうとして、入口まで出て來た。此時に洪鐘宇は、和田が出た戸の開いて居るのを幸に、金玉均の部屋にスツミ這入つて行つた。折柄、金玉均は東京を出るこゝに、犬養から借りて來た左傳を頻に讀んで居た。人影が映したから本を傍に除けて、寢臺からグツミ起上がらうとした所を、衣囊の中から取出した拳銃を以て、洪は金の頭を目掛けて、ドンミ一發撃つた。それが

美事に命中して、頭腦を射抜かれて全身紅に染んだ金は、無意識に踉蹌と歩んで、洪の方へ向つた。

一步後へ退つた洪は、更らに一發射つた。一弾は腹部に、他の一弾は腰に當つて、確に手應へがあつたから、洪は其儘に逃出した。金は尙踉蹌と入口の方まで、蹣跚るやうに進んで來て半ば開いてあつた戸に行當るこゝ、バツタリ其處に倒れて、其儘息を引取つたのである。儼れ十年の雄志を齎して、此不幸の最期を遂げた金は、今懷うても實に同情すべきである。和田は今戸外へ出やうとした途端に、洪鐘宇が恰で狂氣のやうになつて、背後から和田を押退けて、戸外へ駈出した。

其の様子が何さなく可怪しいから、階子段を上つて金の部屋へ近付いた時に、廊下を駈けて來た、亞米利加人が、

「金玉均さん、今射たれました」

と怒鳴つたから、果然と思つて、部屋へは這入つたが、今いふたやうな譯し、金は此の世の人ではなかつた。

金玉均の最期は、斯ういふ事情であつたけれど、茲に最も怪しからんこゝは、當時の上海領事であつた。大越某なる者が、金玉均の死骸を和田に渡さずして、支那の官憲に渡したこゝで

ある。金は日本政府の保護を受けて居る國事犯者であつて、而も其撃たれた場所は、亞米利加の居留地、泊つて居た家が、日本人の經營して居る宿屋である。是等の事情から考へても、金の死骸は當然、日本政府が引取るべきものであるにも拘らず、支那の官憲に引渡した。大越領事の國辱を解せざる、此破廉耻の取扱ひは、後世に傳へて置くべき價値があると思ふ。遅れて來た岡本柳之助等が頻に拒んだだけ遂に力及ばず、支那政府は金の死骸を受け取つて、軍艦に載せて、朝鮮へ送り届けたのである。

朝鮮政府は金の死骸を受取るに、之を楊花嶺といふ所で、八斷の刑に處した。即ち朝鮮は八道に分れて居るから、一道に體の一部づゝ曝すことにして、八斷の刑に處したのだ。凡そ朝鮮國開けて以來、是程の慘刑に處したことは、多くないだらうと思ふ。之に付ても日本政府からは、殘虐なる取扱ひをしないやうにといふ警告を發したけれど、何等の効力はなかつた。金玉均は斯ういふ憐れな最期を遂けてしまつたのであるが、其後に日清戦争が起り、更に朝鮮は日本の併合する所になつて、今は我領土になつて居るのである。

而かも新帝陛下の御即位の場合に於て、特に金が贈位の御沙汰を受けたのは、固より理由のあることで、殊に頭山大養の連中が、同人の功勞を彰表して呉れ、といふ請願書を政府へ出すといふことは、洵に機宜を得た處置と思ふから、此際に於て金の如何なる人物であるか、といふ一斑を説く爲に、此題に依つて其事蹟の概略を講じた次第である。

### 憲政黨内閣の崩壊

(一)

政治家も一種の人氣稼業であるから、苟も政治家として世に立たうとする以上は、世間の人氣も考へなければならぬ。乍併、其人氣が欲しい爲に前後のことも考へず、唯人氣に投ずることばかりをやつて居たら、後日になつて必ず後悔することが出来る。自分の信ずる主義に依つて、施政の大方針を定め、而して國民の上に臨む、其間に少しの私心を差挟むこともなく、一意専心、國家のこゝを念ひして、正直に進んで行く間に、自然に一般の人氣を引付けて、如何にも此人は偉い政治家である、隨喜渴仰されてこそ、眞の政治家の人氣を稱することも出来るのだ。今の大隈伯の如き人があのやうな遺方で、浮いた調子の人氣を、一時にグット引着けたのが、果して眞の政治家の人氣であらうか、僕は其點に於いて、甚だ疑を有つて居るのである。

何時も在野黨の首領として、縦横の評論をして居る間の大隈は、實に英氣颯爽たるの感がある。

つて、人の胸を開けるやうな點はあるが、一度内閣に入りて、政治の實権を握つた後の大隈は必ず大きい過失を遺して居る。然るに昨年の山本内閣が、あの政變の爲に没落した、其後を承けて大隈が、首相の椅子に着くことが決るに、殆ど國民の大部分は狂喜して、大隈内閣を歓迎したのである。尤も、其人氣を引立てるに就ては、新聞の記事も大いに與つて力はあつたが、何しろ當時の人氣が沸騰した有様は、近年に見ぬ程の壯觀であつた。

長い間、政權に離れて、學校の世話役をして居る間に、所謂大隈黨なるものは大分出來て居た。其連中が一面から煽り立てた爲に、何だか理由も分らずに「大隈さんは實に偉い人物である」といふやうな空氣が手傳つて、一般の人が大隈内閣に期待した所は、非常に深いものがあつたのである。それに國民が、長い間の藩閥政治に厭きて、何處かに新しい氣分を求めて居た、さういふ點もあつて、殊に一昨年の憲政擁護の政變以來、一般の人氣が、舊來の政治家を歎ばぬやうになつて居た所へ、何時も民間に在つて、批評家の立場にのみ居た大隈が出るさういふので、儲こそ「此人でなければ」さういふやうな、素破晴しい人氣が、起つて來たのである。

今までの藩閥政治家が、政權を悪用して私腹を肥したとか、自分の乾兒や親類にばかり、甘い汁を吸はせたとかいふやうな、汚い半面が段々國民の間に知られて來て、何うも斯ういふ連中に、長く政權を委ねて居ることは、國家の不利である、さういふ議論が大分盛に起つて來た。

其折柄、例の海軍問題が突發したので、殆ど國民を擧げて、從來の藩閥政治を打破して、茲に一新生面を開かせねばならぬ、さういふ機運が到來した。此機會に乗じて大隈が立つたのであるから、總ての人氣が、彼の一身に落集つたのも無理は無い、乍併、今までの藩閥政治家が、政權を悪用して、私腹を肥したことが、悪いさういふのならば、大隈の長い間、豪奢な生活を續けて居る金も何處から出たのかさういふことを、考へて見たら、何方が悪いのか分らなくなる。其點から言へば、權兵衛も大隈も、將た其他の藩閥政治家も、左までに違ひは無いのである。一方の者に對しては其非を責めて、一方の者には其不都合を見通すさういふことは、世間にはよくあることであるから、強ちに此ことばかりにも限つた譯ではないが、何れにしても大隈は、全く幸運な人であつた。況して大隈が首相になつて、内閣を組織するにしても、其下に從いて大臣の椅子に列つた連中は、あの通りの顔觸であるから、大隈のみが薩長の藩閥に、何等の關係が無いにしても、内閣の基礎は、矢張り長州藩閥の餘孽である。彼の内閣の組織されたのを以て、直に藩閥の大掃除が出來たとは言へない。

## (三)

今は故人になつた星亨が、大隈嫌ひであつたことは一通りでない。大隈の方でも星を煙たが

つたことは非常なもので、何時も星に對しては、他流仕合に行く、劔術家のやうな態度で向つた。星の人格に就いては、大分世間から誤解もされて居たし、又道德上の觀察者から批評したならば、或は大いに非難すべき點はあつたであらうが、一方には非常な勢力を有つて居た、藩閥の政治家を敵とし、又一方には反對の政黨を前に控へて、其間に立つて奮闘した星としては、或時には機道を踏む必要もあつたらう。眞の一時の權變として、心にもない魔法師をやつた場合もあつたらう。さういふ點を捉へて、正面から學校の教壇に、倫理の講釋をするやうな頭で、星を觀察したならば、恐しい惡魔のやうに思つたのも無理は無い。乍併、政治家は儒教が生出した、聖人は違ふのであるから、其功罪を對照して、冷靜に批判を加へて行かなければならぬ。星の爲したことが悪いといふて、世間から非難されて居る、其多くは矢張り大隈も、今までにやつて來た事ばかりであるから、別に大隈と星の間に於いて、何れだけの相違があるといふことも、一寸分らなくなる。従つて、何れが善玉であるか惡玉であるか、それも明白は言ふことが出来ない。

星が大隈の排斥を、實地に行つたのは明治十六年の昔、例の偽黨撲滅の運動がそれであつた。大分年月も経つて居るから、改めて此ことを繰返すのも、興味のあることであると思ふて、先づ其顛末を述べることにしよう。

明治十五年に、自由黨總理の板垣退助が洋行することに、黨内に非常な紛擾が起つた。それは何ういふ譯かといふに、板垣は其時分から貧乏であつたが、其洋行の費用に就いて、改進黨の機關新聞であつた、東京横濱毎日と報知新聞が筆を揃へて、攻撃を始めたのである。詰り「板垣の洋行の費用は政府から出たのであつて、板垣は洋行して歸るに、内閣へ這入る密約があるのだ」といふことを頻に吹聴して、攻撃を加へた。所が、自由黨の内部には非板垣派があつて、其牛耳を執つて居たのが、今の大石正巳、それから馬場辰猪、末廣重恭などといふ連中であつた、改進黨は大隈が内閣を迫出されて、民間へ下つてから組織した政黨であつて、自由黨は其主張する所に大差はなかつたけれど、全く立場を異にして居たのだから、集つて來た人の氣風が違つて居る所から、激く反目して互に争ふて居た、少しでも自由黨の方へ疵の負くやうなことがならば、大概のことは割を掛けても、騒ぎ立てる傾きがあつて、計らずも板垣の洋行費に就いて、あの貧乏な板垣が、何うして莫大な洋行費を作つたらうか、それが甚だ疑はしいといふやうな風説を立て傷けやうとした。然るに自由黨中の非板垣派は、得たり賢しき之を利用して板垣に洋行中止を迫つたのである。

抑も自由黨が組織された時分に、其總理として戴くには、後藤象次郎が良いといふ説も、板垣退助に限るといふ者も、二派に分れて非常な喧嘩があつた。其結果、後藤は總理の候補者

たることを辭して、板垣を推薦したから、後藤の一派は閉息してしまつたけれど、實は板垣に對しては、憐焉の情を有つて居て、止むを得ずに従つて來たのであるから、何かの機會に於いて此一派が、板垣に反抗するのは當然であつた。然るに、改進黨の機關新聞が、洋行費の事を書出したので、それを機會に大石の一派が、猛然として立つて、板垣の攻撃を始めたのである。

其騒動は間もなく鎮つて、大石等は脱黨する。垣板は洋行してしまつたから、一段落は付いたやうなもの、自由黨員としては改進黨に對して、甚だ不快な情は有つて居たのである。時に星亨が、自由黨へ這入つて來て、まだ一向に勢力も無く、殆ど孤立の如き有様で、單に黨員の席に連つて居る、さいふ位に過ぎなかつたのであるが、大石等の脱黨に依つて、俄に星が黨内に重きをなすやうになつて來て、それから黨の機關たる、自由新聞を主宰するやうになつたのである。

## (三)

其頃から星は、大隈が大嫌ひであつた。板垣の洋行事件から、改進黨を憎むことは一層甚しくなつて來た、星は此機會に於いて、大嫌ひな大隈が、首領となつて居る改進黨を、美事に叩

き付けてしまへば、一面には洋行事件の復讐は出来るし、又一面に於いては、其こころから黨員の信用を博して、自分が在野黨の一人としての地歩を、確實に占むることが出来る、さいふ見込を付けて、何か事あれかしと待つて居たのだ。折柄、三菱會社と共同運輸會社の競争が起つて、端なくも三菱會社の秘密が暴露された。星は其秘密を敏くも握つて、改進黨に向つて一大痛棒を加へやう、さいふ準備に掛かつたのである。

明治十年の西南戦争を利用して、三菱會社の岩崎彌太郎が、俄に數十萬の富を成したことは、既に世間にも知られて居る事實であるが、其内容を窺へば、實に怪しからぬこころが多くあつた、當時の戦争は、今日から思へば、實に子供の喧嘩にも等しい程ではあつたが、まだ政府の軍備が、今日の如く整ふて居なかつた爲に、政府も此戦争には頗る苦んだ。殊に軍艦や輸送船に缺乏して居たので、三菱會社の汽船を、多く使用しなければならぬこころになつて、同社の船舶を總て使ふこころになつた。戦争が治つてから同社は、非常な高率の船賃を政府から得て、尙ほ種々の口實の下に、政府の汽船を無償同様で拂下たり、或は無利息で政府の金を借出して大きな汽船を外國から買求めたり、又は航路保護の名義を以て少からぬ補助金を、政府から取出した。それが爲に得た、不當の利得は容易ならぬもので、政府と同社の中間に立つて周旋の勞を取つたのは、當時の大藏卿であつた大隈重信である。岩崎彌太郎が死んでからの關係は



知らないが、彌太郎の生存して居る間に、大隈と岩崎家の関係は、非常に密接にして、且つ他に言はれぬ秘密が其間にあつたことは、當時の事情を知つて居る者は、皆了解して居る事柄である。

従つて、三菱會社と大隈の関係は、總て金錢の関係であつたのだから、此一事實を捉へて、大隈の頭上に一大痛棒を加へれば、即ち改進黨に對する國民の人氣は、一時に落ちてしまふに違ひない。星は其點から改進黨の攻撃を始めた。自由黨の立場から見れば、適當な手段であつたのである。

當時の自由新聞の主筆が、古澤滋であつた。是が又非常な能文家であつたから、星は古澤に申付けて、三菱會社と大隈の關係を許して、大いに國論を喚起すべく、毎日のやうに其論文を掲げさせることにしたので、忽ちして反響は日本全國に起つて來て、改進黨攻撃の機運は愈々熱した。そこで先づ、東京に數回の演説會を開いた。其時に演説會場へ張廻した、紫縮緬の幔幕へ、白く染抜いた文字が、偽黨撲滅自由萬歳といふ四字であつた。まだ其頃には政黨員なども、極めて眞面目な人が多かつたから、大隈が國家の財を、一人の爲に不當の支出をしたといふことに、甚く憤慨して、地方から黨員の總代が上京して、頻りに地方遊説を迫つた。星の計畫は、全く思ふ盡に倣つて、全國の人氣は沸くが如く、此演説會を歓迎するやうになつた。

たのだ、遊説部署を分ちて、全國へ檄を飛ばして、各地方に演説會を開く手筈は整ふた。果然、改進黨攻撃の効果は現はれて、改進黨といへば偽黨である、偽黨といへば改進黨である、といふやうに解釋されて、何んな詰らぬ者でも、改進黨と大隈は、國家を賊するものである、と決めてしまつて、其時分の改進黨の不人氣は、今日の政友會の比ではなかつた。

大隈が明治十四年の政變に、内閣を追出された時に從いて來た、役人上りの黨員が澤山にあつた。其中には今の尾崎行雄だとか、或は犬養毅だとかいふやうな人も居たが、兎に角、役人氣質の者が多くて、それが黨の幹部にあつて、盛に英國流の改進黨論を振廻して、自由黨は恰も野武士の集會なるが如く、誹謗を加へて居たのであるから、自由黨の方でも、非常な惡感を有つて居た。加ふるに板垣の洋行事件から、一層其反感は甚くなつて來て、偽黨撲滅の演説に依つて、改進黨の人氣が落ちたのを視るに、勢ひに乗じて益々攻撃の歩を進め、改進黨は役人氣であるとか、或は免職黨であるとかいふやうなことを、盛に言觸らした。それが又非常に人氣に投じて、其頃には地方へ行くに、改進黨は言はずして免職黨、總て言ふて居た位だ。大隈が甚く星を忌嫌つたのも、是が一つの原因であつたには違ひない。其次に星が、改進黨に向つて加へた痛撃が、例の憲政黨内閣の破壊である。

## (四)

明治三十一年になつて、議會と政府の間は、益々不穩になつて來た。到底此儘では、無事に議會を過すことは出來ない、さういふ傾向が見えて來た。殊に自由黨と改進黨が、其成立の時代から互に確執して、激い争ひを續けて來たので、公平な立場から見た有志者が、何うも此儘に打棄てて置いたならば、益々兩黨の感情が疎隔して、其争ひは激しくなるばかりで、其結果として、漁夫の利を得て藩閥政府は、愈々安全に政權を握り續けるやうなことになる。黨の主張は左まで違つて居ないのであるから、出來得る限り兩黨を合同させるやうにしたい、假に合同が難しいにしても、それに近い聯合を計つたならば、自然其感情も融和されて、兩黨が一致の力を以て、政府に對抗するやうにならう、従つて議會に於ける勢力も偉大になつて、藩閥政府が立行かなくなるに極つて居る。左様なつて來れば、初て政黨内閣の出來る時が來るのである。斯ういふやうな考を以て、頻に兩黨の間に斡旋する者が、各方面から出て來た。

然るに、兩黨の首領株の間にも、實を言へば其考は有つたのだ。けれども、兩黨が分立して居ては、藩閥政府へ對する、攻撃の力も弱いので、其反對の効力が甚だ薄かつた。それ位のことは敢て首領でなくとも、平の黨員でも分つて居るのであるが、偕て人間社會のことは、理

窟一點張ではいかぬもので、其處に感情の上から來た、行掛りが擱んで居るが爲に、何時も黨の正面の敵としては、藩閥政府がある、さういふことを知り乍ら、兩黨が互に反目嫉視して居たされば黨外の人から説かれないでも、兩黨の力を一にすれば、藩閥政府を倒すことは容易なものである位のことは、早く既に分つて居たのであるが、黨内の事情が許さないので、左様もならなかつたのである。所へ、此斡旋をする者が出て來たから、そこで兩黨が、段々接近して行つて、遂には聯合よりも、合同した方が宜からう、さういふ説も、兩黨の首領の間に起つて來た。斯うなつて來るに、自然に機運が熟して、今まで反目の度合が強かつただけに、又打解けることも早い、さういふ譯で、忽ちにして合同が行はれることになつた。

## (五)

此斡旋の勢を取つた者は、筑前の平岡浩太郎といふ人で、系統から言へば、改進黨に近い人であつた。九州に大きな炭山を有つて居て金融が自由であつた所から、盛に金を撒き散して、豪奢な生活を極めて居た。由來、我國の政黨員は、小遣錢に困るのを自慢のやうにして居たが平岡は小遣錢に不自由の無い人であつた。初は小遣錢の無いのを、自慢にして居た政黨員も、其窮苦の情態が、餘りに長く續いた爲に、小遣錢が無ければ天下の事は出來ない、さういふ考を

有つやうになつて来た、所へ平岡が乗出して来たので、俄かに勢力を得たのである。元來が文字の無い人で、別段に名論卓説もなかつたが、何ミなく豪放にして快活な、見たばかりでも氣持の好くなる、ミいふ其氣風が、甚く一般の人の氣を引着けた。其平岡が、合同に就いての活動を始めたるのであるから、存外に人氣も集つて来て、遂には兩黨の重立ちたる者も、漸く其説に動かされて、合同に賛成するやうになり掛つた、恰度、其時分に議會で政黨の衝突が甚しく、流石の伊藤首相も、殆ど議會の操縦には手も足も出ない有様であつた。折柄、兩黨の合同が成るミいふことを知つて、茲に伊藤は、從來の超然主義を擱つて、政府を兩黨の首領たる、大隈板垣の兩伯に引渡さう、ミいふ決心をしたのである。之に就いては、山縣一派の人達は非常に反對で、随分面倒な議論もあつたのだが、伊藤は一切それ等の反對説に耳を藉さず、果は山縣が顔の色を變へて、絶交するまで言ふたのさへ、平氣で受流して、遂に大隈と板垣を、帝國ホテルに聘んで、伊藤が自から進んで、政府引渡しの交渉を遂げた。伊藤と山縣の間が、遂に此問題から疎隔して、一時は和解も出来たやうだが、伊藤の死ぬまで山縣は、伊藤に對しては餘り好い感情を有つて居なかつたのも、全く是が原因であつた。

政府を押し倒しても、政權を握らなければならぬミいふ、考を有つて居た兩伯は、却つて伊藤の方から逆襲されて、「サア政府を引渡すから受取つて呉れろ」と言はれたのであるから、今更に

「内部の折合が悪いから受取れませぬ」などミいふ、間拔けなこも言へないので、それから一層合同の相談が進んで、遂に兩黨が解散して、茲に憲政黨と稱する、新なる政黨が産出されたのである。

斯うなつて見るミ、兩黨の人達は、非常に忙しくなつて来た。自分の黨は解散するミ同時に新しい政黨は造らなければならぬ。改進黨の本部は引拂つて、自由黨の本部へ合併する。それから名簿の訂正をするミか、左様な詰らぬ事務のこにまで、殆ど徹夜の有様であつた。如何に伊藤が、政府を引渡すミいふても、引受ける方の大隈と板垣が、其率ゐて居る政黨を合同しなければ、縦令政府を引受けた所で、到底之を維持して行くこは出来ない。其事情はよく兩黨の人達も呑込んで居て、中には合同反對の議論も有つて居た者もあるが、何しろ長い間握つて居た政權を、藩閥の政治家たる伊藤が快よく譲り渡すミいふ場合に於いて、自分の方の内幕が和熱しないから、引受けるこは出来ませぬミいふやうなこは言へない。又何時までも議會で、慷慨悲憤の演説ばかりして居るのも能事でない。其合同に反對する者も、遂には閉息してしまつた。乍併、合同の説は勢力があつても、此時に伊藤が、政府の引渡しをするミ言出さなかつたならば、或は合同の相談は、中途に破れたかも知れない。尤も、之に就いては改進黨の方は、餘り合同反對は無かつたけれど、自由黨の方には、非常に強い反對があつた。それは

林有造が必死になつて奔走して、幸に鎮撫の効を奏した。茲に於いて新常座で、兩黨の大會を開いて、先づ解散を決議して、然る後に、憲政黨組織のこゝを決定したのである。憲政黨が成立して見るに、政府の引受も容易く出来る譯で、伊藤の方へ早速引受の交渉を開いた。其間に於いて伊藤が、山縣の一派に壓迫されて、非常な妨害を受けたことは事實であるが、何時も面倒が起きて来るに、直に腰の弱くなる伊藤も、此時は大決心で、數十年來共に提携して来た山縣を絶つてさへも、「政黨内閣の要求は、國民の聲である。此際に於いて之を容れなければ、我々藩閥出身の政治家は、天下の人から誤解されることになるのであるから、何でもやり付けてしまふ」といふ意氣込で、愈々、先帝陛下の御前に罷出で、此旨を奏上に及んだのである。

## (六)

大勢は急轉直下、大隈の板垣に對して、参内の御沙汰が下つて、兩伯は早速に参内した。豫め伊藤と相談して置いた通り、陛下よりは伊藤内閣の後を承けて、新に内閣を組織すべきことの命を受けた。所が、茲に怪しからぬことがあつたのは、此大命を拜する際に「海陸の大員は何ういふこゝに相成るか」の御下問に對して、兩伯は「海陸の大員は据置き儘」といふ

意味の奉答をした。僕等は其當時、非常に此こゝに就いて憤慨して、板垣伯に迫つたこゝもあるが、抑も藩閥政府に代つて、初めの政黨内閣を組織する場合に「海陸軍の大員だけは特別扱ひにする」といふやうな卑怯なこゝをするならば、未來永劫、此方面だけは手を着けることが出来ないこゝになる、海陸の軍事に對する實際の設備だとか、或は事務だとかいふやうなこゝは、それは正式の軍人でなければ、勤まらぬかも知れないが、大臣として大局の上から、海陸軍を統べて行くといふのに、軍人でなければ勤まらぬ、いふ理窟は無いのである。況や議會の開ける毎に、海陸の二省に對して、幾度か攻撃の態度を以て向つた兩黨の首領が、愈々内閣組織の大命を拜する場合に「此二省だけは私共の方では大臣がありませぬから御受けが致し兼ねます」と御答をしたのは、實に政黨の面目を汚す所以であつて、又將來に悪例を遺すものであるに、いふのが僕等の議論であつた。兎に角、兩伯は左様いふ御答をしたのであるから、如何にもするこゝが出来なかつた。此頃になつて頻に、海陸軍の大員は文官制にしなければならぬ、といふやうな議論を唱へて、世間の人とも一齊に拍手して、之を迎へて居るやうであるが、そんなこゝは今更に議論をしないでも、彼の時に出来たのである。それを自から御免蒙つたのが兩伯なのであるから、此一點に於いては確に兩伯に其責任があると思ふ。爾來、海陸兩省に於ける弊害の甚しくして、動もすれば軍人萬能の傾きになつて、夜が明けても日が暮れても

軍人でなければならぬといふが如き有様になつたから、海軍收賄問題のやうなことも起つて来たのである。若し憲政黨内閣組織の時分に萬難を排して、海陸の大臣も文官制度に直してしまつたならば、今日になつて我々が常に疑の眼を以て、此兩省を見るやうなことは無くて済んだらうと思へば、甚だ遺憾に堪へぬ次第である。

もう一つ言ふて置きたいのは、愈々内閣を組織する場合になつて、誰が總理大臣をするか、といふ問題が起つた。是は當然起るべき筈であつて、大隈と板垣が相並んで、内閣を組織するのであるから、要するに兩頭の蛇である。餘程巧く其間の調和を取つて行かなければ、折角組織した内閣は、二進も三進も動けないことになつてしまふ。殊に總理大臣は何方が引受けるかは兩黨の間にも大分議論があつた。都合に依れば此一問題に依つて、折角に受けた大命も、御辭退申上げなければならぬやうなことになるのであるから、之に就いて兩黨の首領株が、苦心したことは非常なものであつた。板垣よりは大隈の方が、何事に就いても元氣で、且つ派手であるから、世間の人からは大隈の方が、歡んで迎へられる傾きがある。乍併、何事にも理性を基として、容易に浮いた調子にならない、其着實な所に板垣の眞價はあるので、其閣歴の上から言へば、板垣は維新の元勳の一人であつて、大隈は其下風に立たなければならぬのだ。此頃になつて、大隈を無上の偉人なるが如く思ふ人は、輕卒に論評を下して、大隈が維新の大業

をなすに就いて、偉大なる功績のあつた如く吹聴して頻りに嘯し立てる者もあるが、それは不詮索も甚しきものであつて、若し大隈が正直な人ならば、全く有難迷惑を感じるであらうと思ふ。大隈は維新の大局には、何等の關係も有つて居なかつた。長崎邊を浪人で押廻して居たり佐賀の城下で攘夷勤王の議論を唱へて、藩の老臣から叱言を言はれたこと位はあるかも知れないが、中央の舞臺へ乗出して、此大業を定むるに就いて、何等の功勞もなかつた。佐賀藩の人士としては、其功勞のあつた者は、江藤新平の外には無い。板垣は山内容堂の命を含んで、常に江戸や京都へ出て居た關係から、西郷、木戸、大久保の三傑とも、常に往來して居て、容堂が一片の情誼から、徳川の窮境を救はうと努めた時分にも、容堂に強諫して其非なるを論じたことがある。又戊辰の戦争には、大兵に參軍して、奥羽の戦鬪にも、世に知らるゝ程の功名を立て、それから一度、高知藩へ歸つて、大參事を勤めて居た所へ、西郷が迎へに行つて參議に推薦したのである。斯ういふ閣歴を有つて居た人であるから、維新の元勳といへば、西郷、木戸、大久保の三人を數へて、其次には板垣に指を折るのが當然だ。又明治六年に、征韓論の爲に參議を辭してから、民選議院設立の運動を始めた。それ以來の板垣は、十年一日の如く草鞋を穿いて六十餘州を遊歴し、國論を喚起した末、遂に國會開設の詔に接する迄になつた。然るに大隈は、明治十四年の政變に、自分の據るべき地盤が無いので、止むを得ず國會の必要を説

いて、それが爲に井上と大喧嘩をして、免職の時期を早めたに過ぎないのである。又政黨を組織した點から言ふても、板垣が自由黨を組織したのは、大隈が改進黨を組織したよりも以前である。斯ういふことの前後を以て、其人を評論するのは、餘り感心したところではないけれど、先輩後進の點から言つたならば、斯ういふことも論議にはなる。されば政黨内閣が組織される場合には、大隈の方から板垣に譲つて、總理大臣たることを慫慂す可きである。聞く所に依れば、兩伯が御前へ出て、内閣組織の天命を拜する際には、先づ板垣に對して、其御言葉が下つて、それから大隈に御言葉が下つたのだいふから、矢張り其順序から言ふても、板垣の總理大臣が當然である、所が、内閣組織の場合に、黨員の間に議論が起つて、双方相譲らない、若し愚圖々々して居れば、此一點で何事も破れてしまふのであるから、左様いふ事になる。板垣は存外淡泊であつて、強ひて他を押退けても、自分が其椅子に着かなければならぬ、いふやうなことは言はぬ、最後に帝國ホテルで、兩伯が會つた時分に、此相談になる。板垣は大隈に向つて「我輩は何うでも宜いから、先づ君が總理大臣をやりたまへ」と言ふたので、大隈は「左様か、それでは僕がやらう」と簡單に受けてしまつた。大隈に自信があるから、受けたのであると言へば、それまでのことであるが、斯ういふ場合には、多少の禮節を以て應酬す可き筈のものだが、大隈は頗る無遠慮に引受けたのであつた。他の大臣の當嵌をするところになる

ミ、如何にも候補者が多いので、其取捨に就いて亦一苦みする。第一に困つたのは外務大臣である。是は鳩山和夫が多年の希望であるから、何でもなるといつて大運動を始めた。左様なつて來る。自由黨の方でも、負けては居ない。鳩山の如き者を外務大臣にするなら、俺の方に斯ういふ人間がある」といふて騒ぎ出した。其紛争が甚しくなつて來たので、大隈が「外務大臣は俺がやるから、鳩山は當分次官で我慢して居れ、そのうちに機會を見て、俺が罷めればなれるのであるから」と言ふて、抑へ付けてしまつた。

此内閣の役割に就いて、自由黨の方では、星を何うしても入れたかつたのだが、星を内閣に入れることは、改進黨の方では、最も痛苦したのだ。板垣は如何に理窟の多い人でも、何うか斯うか誤魔化しは付くが、星を入れた日には一大事であると言ふて、之に就いては大隈が、自から反對して大分紛擾した。苦し此時に星を、内閣へ入れて置いたならば、あの内閣は豈夫に、三月や四月で潰れるやうなことは無かつたらう。其代り改進黨の人達は逐出されて、純粹の自由黨内閣が出来たかも知れない。けれども、それを恐れて改進黨の人が、星を拒んだといふ所に、一寸面白味がある。當時の星は、米國の全權大使として、華盛頓に居たのであるから、新内閣組織には、何等の關係も有つて居なかつたのである。

## (七)

星が米國の全權大使になつたに就いて、一場の物語がある。明治二十七八年の日清戦争が終つて、井上侯が朝鮮大使になつた。其處へ星が、朝鮮政府の委囑に依つて、司法部の最高顧問になつたのである。其ころが決つた時には誰でも、強情な星に疇穢の井上が、逆も兩立する譯はない、必ず喧嘩をして歸るに違ひない、斯う推測をして居た。所が其推測は全く間違つて、井上は深く星を信じて、星の方では無遠慮に、何でも構はずやり付けるといふ風であつたが、井上は更に掣肘を加へなかつた。それまでは井上も星を以て、在野黨の恐るべき猛者である、さういふやうな觀察をして居たのだらうが、星の政治意見は此際に井上へ吹込んで、井上の實際の手腕は認めるし、其議論も聽いて見れば、政府の破壊を努める者このみは思へない左様なつて見る、井上の凝性で、星に對する信用も非常に厚くなつて來た。彼是する中に、井上は匙を投げて日本へ歸る。星は其後も朝鮮に残つて居た。それから王妃弑殺事件が起つて間もなく朝鮮政府との關係を絶つことになつて、再び東京へ歸つて來た、其頃から井上との間に交渉が進んで、星を米國の全權公使に推舉したのであつた。星は藩閥政府に對しては、少しも假借なく、随分惡辣だと思はれるまでに反對して、之を苦

めて居た。然るに星が俄に政府の役人になつて、亞米利加へ行くことになつたので、自由黨員は皆眼を割いて驚いた。殊に星の配下に屬する連中は、一同打揃ふて星を訪ねて、頗に其不都合を詰つたのであるが、星は之に對して「外に居て藩閥政府を打壞すのも、内に這入つて之を行ふのも、それに區別は無い筈である。殊に我輩の方から頼んでなるのではない、政府の方から、是非やつて呉れといふのであるから、引受けて行くまでのことで、其役は外國の公使であつて見れば、自分が常に懷抱して居る、意見の一端を行ふのにも、極く好都合である、藩閥政府へ降参をしたのでもなく、今まで執つて來た主義を擲つてもない。海を行くも陸を行くも其到着點は一つなのであるから、暫く我輩のすることを見て居給へ」といつたやうなことを聽かせて、不平連中を制へ付けて、星は亞米利加へ渡つたのである。星が亞米利加へ行つた後で、憲政黨内閣が出来るやうになつた。自由黨に對する星の地位は手腕で、而して其功勞に對しても、新内閣が出来た場合には、星を大臣に推すのは當然であるが、實は星に對する土佐派の感情が甚だ善くなかつた上に大隈を首め改進黨の連中も、星を嫌ふことが甚しかつたので、遂に星の海外に在るを幸ひして、入閣させぬやうに謀つたのだ。星は内閣を安全に維持する上に於ても、必要として謀つたことであらうけれども、今日から之を見れば却て失策であつた。是が爲に憲政黨内閣は、潰滅の悲運に沈むことになつたのである。

(八)

新らしく憲政黨は出来ても、長い間、互に睨み合つて居た感情は、一朝にして融解すべき譯は無い、従つて、一黨派の中に二つの異分子が集つて居るのだから、本部なぞへ行つて見ても、兩派の者が矢張り別々に集つて、例へば團圓や將基のやうな遊技に至るまでも、全然室を別にし組合を異にして、遊んで居るさうな始末だ。逆も眞面目な黨の問題に就いて、兩派が融和の出来る譯も無く、其の反目嫉視は、日に益々甚しくなつて行くばかりであつた、加之獵官運動が盛に起つて、兩派から候補者を押立て、或は縣知事であるとか、或は局長であるとか、様々な方面に競争が起つて来る。それを一々取捨するのは、大隈と板垣の相談からであるが、其相談が何時も自分の島へ多く水を引かうとする考があつて、纏りが悪い。知事や局長の一人を決めるのにさへも、非常な紛擾を惹起す、一方ではそれになりたいたい連中が、理窟も事情も考へずに、眼の色を變へて騒ぎ立てる、さういふやうな次第で、閣内の間にも、それ等のことが原因となつて、段々に感情の衝突が起つて来る。折柄、文部大臣の尾崎行雄が、例の共和演説で宮中の問題になつた、今から考へれば何でも無いが、當時では實に物凄いはさきの勢ひで藩閥の連中が騒ぎ出した。東京日々新聞が全紙面を埋めて、尾崎の攻撃をするやら、宮内省の

役人は狂氣の如くなつて、尾崎排斥を主張した。尤も「我國が萬一にも共和政治になつた場合には云々」さういふやうなことは、それを言ふ人の位地から考へて見て、大いに謹慎すべきことであるが、殊に文部大臣にして、全國の教育家を集めた席上で、縱令其理窟は何うあらうとも斯様な不祥のこゝを言ふべきものではない。所が、一向に頓着なく喋つたのが累をなして、遂に尾崎は其職を退くことになつた。サアさうなるに、誰が其後任者になるかといふのが、又一問題になつた。自由派の申分から言へば「大隈が首相と外相を兼任して居るのであるから、文部大臣の椅子は自由派へ申受けるのが當然である」と、斯ういふのである。改進黨の方に言はせると、「總理大臣と外務大臣は兼任して居ても、黨の人としては大隈が一人出て居るのであるから、頭数が平均にならなければ不都合である。今は互に三人宛の大臣を出して居るものが、文部大臣を自由派から出すことになれば、一人だけ改進黨が少くなるのであるから、それは不都合である」大人氣ないさういへば、それまでのことであるけれど、斯んな議論で、毎日のやうに押返して居た。是が爲に文部大臣が、何うしても定まらないのを、大隈が例の調子で「ナニ宜しい」といふ、一人で呑込んで、犬養毅を文部大臣に推薦してしまつた。而も板垣が反對したにも拘らず、奏請の手續までも終つて、犬養は其任命を受けることになつた。全體を言へば、尾崎が先に大臣になつて、犬養がならなかつたのは、可怪しな次第ではあるけれど、矢張り、改進黨の



方でも、大臣の割振に就いては、候補者ばかり多くて、頗る其取捨に苦んだ結果、犬養は極めて理解の良い人であるから「俺はならんでも宜いから、尾崎を先にしてやつて呉れ」さういふたので、尾崎が先に文部大臣になつたのであるから、今其尾崎が退いた以上は、何うしても犬養を其後任者にしなければならぬ、さういふ事情もあつたので、茲に於いて、犬養は文部大臣に推されたのである。

斯ういふことになるに、自由派の不平は一時に爆發した、何うしても改進黨を、内閣から叩き出してしまふか、寧ろこの内閣を打壊してしまふか、さうらかに片付けて了へよ激しい議論が起つて来て、如何に重立つた人達が、鎮撫に掛かつても其効は無く、日に益々黨員の紛擾は甚しくなつて来た。

是より先、關東の自由黨員が屢々集會して、内閣に對する不平を漏して居た。此一團を關東俱樂部と稱して、星が率ゐて居たのである。關八州に甲信の二州を加へて、其全體の黨員は、星が率ゐて居たのだ。そこで内閣が紛擾く、黨内が騒擾つ、それが段々激しくなつて来るに、俱樂部員が集會して、「此際何うしても星を、亞米利加から呼返して、改進黨に對抗させなければ、自由派の勢力は、遂に改進黨の爲に蠶食されてしまふから、此上は星の力を待つ外は無いさういふことになつて、俱樂部員を代表して、星に、「一刻も早く歸朝して呉れろ」さういふ電報を

打つことになつた。

亞米利加に居た星も、憲政黨内閣の成立の事情は、友人や部下の者からの報告に依つて、よく知つて居た。其後の経過も分つて居たが、頻に關東俱樂部の連中から、電報や、手紙で、歸朝を促して来る。自分も改進黨に對しては、好い感情を有つて居なかつたし、殊に大隈に對する反感は甚しかつたので、急に星は歸朝することになつた。此時に改進黨の方にも、星の歸朝のことは知れたので、大隈が驚いて、此場合に星が歸つて来ては、事愈々面倒なりと觀て取つて、直に星へ「歸朝してはならぬ」さういふ電報を發した。所が星は、既に華盛頓を出て、桑港までやつて来るに、大隈から歸朝差止めの電報が着いた。然るに星は、其電報を開かず封の儘、靴の中に打込んで、平然歸朝してしまつた。横濱へ着いて郵船會社の待合室へ這入るに、外務省の書記官をして居た、三橋信方さういふ男が、大隈外相の代人としてやつて来て、「大臣閣下から貴下に打つた電報は御覽になりましたか」さう聽かれて、星は思ひ付いたやうに「ウム、左様であつた、桑港まで来るに電報は来たが、忙しかつたのでツイ見るのを忘れて、靴の中へ入れて来たよ」さう答へ乍ら、後を振返つて從者に、其電報を出させて、三橋の前でブツリ封を切つて、一讀した後、星は額に手を當て、「ヤア飛んだことをした、歸つて来てはいかぬさういふのであつたか、オイ三橋君、何うしたもんだらう」随分人を馬鹿にした仕方で、流石の三橋

も之には驚いた。亞米利加に居る者に、歸つて来てはならぬといふ電報を打つたのを、横濱へ来てから、何うしたもんだらうと相談をした所で、もう後の祭で仕方がないではないか、星の遣方は斯ういふ風であつたから、大隈が星を歡ばざるのみならず、非常に恐れたのも無理はない。此時が、最も自由改進黨の兩派の、軋轢の甚だしい時であつて、板垣は既に辭表を出すに、願いで居た際なのであつた。そこで星は、早速板垣に會つて「閣下が此場合に辭表を出してはいかぬ。何故いふならば、閣下が出した辭表は、大隈が必ず直に御前へ差出して、自分の方の者だけで、内閣を組織してしまふに極つて居る。詰り言へば、自由黨と改進黨とが、一つになつて出来た内閣を、改進黨の爲に横奪されて、自由黨は指を銜へて引込まなければならぬのであるから、何うせ潰れる内閣ならば、全潰にしてしまはなければ不可ん。閣下の辭表は出すべきの時機があるから、それまでは出してはいけません」と言つたけれど、一旦氣の板垣は、もう極度まで怒つて居たのであるから、何うしても言ふことを肯かない。そこで星は「宜しい、さういふ譯ならば辭表は、私が預つて置ませう」と言つて、板垣の辭表は星が預つて、懐に振込んでしまつた。さうは知らず、大隈の方では、板垣が愈々辭職するに聞いて、得たり畏しんで、其辭表は何時でも、御前へ差上げるこゝが出来るやうに、宮内省へ出掛けて行つて、大隈が其係の者に「板垣の辭表が出たら、直ぐ取次いで差支ない」といふ、相談までして置い

た。星は大隈の遣口を、よく呑込んで居たから、自分の懐に板垣の辭表を入れて、濟し込んで居た。其處に、星の凡ならぬ手腕はあつたのだ。

## (九)

それから星は、頻に同志の糾合をして、茲に憲政黨内閣の破壊を策し、又党内から改進黨を追出して、憲政黨の看板はいふ迄もなく、本部までも乗取る計畫に掛かつたのである。

内閣の組織は、大隈と板垣の兩伯に對して大命が下つたのであるから、其中の一人が、圓滿に職を退くのならば格別、若し紛擾の結果として退くことになれば、残る一人で、尙其内閣を維持するといふことは、最初に大命を拜する時の、形式から論じてても不可能のこゝである。そこで板垣の辭職が、内閣の運命には、非常な關係を有つて居るのである。而も其辭表を、星が懐に入れて容易に出さない。散々揉合ふた末に、愈々内閣は、大隈と板垣の争ひの爲に、維持するこゝが難しいといふことを、誰にでも分るやうにして置いて、それから板垣の辭表を出せば、何うしても大隈が、後に残つて内閣を維持するこゝは出来なくなる。それをやるには先づ第一に、憲政黨を破壊するに限る。即ち改進黨を追出して、自由派のみで本部を占領してしまふのが、第一の良策である。それには犬養が、一番に邪魔になるのであるから、先づ之に

喧嘩を吹掛けて、本部へ来ないやうにしてしまはなければならぬ、さういふ計畫で、これを受持つたのが利光鶴松だ、黨の組織變更やら、内閣の椅子争ひやらで、大分喧しい議論が出て来た時であるから、本部の會議室の空氣は、何もなく濁濁して、今にも低氣壓が起らうとする。利光は今でこそ、商界の悪魔の如く言はれて、大阪の岩下を對照して、デゴマなぞさういふ紳名を付けられて居るが、其時分には自由黨中の、手腕家の一人であつて、星の配下に屬して居た。犬養の眼からは、丁稚小僧にも等しいほかに、位地の相違はあつただけれど、新進氣鋭の利光は、犬養を美事に本部から追退けて、星の計畫の第一策を成遂げやうさういふ意氣込で、到頭犬養に喧嘩を吹掛けた。詰らぬ議論の争ひから、犬養に向つて、「君のやうな大限の乾分を云々」さういふので、犬養は憤然として、利光を睨み付けた。「我輩を大限の乾分は何事か」負けぬ氣の犬養は、あの細い體をして居ても、愈々さなれば、何時も喧嘩腰である。肩を張り拳を握つて、今にも飛掛かりさうな勢で、利光に喰つて掛かつた。利光は犬養がさういふ風に、怒つて呉れるのを待つて居たのであるから、益々落付いて「君が何程威張つても、世間の人は君を以て、大限の乾分として居るのだから、我輩が今君に對して、大限の乾分さういふた所が、別に怒る筋合もなからう」と重ねて言ひ放つた。犬養は「何を生意氣なことを吐すか、貴様等の如き小僧が」と言つて立上つた。それを見て居た楠本正隆が「マア〜」と言つて中へ這入る、

其他の者も仲裁に掛かつたから、そこで犬養はブン〜怒つて、會議室を出て行つた。利光の思ひ通りに、犬養は怒つてしまつたのである。

犬養が怒つて出て行けば、其後は楠本一人である。是は又有名な、間拔男の紳名の付いた、ヌーボー式の男であつたから、之を擲擲弄弄するのは、利光としては朝飯前の仕事である。殊に自由黨には、昔から院外者と呼ばれて、壯士から仕上げて来た、一團の有志者がある。議論でも腕力でも、何でも持つて来いさういふ、古強者が別室に控へて居て、盛に聲援もすれば、脅喝もする。例のマヌ男は、利光の爲に散々弄弄されて、ノソ〜歸つて行く。先づ選舉法違犯で牢へ這入つた鈴木萬次郎は、改進黨の幹事として、本部に詰めて居たのだが、是も生意氣な口一つ二つ叩いたので、壯士に襲はれて禿頭を抱へて逃出す、さういふやうな仕儀で、本部の實権は、全く自由派の握る所になつてしまつた。

其晩の内務大臣官邸には、自由派の重立つた者が集つて、頻に密議を凝して居るのだ。それは明日の午前九時から、神田の青年會館に開會さるべき、憲政黨の臨時總會に對する、策戦に付いてのことである。此臨時總會は改進黨の者へ相談なく、自由派の幹部から觸出したのであるから、改進黨の方では「甚だ怪しからぬ總會であつて、我々は關知する所でない」といふやうな議論を、盛に唱へて居たが、兎に角、憲政黨の幹部さういふ名義を以て、召集する總會で

あるから、若し此總會が成立すれば、有効無効の争ひをした所で、其争ひは遂に後手になるのであるから、寧ろ進んで、此總會を蹂躪するに若かずといふ、議論をする者もあつて、改進黨の意氣も、亦天を摩するの概があつた、そこで自由派の方では、明日の臨時總會を、改進黨の爲に蹂躪されるやうなことがあつては、甚だ不面目であるから、一瀉千里の勢で、此總會は終らうとしたのだ。それには自由派の全力を擧げて、上下一致の力を以て當るの外は無い。即ち總會の座長には、江原素六を推し、開會の趣意を議題の説明は、星亨が自から其任に當り、原案賛成の發議は、九州の征矢野半彌、四國の西原清東の兩人が、其役廻りになつて、他の者は一切議論をせずに賛成して、決議が終る、直に散會することに定めた。即ち第一の案が、憲政黨を解散すること、第二の案が直に憲政黨を組織すること、前の憲政黨は、自由改進黨の合同から成立したのであるが、それを解散して、今度組織する新なる憲政黨は、自由派のみで組織するのであるから、此形式を以て直に監視廳へ、解散届を結黨届を同時に提出して、其手續が終つてしまへば、本部は勿論、改進黨の方から運んで来た、電話其他の什器に至るまで、總て自由派の専有になつてしまふのだ、其處が星の一流で、思切つた遣方ではあるが、斯ういふ法式を以て、明朝の總會は、息を吐く間も無い位に、迅速に運びを付けてしまはう、といふことになつた。それに就いては無論、腕力沙汰も始まるに違ひないから、相當の準備をしなければ

ならぬ、といふことになつて、森久保作藏が引受けて、三多摩から二百人餘の有志者を召集する。同時に僕が引受けて、東京市内の壯士を驅集め、會場の内外を警戒して、若し一人でも異論を言ふ者があれば、直に引出す、抵抗する者があれば、叩き付ける。一人や二人は死人が出来ても止むを得ないといふ、意氣込を以て、悉皆夜の中に其準備が出来てしまつた。

(10)

是だけの準備をしたことが、改進黨の人に知れぬ筈はない。よく分つて居たのであらうが、さういふことになる、改進黨は洵にお氣の毒な譯だが、逆も自由派に對抗することは出来ないのである。初は鼻息荒く、腕力沙汰にまでも訴へる、といふ議論は盛であつたけれど、愈々自由派の兵備が整ふて、サア来いとなる、改進黨は遂に畏縮してしまつて、ムザムザ城を明渡すことに、決議した譯ではなからうが、自然の勢に任せて、善後の策を講ずることになつた。偕て、愈々總會の當日は来た。時刻前に續々會場へ這入るのは、自由派の者ばかりで、改進黨の者は、稀にボツ／＼這入つて来る位であつた。内外の群集は實に凄じいばかりで、自由派の壯士や有志者が、或は仕込杖、或は鐵の棒、それ／＼に兇器を携へて、イザいへば、忽ち血の雨を降らさん勢で沸き返へる。此光景を見たばかりでも、改進黨の者は手も足も出

ない、唯大勢の趨く儘に任せる外は無かつた。開會の時刻になるに、正面の壇上に立現はれた星は、「今日の會合は憲政黨の總會である。通知は漏れなく出して居るが、缺席をして居る者も多々ある、これは自から權利を放棄したものと思ふ、此會議に出席した者は、憲政黨の存亡を決するの權利のあるものを見て、是より直に總會を開くことにする、就いては座長を一名選んで、總て會議法に依つて、總會を取締りたいと思ふから、我輩に其指名權を與へて貰ひたいが、何うであるか」

「言ふに、一同はヒヤ／＼言つて叫ぶ。そこで星は、再び立つて「然らば江原素六君を以て座長にするから御同意を願ひたい」盛な拍手が起つて、江原は座長席に着いた。星は原案の説明者として、三度起つたのである。

「諸君、今日は憲政黨の總會であつて、此總會の決議を以て、憲政黨を解散したいと思ふのである。即ち今の憲政黨は、舊改進黨と我自由黨の合同して成立したものであるが、全體、此兩黨は、其根本の主張から違つて居るのみならず、兩黨に屬する人の性格から經歷まで、全然異つて居るのであるから、之を打つて一丸にして、一黨の中に收めるといふことは、根本から間違つて居たのである。殊に大隈重信の如きは、我々が最も嫌ひな一人であつて、彼は會で大蔵卿在任中に、國家の財を以て、三菱會社の腹を肥したのみならず、爾來、同社との因縁は最も

深くして、常に岩崎家との聯絡が付いて居るのである。加之、常に觸殺町や兜町へ代人を送つて、相場に耽つて居るのだ。苟も一國の政治に任する者が、相場をするといふが如きは、甚だ以て怪しからぬことである。斯様な品性の劣等な者を戴いて、總理大臣にして居るといふが如きは、國家の體面を汚すの甚しきものである」

例の調子で、大隈の人身攻撃まで始め出した。此時に流石に、這入り込んで居た改進黨の者も堪らなくなつたか、ノ／＼を叫ぶ者もあれば、立つて反對の意見を述べやうとする者もあつた。それが爲に一瞬、場内は鼎の沸くが如き騒動になつたが、四五人の者が摘出されて袋叩きになり、大勢は此有様で、遂に星の説明に基いた。憲政黨解散の案は、直に満場一致で通過するに至つた。黨員を代表して、演説は、征矢野と西原がする。是は又體軀の非常に偉大な、而して音聲の朗々として居る、千人餘集つた人の中に毅然として立つて、堂々賛成演説を始めた時には、今まで此兩人に、大切な代表演説をさせることは不都合である、いつて反對した者も、成程星は人を觀ることが上手である、會戦は斯ういふ風にやらなければならぬ、といふことの會得が出来て、其指名を誤らなかつたことに感心したのである。

斯ういふやうな譯で、遂に憲政黨は、解散の決議をするに同時に、新に憲政黨を組織することを決した。新規に選ばれた幹事、舊の幹事が相携へて、芝の警察署へ駆付けける。それは解

散居し結黨届を同時に出すのであつて、當時の警視總監が、自由派の西山志澄であつたから、一も二も無く、其手續は終つたのである。そこで本部へ、引揚げて来た一同は、改進黨に屬して居る事務員から、小使の末に至るまで、片端から追出してしまつて、本部は全く自由派の乗取る所になつたのである。斯かる事情で、本部を乗取られたのであるから、改進黨の者も、今は沈黙して居ることは出来ない。それから遽に壯士を驅集めて、本部を襲撃するといふやうな風説が傳つて来た。そこで自由派の壯士は、皆結束して本部へ詰め掛ける。何れも仕込杖を携へ、或は短銃を持つて、イザいへば直に血戦をしようといふ、意氣込で控へて居た。殆ど三晝夜は、斯の如き有様で警戒して居た。唯一回だけ改進黨の壯士が襲ふて来たが、是は苦もなく撃退してしまつて、今は全く自由派に依つて、憲政黨本部は占領され終つた。

茲に於いて、改進黨の人々も止むを得ないから、憲政黨の結黨届を出す。警視廳で受け付けない、先に届出た憲政黨があるのに、更に憲政黨の届出を認むることは出来ない。法律を楯にしてのこであるから、議論をしても駄目であつた。改進黨は苦紛れに、憲政黨といふ名を付けたのである。賣藥屋の自家争ひちやあるまいし、一方は憲政黨と稱し、一方は憲政黨本黨と稱へ、此方が本家だといふ争ひ位馬鹿なことはない。それから電話や什器の類で、改進黨派が持込んだものを渡して呉れいふ、談判が始まる、自由派は底意地悪く、何うしても渡す

こことが出来ない、と言ふて頑張る。幾度かの交渉があつて、遂に電話だけは返して、結局は付いた。

憲政黨本部の乗取は出来たから、そこで板垣の辭表は出すことになつた。同時に林も松田も辭表を出して、自由派の者は内閣から退いた。何う大隈が一人頑張つても、改進黨のみを以て内閣の組織をすることは許さぬ事情になつて来た。據所なく、大隈は内閣不統一の責任を負うて、辭表を捧呈することになつて、憲政黨内閣は是が爲に瓦解してしまつた。今日になつて兩派の者が、互に責任の塗合で、或は自由派が悪いとか、或は改進黨が悪いとかいふて、動もすれば争ふて居るやうだが、僕に言はせれば、何方も悪かつたのだ。大隈が板垣の正直なるに乗じて、我意を行はんとしたのが、第一の誤りであつて、又板垣が、大隈と相和して行くことは出来ぬ、といふのを、見抜くことが出来ないで、輕々に合同を決したのが第二の誤りで、折角に出来上がった政黨内閣は、斯の如き失態を演じて、忽に倒れたのであるが、兎に角星の大隈を嫌つたことは一通りでなく、大隈も亦星を煙たく思つたことは非常であつた。今日のやうな大隈全盛の場合に、自由派を基礎として出来上つた政友會が、大隈派に斬捲られて、踴躍して居ることを思ふに、當年の星の怪腕を思ひ出すには居られない。今年星が死んで十六年目になる、僕は當年のこことを回憶して、獨り慨然として居る、話せばまだ色々材料はあるが、今度

は此邊に止めて置く。

### 安藤對馬守

(一)

幕末の政治家としては、井伊大老を第一の人物として、世間では一般に認めて居る。又歴史の上でも、左様なこゝになつて居るが、實際に於ては、安藤對馬守の方が、政治家として手腕もあつたし、實際の畫策も多ほかつたやうに思はれる。井伊が大老になつてから、將軍家定の繼嗣問題も決定して、又開國條約の調印も無事に済んだ。さういふ關係から、井伊は幕末に於ける、唯一の政治家の如く、世間の人に決められたけれど、唯是だけの事情を以て、井伊を第一の政治家として、断定することは出来ぬ。將軍繼嗣の問題は姑く措いて、開國條約の調印に付て考へるに、あの時代の大老としては、假令井伊でなくとも、大老になつた以上、此調印は爲すに濟まなかつたのだ。井伊が一個の見識を有つて居て、調印を済ませたといふ解釋は、餘りに井伊を買被つて居る。若し仔細に調べて行つたならば、井伊が開國主義の人であつたか、それとも鎖國主義の人であつたか、といふこゝさへ頗る疑問が多く、僕等の見る所では、井伊は鎖國主義の人でないにしても、それと同時に、開國主義の人だとも思へない、其證據や事實

は澤山にある。兎に角、井伊が開國條約に調印したのは、切羽詰つた餘儀ない場合にして、調印したに過ぎないのだ、といふ見解が、公平な判断であらうと思ふ。而して井伊が亡き後の幕閣を引受けて、切つて廻したのが安藤である。井伊は單に條約に調印をしただけだが、安藤は其條約の實行に付て、非常な苦心をしたのみならず、是が爲に攘夷派の、極端な迫害を受けたにも拘らず、断々乎して條約の實行をなした點に於て、此人の偉い所が現はれて居る。井伊は江州彦根で三十五萬石、徳川家に深い縁故があつて、關西の諸侯の頭を抑へて居たのであるから、安藤の磐城平で、僅に、三萬石位の小さい、大名としての身分に比べれば、到底比較にもならない程に、上格の大名であつた。従つて世間の人の注意が、井伊の方に多く注がれて、安藤を見るこゝの極めて輕かつた、といふ點もあつて、安藤は實際に於て、手腕もあり且つ功勞もあつた人なるに拘らず、井伊程に世間から尊敬せられなかつたのは、洵に氣の毒な次第である。

初め奏者番から、神社奉行に抜けた時に、評定所の調べの席に着いた。初役の奉行は、何か難しい事件を、將軍の見て居る前で、解決しなければならぬ責任がある。其場合に安藤の振舞は、實に堂々たるものであつた。初て奉行になつた者が、初ての裁斷の場合には、將軍が其手腕を見やうとて、背後の御簾の中で、其調べ口を聽いて居るのだ、斯ういふ暗の場合に於て、

若し失策つた日には、將來の出世にも關係するからさういふので、大概な奉行は、新役拜命の時、評定所留役の組頭をして居る者の手許へ、多くの賄賂を贈つて、當日の案件は、成べく平易なものを出して貰ふやうに、暗に頼んで置くのが、慣例のやうになつて居た、然るに安藤は、愈々さういふ場合になつても、さういふ卑劣なことをせず、如何な難しい事件でも、勝手に出すが宜いさいつたやうな、風を見せたから、留役の連中が大に憎んで、一見しただけでは容易に解らぬやうな、面倒な案件を、書類の上の方に積上げて、安藤を苦めやうとした。けれども安藤は、其書類を一通り見て、立所に裁決を與へた。其裁断は實に水の流るゝやうであつても安藤は、其書類を一通り見て、立所に裁決を與へた。斯ういふやうな人物であつたから、寺社奉行にも長く居ずして、忽ちに若年寄になつた。井伊が大老になるに、其人物を見込んで、老中に拔擢したさういふやうな譯で、兎に角、安藤は普通の役人とは、大分趣の變つた所はあつた。

(三)

井伊が大老として、繼嗣問題を定めたり、開國條約に調印をしたり、其手腕は確に、普通の政治家以上ではあつたけれど、其代りに、又聊かやり過の加減もあつて、一般の非難を招いたことも少くはなかつた。殊に、安政五年の秋に起つた、大疑獄の如きは、何う最眞目に見ても

井伊のやり過ぎであつた、開國條約の調印を、朝廷が絶対に許して呉れないので、井伊は幾分の焦慮氣味で、遂に京都へ干渉するに決めた。朝廷の思召は、無論攘夷にあつたには違ひなからうが、諸藩の浪士が京都に入込んで、過激な議論を唱へて、朝廷を煽つて居るのださういふことも、探偵の結果、明になつて居るし、又全くそれに違ひなかつたのだ。之を要するに徳川幕府を倒さういふ考を有つて居る者は、誰にしても攘夷論に賛成して、假令心の中には、開國の止むべからざるを悟つて居ても、表面は攘夷論で、幕府に對抗して行つたのは事實であるから、京都に集つて居る、諸藩の浪士の總ては、攘夷派さういふも然るべきである。それと同時に、倒幕の目的を以て、活動して居たのは疑ふべき餘地はない。茲に於て井伊は、一網打盡に其浪士連を處分しやうと考へ、老中の間部下總守を、京都へ急行させたのである。それから江戸に京都に於て、引擧げられた攘夷派の志士は、殆ど百人の近きにも及んで、其中には頼三樹三郎、橋本左内、吉田松陰、村田雲藩等の人も居て、又水戸家の家來が最も多く居たのだ。何れも幕府の方針に反いて、攘夷論を唱へ、併せて幕府を倒さうとした、所謂謀叛人であるさういふ意味から、評定所の裁判に掛けて、悉く處分してしまつたのだ。重立つた者は、切腹や獄門になつて、輕い者でも流罪位の處刑になつて、疑獄の始末は付いたが、其前後に於て井伊は水戸の隠居齊昭を、駒込の邸に押籠めて、番人を附けたり、尾州の慶勝や、一橋の慶喜にも護



慎を命じたり、尙甚しきに至つては、京都へまで干渉をして、廣司、近衛、三條等の諸卿に謹慎を命ずるやうなごきまでもやつた。此惡辣なる壓迫は、甚く諸藩の有志の氣色を損じて、殊に水戸の家來は、一段其憤激が甚かつたのである。

萬延元年の三月三日、即ち上巳の節句に、登城をする井伊大老は、櫻田門外までやつて來た。所へ、水戸の浪士が、各所に潜伏して居て、一時に斬つて掛かつた。井伊の家來にも、武術鍛錬の士は多くあつたけれど、何分にも非常な大雪であつたし、而も不意に起つた、浪士の活動が、猛烈であつた爲に、井伊の家來も防ぎ兼ねて、遂々大老は首を取られてしまつた。サア左様なつて見るに、井伊家の騒動は尋常でない、苟も大名が路上に於て首を取られたに、いふやうなごきが表示になれば、何うしても其家は改易になるのが、徳川の憲法であるから、井伊は最早潰れるの外はないのである。何うせ潰れるに決つた以上は、小石川の水戸邸へ斬込まうと、多くの家來は、それ／＼に仕度をして、是から水戸邸へ斬込みの準備に掛かつた。若し井伊の家來が、水戸邸へ押寄せれば、水戸の家來も手を束ねて、其爲すに任せて置く譯はなく、必ず斬つて出て、對手になるに違ひない、左様なる喧嘩兩成敗で、水戸の家も潰れるごきになる。當にこればかりでなく、兩家の親類が澤山あるのだから、それが銘々に加勢して、戰爭同様の喧嘩が始るに定つて居る。左様なつては天下の一大事であるごきなので、御用部屋に集

つた老中は、顔の色を變へて、大騒動をして居た。けれど何ういふ風にして、此始末を付けたり宜いか、ごいふやうな、良い智慧も出ないで、唯狼狽するばかりであつた。其時に安藤は

『此事に付ては、自分に一應の考もあれば、萬事御任せを願ひたい』

ご言ふて出たけれど、他の老中は幾分か危んで、

『全體、足下に御考があるごいふが、それは何ういふ風になさう、ごいふ御所存であるか』

ご訪ねた時に、安藤は莞爾笑つて、

『彦根の家にも瑕を付けず、従つて水戸家ごの騒動も起さず、無事に此事の始末を付けたらば

宜からうご考へる、それに付ては自分に相當の考案もあるから、一時御任かせを願ひたい、

此以上のごきは隨機應變の處置を執らなければならぬから、説明をする限りでない、兎に角

拙者に御任せ下さるか下さらないか、決めて貰ひたい』

斯う言はれて見るに、他の老中には、是ごいふ名案もないのだから、

『宜しい、さういふ譯なら御任せをするから、然るべく御願ひをする』

ごなつた。

茲に於て安藤は、井伊の邸へ出掛けた。其時の騒動ごいふたら尋常でない、何しろ徳川ご興廢を共にすべき程の深い因縁のある、井伊家が潰れるか潰れぬかの界であるから、家來などは

血眼になつて、恰で狂人のやうであつた。其處へ老中の對馬守がやつて來たのだから、何うせ御家斷絶の申渡しに來たのであらうと、其狼狽は一通りでない。今の參謀本部のある所が、恰度井伊の邸であつた。安藤は取敢へず、井伊家の重役に對面して、

『此度は意外の凶變で、定めて御迷惑であつたらう、彦根殿も多少の御負傷をなされたこのことであるが、其後の模様は如何でござるか』

と、聽かれて、井伊の家來は、一寸答に息詰つた。如何であるかと言はれた所が、首と胸とが分れて居るのであるから、何とも答の仕様がなない。安藤は尙言葉が続いで、

『御怪我は軽くとも、折柄の雪風も激しく、萬一破傷風にでもなられては一大事と存する、又此やうな場合には、破傷風になり勝つものであるから、萬一の場合を慮つて、取敢ず相續届を御出しになつたら如何であるか、上様の御前は我等が御引受して、然るべく御取計ひ申す』

意外千萬にも、斯ういふことを聽かされたので、重役は益々驚いて、暫くは答も出來なかつたが、併し家が助かるいふのだから、今は躊躇する場合でない。

『御親切なる御言葉、千萬辱けなく存じます、然らば早速相續届を差出しますから、此上も何分宜しく御願ひ申上げます』

『委細心得た、一刻も早いが宜からうと思ふ、就ては彦根侯に、御目に掛かつて參ることに致す』

今まで親切に言ふて呉れたことは、嘘か真か、斯うなるに大に疑が生じて來る。首と胸が離れて居て、生きて居る筈はない。それを知り乍ら、彦根の家は助けてやる言ふた。其後から直に、彦根侯に對面したいなぞと、變なことを言はれて見るに、井伊の家來は、何と答へて宜いか分らない、安藤の心は、彦根家を立てる所存か、それとも潰す所存か、其邊が少しく分らなくなつて來た。併し、斯うなつては虎胸一つで、何うせ破れかぶれたから、會せたら宜からうといふ氣になつて、

『左様ござらば、御面會下されたい』

是から安藤を案内する、そのうちに醫者が來て、井伊の首と胸を縫合はせて、鼻の邊まで夜着を掛けて置いて、其儘安藤を案内した。後に退つて重役等は、安藤が何んな處置をするかと思つて、密に見て居るに、安藤は平然た顔で、井伊の枕計に坐つて、

『偕て、此度は意外の御災難であつたが、日ならず御快方いふ趣を聞いて、實は安心仕つた一日も早く御全快の上登城せらるゝやう、偏に神かけて御祈り申す、先づ今日は之にて御免を蒙るが、折角御自愛專一と存じます』

恰で生きて居る人に、物を言ふやうな調子で、安藤は江戸城へ引揚けた。此安藤の惚け加減に  
いつたら、實に彦根の家來も驚いたといふことである。

(三)

されば井伊は、何處までも死んで居らぬことにしての取扱で、相續届も直に受理して、將軍  
の方は、老中が引受けて、然るべく取扱つたから、其相續届は直ぐ聞き届けられ、従つて井伊  
の家には、少しも瑕が付かずに存續されることになつた。是は偏に安藤の功績であつて、若し  
此時に安藤が居なかつたならば、或は井伊家は斷絶の處分を受けたかも知れなかつた。如何な  
騒動になるか、心を苦めた老中も皆安心して、安藤の手腕を褒めぬ者はなかつた。然るに是  
までに苦心して、井伊の首を獲つた、水戸の家來にして見れば、甚だ快くない、唯井伊の首  
を獲つただけでは、今までの遺恨が、十分に晴された譯でなく、此上に井伊の家が斷絶してし  
まへば、そこで初めて溜飲が下る、思つて居た所へ、安藤が飛込んで来て、斯ういふ取扱を  
して、無事に治めてしまつたから、頗る失望するに同時に、安藤に對しては、又井伊に對する  
と同様な、遺恨を有つことになつて、是から安藤を亡き者にしよう、計畫をする者が出て來  
たのである。

然るは此計畫は、香に水戸の家來ばかりでなく、長州藩の方にも、其計畫が前から萌して居  
たのだ。安藤は井伊の亡き後は、老中の首席として、盛に開港のこころを取扱ふて居た。従つて  
條約實行に付ては、一切安藤が引受けて取扱ふことになつて、外使の接見などは、安藤が一人  
で濟せて居た位であつた。そののみならず、公儀の御用金を以て、高輪の御殿山に、各國公使  
の邸宅を新築する又自分の役宅へ外使を引入れて、長夜の宴を張つたこともあつて、甚く攘夷  
派の御機嫌を損じた、安藤といふ奴は實に怪しからぬ、井伊以上に悪い奴である、いふやう  
な評判が、段々擴つて來る。加ふるに、天下泰平では面白くないから、何か事を起さうと考  
へて居る。煽動に巧な連中が出て來て、此安藤暗殺の計畫を咬るのであるから、逆も堪つたも  
のではない。一般の人心が、日を逐ふて險惡になつて來て、安藤の命は、風前の燈にも等しく  
なつて來た。

向島の小梅村に、大橋訥庵といふ儒者が居て、是が盛に浪士の煽動をして居た。煽動に付て  
は一種の技倆を有つて居て、なか／＼に巧な煽動をやつて居た。外國奉行の堀織部正が、普魯  
西の條約に付て、安藤の意見を異にして、殿中で非常に激論をして歸つて、其晩に直ぐ自殺  
してしまつた、併し、堀が何の爲に自殺したかといふことは、全く不明であつた。唯安藤の激  
論をして歸つて來て自殺したのだから、其事が原因であらうと想像する外に、何の證據もない

のだ。此事を聞き付けるに、訥庵は直に、堀の遺書なるものを偽造して、多く集つて来る門人の前で、經書の講義をする間に、其遺書を読み聽かせて、堀が安藤の外交方針に付て、反對の意見を有つて居た爲に、遂々憤慨して自殺した。さいつたやうな工合に話して聽かせて、安藤に對する反感を煽り付けた。近世史略さか近世記聞さかいふ本に出て居る堀の遺書は、即ちこれが掲げられてあるので、實際は堀には何等の遺書もなかつたのである。斯ういふことは甚く攘夷派の人の心を咬つて、安藤に對する反感は日に強くなつて来る。横濱の岩龜樓に、喜遊といふ遊女があつた。それが何かの事情で自殺したことを聞くに、直に遊女喜遊傳といつたやうなものを作つて、自殺の事情を假想して、亞米利加人に買はれやうとしたのを嫌つて、自殺したといふ事實を捏造けて、而も辭世の歌までも作へた。それは世に有名な

露をだに厭ふ大和の女郎花、ふるあめりかに袖はぬらさじ

さいふので、門人が集つて来るに、此喜遊傳を読んで聽かせて「源平藤橘四姓の者に、枕を交す浮川竹の遊女でさへも、是程の氣概はある、況や男子に生れて、武士の家に育つた者が、一個の遊女にだも及ばぬさういふやうなことは、大に耻づべきことである」と言つて、大に激勵する。斯様なことは甚だ詰らぬさういふやうだけれど過激な人の心を咬ることは甚しく、現に今の遊澤榮一などが、横濱異人館燒討のこゝを計畫したのも、是等のこゝが原因をして居るのである。

るさいふこゝは明なる事實である。

左なきだに、安藤に對する反感の激い所へ、面白半分煽動する者があつたのだから堪らな

い、文久二年の正月十五日に、安藤は江戸城へ出仕する途中、坂下見附に於て、水戸の浪人三島三郎助等に斬掛けられたけれど、幸にして殺されるまでにはなかつた。其時の騒動は、なかなか大いさであつた、此事件があつてから、安藤の評判は益々悪くなつて来て、遂には老中のうちにも、安藤を何さなく疎んずる者が出て来た。

其年の十月になつて、京都から三條實美、姉小路公知の兩卿が、勅使として關東へ下つて来た。其結果、安政五年の大疑獄の際、死罪に行はれた吉田松陰等の改葬を公に許せ、さいふ勅命があつて、幕府は止むなく之に従ふことになつた。それと同時に、櫻田御門の騒動に付て、井伊が現に首を斬られて居るにも拘らず、之を生きて居る體にして、井伊家に何等の處分も加へなかつたのは、徳川幕府の失態であるさういふて、嚴い譴責があつて、終に井伊家は減知處分を受け、又安藤も一萬石を減ぜられて、老中は御免になつた上、蟄居隱居を命ぜられた。初は安藤の手腕の爲に、大きな騒動が起きないで、實に安藤の手腕は、大いものだに褒められたのであるが、今は却て安藤が悪いことになつて、斯の如き處分をされた。それから後は禍が打續いて、今では其曾孫が、是だけの名家に生れ乍ら、一軒の家を持つこゝも出来ないで、舊臣の

家に同居して、大學に通つて居るさいふこころであるが、幕末の政治家として最も手腕のあつた立派な安藤の如き人の子孫が、斯の如き末路に苦んで居るは、如何にも同情すべきこころであつて、地下の安藤も残念に思つて居るだらう。

### 吉田松陰の刑死

(一)

幕末に於ける長州藩の活動は、今更に事新しく言ふまでもないが、其活動の根據が、例の松下村塾にあつたこころを認めなければならぬ。抑も松下村塾とは、萩の松本村に、其塾舎が建てられたための稱呼である。世間一般には、吉田松陰が創立した如く思はれて居るが、此塾の創立者は松陰ではない。松陰の實家は杉姓であるが、父の百合助の實弟文之進が、玉木家を繼いで居た。此人が松下村塾を創立したのである。經費が續かずに休校して居たのを、松陰が文之進の許可を得て再興したのである。それからの塾は非常に盛になつて、高杉晋作、久坂玄瑞、山縣狂介、井上聞多、伊藤俊輔、品川彌二郎を首め、維新の舞臺に活躍した。長州藩士の重立ちたる者は、多く此塾から出たのである。萩の城下には、明倫館と稱する藩塾があつて、多くの者は是に入學して居たのだが、玉木はそれに満足せず、自分は獨立して、藩の子弟を教育して見

たい、この考を起して、此塾を始めたのだ。然るに此人は、極めて清廉剛直の武士であつたから、自家の生活さへも餘り裕でなかつた上に、此塾を開いてからの出費は却々に多く、清貧に安じて居る玉木の經營では、長く續く筈はなかつたのだ。藩費の明倫館があれば、強ひて私塾などを開く必要はないやうなもの、併し玉木の考にして見れば、長い間の太平に慣れて、一般の藩士が、悉く文弱の弊に流れ、土風の類廢は日を送ふて甚しくなつて來た。之を矯正するのは、藩立の學校のみに任せて置いては駄目である。上塗をした薄つぺらな教育に依つて、此土風の類廢を、打直すこころは出来ない。そこで自分が私塾を起して、精神的に藩の子弟を教へて見たい、さいふ覺悟で、折角に起した塾舎ではあつたが、經費の關係から、遂に維持するこころが出来ずに、休校するの已むなきに至つたのだ。玉木が如何に清廉な人であつたかさいふについて、斯ういふ一例がある。會て藩の重役が、玉木の人物に推服して、其生活の狀態が如何にも苦しうであるから、新に郡奉行を勤むるやうに取計つて呉れた、所が玉木の身に取つては、是が却て有難迷惑であつた。其時代は何れの藩にしても、郡奉行を一年勤めれば、三年や五年の生活費は、貯蓄するこころが出来たのである。それは何ういふ譯かさいふに、其地方の町人や、百姓から取上げる賄賂の爲に、何時か知らず裕福になるのである。誰が郡奉行になつても皆さうなのであるから、殆ど此一事は、藩の方でも大目に見て居た位であつた。玉木を此

役に當嵌めたのは、其窮苦の状を救はうが爲であつたのだが、玉木は清廉な武士であつたから他の人が郡奉行になつた時のやうな、悪いことは更にしなかつた。理由なく他の贈物などは受けなかつたので、此役に就いた爲に、却て貧乏が甚しくなつて、玉木は一層の困苦をしたのである。役目の都合で、交際も廣くなれば、無駄な入費も多く出る、而も性の悪い金は取らないのだから、今までよりは殖えた費用だけが、餘計な負擔になる譯だから、玉木の苦んだのも無理はない。其時代に、乃木大將の實弟眞人を賞つて、養子にしたのである。

松陰の爲には、叔父に當る玉木が、松陰に對する教育は却々に努めたものであつた。松陰があゝいふ氣風の人物になつた一半は、玉木の教育が與つて力があつた。他の者が引受けるさいふのでは、玉木も承知しなかつたらうが、甥の松陰が引受けやうといつたのだから、松下村塾の再興は許したのに違ひない。されば松陰が、塾生に對する教育振は、明倫館のそれよりも非常に優れて居た。唯章句の上のみ拘泥して、通り一遍の、教育をするのことは違つて、精神から打込んで行く教育であつたから、僅に二年餘の短い月日の間に、三百人以上も有爲の人材を造り上げて、松下村塾の名は、今の世にまで傳へられるやうになつた。大正の今日には、全く時代の相違もあるから、一概に松陰風の教育をしろ、といふ主張も出来ないが、併し、單に物質的教育にのみ傾いて、精神的の教育を忘れるやうなことがあつては、我國民性の上に容易

ならぬ缺陷を生じて、將來は恐るべき結果を見ることになる。此點に就ては、今の教育家たる者は、深く心しなければならぬことである。尤も、武士道の解釋までが、大分此頃はバタ臭くなつて、今までのやうな解釋は違つて來たから、止むを得ないが、それにしても猶う少し徹底した、精神的の教育をするやうにしなかつたならば、我國家の前途は、實に恐るべきことになりはしまいか。高松に開かれた演職事件の公判廷で、山下檢事正が述べた武士道論、それは既に奇怪千萬なる説であつて、あゝいふことを公判廷に於て、平氣な顔で述べるさいふのが、既に士人の心を失ふた證據である。大浦兼武が荷も一國の大臣として、代議士を賣收して己の政策を行はうとした。其事は既に滔天の罪惡であつて、憲政の賊であるといふことには、檢事正も敢て異論はあるまいと信するが、既に大浦が、それ程の罪惡を犯し乍ら、何故起訴を猶豫されたかといふに、現職を去つて隠居したのは、即ち公生涯を休止したのと同じであつて、即ち大浦の心情が、既に悔悟の状態になつて居るのであるから、強ひて之を追究せぬのは、即ち武士道の本意である、といふ意味の説法であつた。武士道の解釋が、斯ういふ風に曲解されるやうになつては、もう日本の士風なるものは、全く地に墜ちたといふても然るべきである。大浦は現に職を退いて隠居したには違ひないが、其伴は矢張り子爵で、華族の班に列して居るのだ。即ち父の兼武が、罪惡を犯して隠居した爲に、伴は國家に何等の功績も無くして、子爵で華族

の班に列して居る。而して兼武に對しては、悔悟の情顯然たるものがある、偉い、さいつて激賞して居るのだ。斯様な武士道が、何處の國にあるか、況や此裁判事件の根柢は、兼武に依つて作り成されたのであるにも拘らず、其罪魁たる兼武は、自分が隠居して、俸に華族の株を譲つただけで、既に悔悟の實を擧げたものにして追究されず、却て兼武に使役された、林龜以下の連中は、公判廷に耻を晒すことになつたのだ、序に此連中も、武士道の上から、悉く起訴猶豫にするさういふのならば、同じ武士道を曲解するにしても、それは所謂徹底したる曲解であつて、其處に曲りなりにも一分の理窟ありきして、恕すことも出来やうが、此不徹底極つたる武士道論を、公判廷に公唱して敢て耻せせず、罪魁の兼武は、法律の追究を免れて、其兼武に誘致された、力の弱き被告人は、公判廷に耻を晒して居るのであるから、此位悲惨なことは無い。斯ういふ調子に公判廷では、武士道を曲解して、大罪あるものを免して居るが、學校へ子供が行くは、是は反對の武士道を説いて聽かせる。此位矛盾したことは多くなからう。乃木大將を崇拜して居る者が、其半面に於て、桂太郎を拜んで居るやうな、矛盾した事實が平氣で行はれて居る。今の世に於ては武士道も、斯の如く解釋するのが、或は當然であるかも知れない。併し、我國の教育は、斯ういふことを繰返して居る中に、其根本の道德觀までも破壊されてしまつて、遂には滅茶々々なものになつてしまふだらうと思へば、今の學校で教育される子供程、

氣の毒なものはないさういふことになるのだ。

松陰は、其子弟に對しては、極めて嚴格なる教育をして、同時に非常に温味のある、師弟即親子さういふやうな、教育方をして居たのだ。章句の講義をする間にも、精神的の教訓は少しも怠らない、其處に、松下村塾の生命はあつたのだ。門人の中で一番に年若な、品川彌二郎が會つて松陰に向つて、死生に關する解釋を求めた時に、松陰は、

『お前のやうな少年が、今から死生のこと就て、彼是心配するのは、甚だ宜しくないことである、血氣の青年は唯邁往直進して、少しも休まずに居れば、それで可いのぢや、全體、世間の人が死に就て、苦心する程愚なことはない、何程苦心しても、死は聽て來るべきものである、人は生れると同時に、死の宣告は與へられて居るのだ、何んな人でも死ぬ時に、もう是だけ生きて居たら十分である、さういふ満足をする者があるか、五十で死ぬ人も、七十で死ぬ人も、亦百歳以上で死ぬ人も、死ぬ時には必ずしも少し壽命を欲しかつた、と思ふに違ひない、それが既に間違つて居るのだ、さういふことを苦心する人は、幾歳になつて死んでも、死ぬ時には必ず愚痴を言ふ、人間は肉體が死んでも、魂は死なぬものである。さういふ意義を解し得ざる人は、皆死を恐れて居るやうだ。凡そ此世の中に生きて居るものは、皆それぞれに死の運命が定つて居る、それを人間の力で、一日も長く生延びたい、さういふやうなこ

そのみを考へて居るのは愚の極みである。如何に人間が長生をしても、天地の悠久に比して果して何うか、人生を假に五十と定めて、七十は古來稀なりといふてあるではないか、浦島太郎が如何に長生をしても、武内宿禰が何程健康でも、鶴では死を免れなかつた、唯人間は腹一ぱいに働いて死ねば、それで全く成佛の出来るものである、生きて居る者が、死を恐れる程馬鹿なこゝにはない、お前も其考で、短い一生を長いものにして、腹の癒るまで働いたら宜からう」

斯様な教訓を與へられた。彌二郎は、流石に子供ながらも其覺悟になつて、一生を働き通して終つたのである。是は嘗に彌二郎に對して、松陰が教へた言葉としてのみ、聞き流すこゝは出来ない、松陰の死生觀に對する、其意義を深く服膺して、活社會に出来る限りの努力をして、一生を終るべきである。

## (三)

安政五年の九月頃から、江戸に京都の間に、黒い雲が垂れて来て、政界の状態は一刻毎に、險惡な徴候を示して来た。大老の井伊直弼が、勤王攘夷を唱へる浪士の活動が、日を逐ふて激しくなつて来るに同時に、朝廷の徳川に對する壓迫が、實に恐ろしい程厳しくなつて来たので、

先づ取敢ず、其一派の者を取押へて、片端から處分してしまつたならば、或は幕府に反抗する諸藩の空氣も直つて来るであらう、さういふ見込で、老中の間部下總守を、京都へ急行させることにした。即ち一網打盡に、勤王派の志士を引捉ふべく、其大任を膺して、間部は京都へ乗込んだ、大概な場合には、幕府の老中が京都へ来るこゝは、前以て大袈裟な通知があり、それらに之を迎へる準備に、忙しい位であつたのだが、此時ばかりは何の豫報もなく、間部は中仙道から、木曾路を経て裏道傳に、何時来たか分らぬやうにして、京都へ這入つた。旅館の妙満寺に、間部の名札が掲げられた時に、初て勤王派の連中が之を知つた位で、間部の入京は、迅雷疾風の如き勢であつた。此時に間部は、京都へ大網を被せて、片端から處分する覺悟で来たのであるから、所司代の酒井や、町奉行其他の者に、祕密に面會するに同時に、豫て探偵の報告に依つて、罪狀の分つて居た者を、片端から引括くることになつた。其第一番の犠牲になつたのが、例の梅田雲濱であつた。

此時に押へられた者は、殆ど百名以上であつたが、其中には、朝廷に關係のある人も居た。是が伊井の世間から攻撃された罪狀の一つである。江戸に於て、朝廷に對する罪を犯した者があつても、其本人が幕府に縁故のある者ならば、朝廷は、唯其處分を求めに過ぎずして、其者の處分は、幕府が爲るこゝになつて居たのだ。其代り朝廷に縁故のある者が、幕府に對して



罪を犯した時は、矢張り幕府の方から、朝廷へ其處分を求めて来て、朝廷は其者に對するの處分をするに、いふやうな約束になつて居たのだ。井伊が此約束を破つて、朝臣の身にまで手を着けたのは、甚だ怪しからぬといふて、井伊は攻撃の標的になつたのである。尤も、井伊はそれよりも尙、甚しきことをやつて居た。水戸の齊昭を憎むの餘り、其家臣を捉へて、齊昭の罪を證言させやうとした。凡そ徳川の憲法にして、子は親の罪狀に付て證言をせず、家來は主人の爲したことに付ては、何事も口を噤んで居ることになつて居たので、若し何かの事件が発生して取調をするにしても、子供や家來は、親主人の罪惡を證言すべく、訟廷に立たせられるやうなことはなかつた。是が其時代の、道徳教の根本義になつて居たのだ。それさへも井伊は蹂躪して、水戸の家來に、齊昭の罪狀を言はせやうとして、拷問までもしたのであるから、井伊に對する憎惡の一通りでなかつたのは、固より當然なことである。

是より先、松陰は、信州松代の佐久間象山と相談して、亞米利加へ密航しようとした。伊豆の下田まで出掛けて、亞米利加の軍艦へ乗込まうとした時、艦長に拒まれて、進退谷つた折柄下田奉行の組下の者が之を知つて、松陰を捕縛して江戸へ送り付けた。取調の末、象山の關係も知れて、兩人は傳馬町の牢屋に入れられたが、或事情の爲に重い處分を免れて、兩人は其藩主へ御預けの身分になつて、それ／＼藩地へ送り付けられたのであつた。松陰は暫く謹慎して

居た中に、藩廳へ對して、吉田家が兵學師範役であつたのを口實に、自分も亦謹慎中は兵學師範をしたといふ願を出して、遂に是が許された。前に言ふた如く、松下村塾の再興をしたのだ。其間殆ど二年、松陰は十分の謹慎は表して居ただけれき、兎に角、各方面から松陰を訪ねて来る者は日に多く、間部下總守の上洛に就ては、一層に四方の志士が憤慨して、様々の人物が、萩へ乗込んで来て、松陰に相談があつた。それ／＼明に決めたものではなからうが、間部を京都へ這入る前に要撃するといふやうな相談もあつた。之を主として唱へたのは梅田雲濱であるが、段々取調の結果、松陰にも深い關係があることを見込を付けて、幕府は松陰を、江戸へ引揚げることに決して、安政五年の十二月二十九日に、松陰は再び獄中の人になつた。

此時に、松陰の門人は非常に憤激して、或は應藩へ迫り、或は重役を其私邸に訪ねて、松陰の身に就て嘆願する者もあれば、談判を始める者もあつて、却々の騒動になつて来た。中には品川彌二郎は、まだ漸く十五六の少年であつたが、平生から負けぬ氣の、却々に亂暴者であつた。其氣象は斯かる場合にも、他の後に從いて行くやうなことを許さず、政務座役の周布政之助の邸へ、一升徳利を提げて談判に出掛けた。誰が見ても一個の少年たる、品川の此振舞は、小癩に觸る程生意氣だと思つたけれき、何しろ品川の鼻息が荒いので、縱令少年でも高壓的に、やり付けることは出来ぬ。此旨を周布へ取次いだから、周布も用事を口實に、面會を拒絶

した。所が品川は、

『用事があつて會へないならば、用事が済むまで待つて居る』

と言ふて、携へて来た徳利の口から、冷酒をグイ飲にして、太平樂を吐いて居る。是が十五や十六の少年の所業は、何うしても思へない。そのうちに飲み慣ない酒を飲んで、一時に酔が發して来たから、頭は痛く、眼はグラ／＼する、逆も坐つて居ることも出来ない程で、其苦痛は普通でない。聽て長い刀を引抜いて、障子襖を片端から切捲くつた。周布の家來が驚いて、之を止めやうとするに、

『拙者は酒を飲むに、何うも酔狂する癖があつて困る』

と、名乗掛けての酔狂だから、何うにも仕様がな。此騒動を聞き付けて、周布が家來を呼んで、事情を聽いて、暫く考へて居たが、

『宜しい、此方へ通せ』

そこで周布の家來が、品川を宥めて奥へ案内した。品川は周布の顔を見るに、もう止處なく涙を流して、松陰先生の身に就ての哀訴をするのであつた。周布も其赤誠に動かされて、可哀想だと思ふが、自分の力で今は如何にもするに出来ぬ。

『近日の中に、江戸表へ出るから、幕府の方へ一應は談判つても見やうが、それに就いても、お前等が餘り騒ぎ立をするに、却て松陰の身にも宜くない、些々慎んで居た方が宜からう』と、同情ある説諭に服して、品川は引取つた。数日の後、周布は藩命に依つて、江戸へ出掛けたのであつたが、周布の心配も徒勞に屬して、松陰は愈々江戸へ、檻送されることになつた。

(三)

安政六年の五月十五日になつて、藩廳から松陰の實兄梅太郎に對して、幕命に依つて江戸表へ送る、といふことを告げさせやうとしたが、梅太郎は兄弟の情として、此事を松陰に告げるに忍びなかつたので、幾度か躊躇はしたけれど、詰り藩廳の方から、態々梅太郎に此命令を下したのは、松陰の氣象を、よく呑込んで居る重役があつて、態々斯ういふ方法を以て、穩に松陰を江戸へ檻送しようとするのだとは、梅太郎にも能く解つては居たのだ。兎に角、此役目は自分が果さなければならぬ、と覺悟をして、野山の獄に松陰を訪ねて、之を傳へやうとしたが、愈々松陰の顔を見るに、何さなく躊躇して、明に之を言ふことが出来なかつた。兄の態度を見て、松陰は、

『御訪ね下されたのは、私が幕府の手へ引渡されることを、御知らせ下さる意志ではないのですか』

「露背に訊かれたから、梅太郎は軽く首肯して、

「如何にも其通りであるが、お前には澤山の門人があつて、昨年以來、お前を救ひ出したといふので、門人家が重役の役宅へ押掛けて、屢々騒動を惹起したともある、今お前が藩廳の命を拒んで、江戸へ戸くとに彼是故障を言ふに、却てお前の身の爲にもなるまいし、重役も御困りになるであらうから、此場合は潔く江戸へ行くことに決めたら、何うであらうか」

之を聞いた時に、松陰は微笑を漏して、

「それまでに御心配を掛けては洵に相済みませぬ、昨年の暮に此獄へ送られた時、既に覺悟はして居るのでありますから、今更になつて彼是故障は申しませぬ、決して兄上方に御心配は掛けませぬ覺悟でありますから、其點に就ては、御心配下さらぬやうに願ひたい」

「それを聞いて、私も安堵したから、是から藩廳の方へは、直に御届けをするにしよう」

「何卒さうして下さい」

相談は簡單に決つたけれど、兄弟の胸の中には、是が一生の訣別になりはしないか、さういふ考も起つて、互に涙を隠して別れた。流石に兄弟とも、其晩は十分に眠る事が出来なかつた。翌日は門人の松浦無窮がやつて来て、松陰の姿を描取つた。是が今の世に傳へられて居る、松

陰の肖像である。

鳴かすあらは誰かは知らむ郭公。さみたれ暗く降りつゞく夜は

此歌は、江戸へ送られるこの決つた時に咏んだのであるが、松陰の心は、此歌の中に現はれて居る。然るに二十五日を以て、愈々差送るさいふこぎが内定するに、前日の二十四日に、福

川祐之助といふ役人がやつて来て、

「拙者が此度、先生を江戸表まで護送する役目を申付かつたに就ては、唯今より先生の一身は、拙者が藩廳から引受けたのであるから、拙者の考を以て、今宵に限り歸宅を許さうと思ふが、先生は御歸宅なさる御考はありませぬか」

「意外の達しに、松陰は、

「ハ、拙者が今晩だけ歸宅することを御許可下さるのですか」

「如何にも、拙者の計ひを以て、今晩だけ御許し申すことに致した」

「それは千萬辱けない、今更申すまでなく、此度江戸表へ參つたならば、再び歸國することに出来るか何うか、其邊も洵に氣遣はれる、折柄の御慈悲は、何にも御禮の申さうやうもない、何分宜しく御願ひ申す」

そこで福川は、松陰を獄から出して、父の家へ送り届けた。是が本當の武士の情であつて、福

川さいふ人は、詰らぬ役目ではあつたけれど、實によく人情を酌分けた、立派な取扱をしたものだし、多くの人から稱讃されたのも無理はない。

愈々翌二十五日になつて、松陰は網乗物に乗せられ、是から江戸へ差立てになるのだ。此頃の雨天續きに、此日は一層雨も激しく、城下外れには澤山の門人が群をなして、松陰先生の是が御姿の見納めである、何れも涙含んで控へて居る。唯此時に不思議なことは群集の中に唯一人、覆面した婦人が立つて居て、それもなく涙と共に、松陰の姿を見送つて居た。併し、其婦人は何ういふ緣故があつて來たのか、又其姓名は何さいふのか、今に分らないのであるが、何か松陰との間に、事情のあつた人には違ひない。平生は品行の厳正で、少しも厭な風評のなかつた松陰も、矢張り人間のこゝみであるから、或は多少の情事があつたのではないか、此時に咏んだ歌が

よそに見て別れ行くに悲しきを、言にもいは思ひみたれん  
斯くて松陰は、六月の末日に江戸へ到着して、直に傳馬町の獄に入れられた。

龍口の評定所に於て、國事犯の審問はするこゝになつて居たので、此連中は、悉く評定所の審問を受けたのである。従つて松陰も、着府の翌日は、評定所へ引出されて、審問を受けた。上席には松平和泉守が控へて居て、其下には寺社奉行の板倉周防守、勘定奉行の佐々木信濃守

町奉行の池田播磨守が控へる。其脇には大目付の久貝因幡守、目付の松平久之允の兩人が控へて、是から訊問に掛かつたのだ。松陰は潔白な人であるから、少しも怯れた様子はなく、自分の知つて居ることは、平氣で陳述した。唯問題になつたのは、梅田雪濱が萩の城下へ松陰を訪ねて、藩廳の拒む所になり、面會は出来なかつたけれど、松陰の門下生を仲介者として、多少の相談はあつたのだから、梅田の罪狀の第一に數へられた、間部下總守を上洛の途中に擁して斃さうとした、其の計畫に参加したこゝみがあるか、さいふ訊問であつたが、是は松陰が否認した。

松陰が、評定所に於て調べられたのは、僅に前後三回ではあつたけれど、大要は間部を要撃するこゝに就ての審問のみで、十月の六日には愈々口書が決まるこゝになつて、一應其下書を係の役人から示された。見れば自分が、今までに陳述したのに、多少の加筆もしてあるし、又全然意味を違へて、書取つた點もあつたけれど、松陰は唯笑を漏して讀むばかりで、更に訂正するやうなこゝみはしなかつた。そこで口書爪印が定つて、松陰の審問は是で終つたのだ。

身はたさへ武藏の野邊に朽ちぬとも、留めおかし大和魂  
松陰の覺悟は、此一首の歌で、十分に推量出来る。

被告人全體に對する訊問が終つたので、是から刑の適用が決まるのだ。評定所から一切の書

類に、刑の適用まで附して、老中の手許へ廻して来たので、御用部屋の會議は開かれることになつた。正面には、江州彦根三十五萬石井伊掃部頭直弼が、大老として控へた。左右には下總古河八萬石土井大炊守、參州西尾六萬石松平和泉守、越後村上五萬九千石内藤紀伊守、下總關宿五萬八千石久世大和守、遠州掛川五萬石太田備後守、越前鯖江五萬石間部下總守の六人が老中として、席に着いて居る。先づ第一に井伊大老が、裁判の決定書を見るに、或は切腹、或は斬罪、稍々輕きも流罪、刑に輕重の別はあるが、それらに處分は加へられて、松陰の氏名の上には、流罪と書いてあつた。それを見るに、井伊は朱筆を執つて、スーツ筋を引いて、脇の所へ小さく、死罪と書改めた。其儘に書類は、老中の手から手へ渡される。之を見た老中は各々不審の眉に皺を寄せたけれど、誰一人として、此加筆が不都合であるといふて、井伊を咎める者はなく、黙々の中に判決は定つたのである。それから將軍の御手許へ捧けて、其許可を受けた。今から數年前に、横濱の開港五十年祭が行はれた時、掃部山に建てられた、井伊の銅像の除幕式を、同時に行はうとした。此際に、死んだ伊藤井上を首め、今の山縣などが先達になつて、開港五十年祭に際して、井伊の銅像の除幕式を行ふのは怪しからぬ、元來、井伊は開國主義者ではない、強ひていへば、矢張り攘夷主義の一人であつて、唯あの際には、内外の事情に迫られて、止むこを得ず開國條約の書面に、調印したに過ぎなかつたのである、さうい

ふ者を、開國の主唱者なるが如くにして、此場合に祭典を行ふのは怪しからぬ、と言つて、此除幕式を行ふことに反對した。是が爲に横濱の紳士豪商は躊躇して、除幕式を行ふことが出来ず、辛うじて大隈重信を聘んで、其除幕式は濟ませたが、是は井伊大老が、松陰の罪を斷ずるに當つて、評定所の決定よりも一重く死罪にした、さういふ點に就て、長州藩士殊に松陰の門下生であつた連中が、時を得て明治政府の大官になつて居たのであるから、表面には他の理由を設けても、心の中には此齟齬を漏す爲に、故障を入れたのは明である。其事の可否は姑く措いて、兎に角、井伊が徳川累代の憲法を破つて、評定所が流罪と決定したものを、死罪と書改めたのは、甚だ宜しくないことである。評定所の方で死罪としたのを、大老が筆を加へて流罪にした、さういふことは前例もあるし、又左様なければならぬ筈であるが、大老の方で筆を加へて、流罪を死罪に直したのは、井伊の遣り過ぎであつた。之に對して深く憤む所があつたのは、稍々小人の心には似て居るけれど、總てそれは人情の自然として、止むこを得ぬさういふ節もあるのだ。

(四)

偕て一同の刑は定まる、愈々二十一日になつて、傳馬町の獄屋に於て松陰は、橋本左内頼三

樹三郎等の人々共首を斬られた。此時に、江戸の藩邸に勤めて居た桂小五郎が、松陰の死罪になることを聞いて、大に惜んだけれど、今は如何にも致方がない。唯此上は松陰の遺骸だけは、獄卒の手に依つて處分をさせたくないと、會つて松陰の門人であつた飯田正伯、尾寺新之助、伊藤俊輔の三人を呼んで相談したから、三人も涙を流して、桂の好意を謝した。多くの金を貰ひ受けて、牢屋の役人に賄賂を送つて、此遺骸の取扱だけは、自分等に許して貰ひたいと、内願に及んだ。賄賂の効能で、略々其事は許されたけれど、愈々小塚原へ、其遺骸が送られる場合になつて、何ういふ譯か、矢張り松陰の早桶は、獄卒が擔いで行くことになつた。サア左様なつて見るに、今までに使つた賄賂は何の爲であつたか、殆ど意味のないことになる。茲に於て、飯田や尾寺が非常に憤慨して、役人に談判をして、大分騒いだが、結局早桶は非人に擔がせて、小塚原へ着いてから後は、一同の取扱に任せるこいふやうな、仲裁的の話が出て、是で纏りが付いて、飯田や尾寺は、松陰の早桶に隨つて、小塚原へやつて来た。

桂は伊藤を連れて、早くから回向院へ来て待つて居た。其處へ、松陰の早桶が着いたから、非人には多くの金を與へて、早桶を受け取り、是から井戸端へ持つて来て、早桶の蓋を除つて、松陰の無慙な態を見るに、伊藤は聲を揚げて泣き出した。暫くは一同悲歎の涙に暮れて居たが、纏て桂が先に立ち、悉皆洗ひ清めて、再び新しい早桶へ入替へて、遂に埋葬の式は終つた。其

上には、松陰二十一回猛士墓、と筆太に認め、右の方には安政己未十月念七日死認めて、左の方には吉田寅次郎行年三十三歳と書いた墓標を立て、一同は泣きの涙で引取つて来た。

然るに文久三年の正月、松陰の死骸を改葬することになつた。是は其前年に三條、姉小路の兩卿が勅使して關東へ下つて来て、幕府へ種々の難題を持掛けた。其中に安政戊午の大獄以來、國事の爲に斃れた者は、公然祭祀することを許せ、こいふ御沙汰があつた。之に對しては幕府の方でも、色々に故障は言つたけれども、結局御受をするの止むなきに至つた。幕府の威信にも拘ることで、甚だ迷惑には思つたが、遂に國事犯者の祭祀をすることは、公に認めるこいふ御答を申上げた。其結果として、愈々松陰を改葬することになつたが、毛利家の重役は、今は斯う決つても、後日に何う變化をして來るか分らない。其場合に、松陰を改葬した者に、禍が及ぶやうなことがあつては迷惑である、と思つて躊躇して居たのを、例の高杉晋作が、

『さういふ次第ならば、拙者が一人で引受けて、松陰先生の改葬はして見たいから、是非許して呉れ』

と、願つて出た。それを幸に、高杉に一切を任せることにしたから、多くの下僕を連れて、高杉は、小塚原へやつて来て松陰の塚を發き、屍骸は新なる桶に入れ替へた、其時に頼三樹三郎の頭髪を切つて、松陰の早桶へ入れて來たのは、其處は武士の情であつて、高杉の計ひは洵に

當を得て居た。斯ういふ事情で小塚原から荏原郡若林村の大夫山へ、松陰の早桶を運ぶことになった。高杉が先頭になつて下僕が代る／＼松陰の早桶を擔いで、丁度通り掛かつたのが、上野の三橋、今では中央の欄干を取外したから、三橋ではなく、一橋になつてしまつたけれど、あれは橋が三つ並んで居たから、三橋と稱したのであつて、其中央橋は將軍が上野へ御成の時分に渡る橋で、一般の者は渡れないことになつて居たのだ。然るに晋作は、左様なことに頓着なく、中央橋を渡らうとしたから、張番の役人が、

「足下は、何れの藩中か知らぬが、三橋の中央は、上様御成の節の外、何人も通さぬことに定つて居るのに、何ういふ譯で、左様な理不盡なことをなさる」

と言つて咎める、高杉は馬上から見下して、

「將軍御成の橋でも差支ない」

「是は怪しからぬ、上様御成の橋を渡るのには怪しからぬ、それに擔いで來たのは何でござる」

「是は早桶ぢや」

「何ミツ、早桶は彌々以て怪しからぬ、足下何れの藩中で、姓名は何と稱はしやる」

「拙者は、毛利大膳大夫家臣高杉晋作と申す者ぢやが、何故に通行の妨げを致すか」

「イヤ、通行の妨げではない、前申す通りの事情であるから、一應咎めたのだが、其擔いで居

るのは何者の屍骸か」

「是は吉田寅次郎の死骸であるが、勅命に依つて改葬する爲に、唯今通行いたす所でござる」

「彼は、先般傳馬町の牢舎に於て、斬首に處せられた、吉田の死骸であるか、然らば彌々以て怪しからぬ、斯る罪人の死骸を、上様御成の時より往來を許さぬ、中央橋を擔いで通るまい

ふのは、何ごいふ不都合なごみであるか」

と言はれた時に、高杉は携へて來た、手槍の鞘を拂つて、持直し乍ら、

「苟も、此早桶の中にある吉田寅次郎は、勅命に依つて改葬されるので御座る、それを拒む者は違勅の大罪になるが、それでも宜しいか、尙理不盡に通行を拒む以上は止むごみを得ぬから、お敵對申すが、それでも宜しいか」

と、言ひ乍ら槍を取直して、直にも突掛からうとした。番人等は慄へ上つて、遂々高杉等を通

してしまつた。

今では世田ヶ谷街道に、松陰神社と祀られて、年々の供養は、毛利家に於て行つて居るが、明治十五年の六月に神號を許されて、初めの祭典のときは、先帝陛下より祭料として、金一百圓を下賜された。尙明治二十二年の二月十一日には、贈位の御沙汰があつて、正四位といふ位階を得たのである。安政年間に松陰が、刑死された事情は是れで終つた。

使勅 大原重徳

(一)

文久二年の正月十五日に、阪下見附の凶變があつた。それは老中の安藤對馬守が、水戸の浪士に刃傷された事件である。此事件は攘夷黨の人を刺戟して、益々極端な攘夷論が起つて来た。攘夷論が強くなる程、幕府の立場は困難になつて来るのであるから、攘夷論の結局は、倒幕論で段落が付くことになるのだ。其理合を深く察して、毛利は盛に攘夷論を唱へて居たのである。毛利の家來の中にも、却々に先見達識の士があつて、攘夷論が如き議論が、未遂けて行はれるものでない位のことは、よく知つて居たであらうが、朝廷の思召の攘夷である以上は、それに従ふて何處までも、攘夷を眞向に振舞つて徳川に臨むのが、幕府を倒す手段としては、此以上の良策はないといふ見込で、心にもない攘夷論を、終局まで押通してしまつたのだ。對馬守が刃傷された原因は、いろいろに傳へられてあるけれど、要するに、井伊大老の時代に結んだ條約を、實施する上に於て安藤は極端な手段を執つた。或時は亞米利加の使節を紹介して、千代田の城中に將軍を會見させたり、又或時は自分の役宅へ連れて行つて、盛なる御馳走をしたり、一方に攘夷論が轟々として居る場合に、此無遠慮なる振舞をしたことが、甚く攘夷黨の

怒を買つて、遂に坂下見附の凶變になつたのである。井伊と安藤を比べたら、決して井伊に劣るやうな人ではない。若し安藤が、此際に暗殺されてしまつたならば、或は井伊以上の評判を、歴史の上に遺したかも知れないが、不幸にして創傷を負つただけで、死に至らなかつたといふのは、安藤の爲に洵に惜しいことをしたのだ。政治家が其時代の議論に反對して、自分に確信のある説を實行する場合に多くの人から思ふ嫌はれて、暗殺の難に出會ふた時には、何うしても殺されてしまはなければ正統の批評には上らないのである。安藤が一種の外交の奇才を有つて居た證據は、此遭難の時の逸話がある。英吉利公使のオールコックが、安藤遭難の報を聞いて、第一番に駈付けて来て、數箇所の傷を負ふて、醫者の手當を受けて居た安藤に會ふて、オールコックは色々に見舞を言ふた。時に安藤は、オールコックに向つて、

「足下は、私が今斯様に負傷したのを、何ぞ考へますか」

此突然の質問には、オールコックも一寸答に行詰つた。安藤は苦笑をし乍ら、

「餘て足下も御承知の通り、我國には攘夷黨といふて、足下方を嫌ふ一派がある、それが斯様に私を斬つたのであります、先日以來、足下方に御願ひして居る、兵庫と大阪の港を開くことは、是非延期を願ひたい、私でさへ斯ういふ難に遭ふ位ですから、若しあの港を期限通りに開くといふことになれば、是以上の騒動が起きますのでありますから、深く此點に付ては



御考慮を願ひたい」  
 其前から兵庫、大阪の開港期限が、條約の上では既に切迫して居たので、開港準備の事を、各國の公使から迫つて来た。これに對して朝廷は、非常の御怒で、京都の咽喉とも言ふべき、兵庫や大阪に港を開いて、異人を住はせる事は怪しからんことであると言ふて、幕府へ面倒な談判が起つて来た。そこで安藤から異人の方へ、開港延期を相談をしたのだけれ、更に其相談に應じて呉れない、そこで開港の事は行惱みになつて居た。其折柄對馬守が此難に遭ふてオールコックの見舞に來たのを幸に今斬られて來たばかりの傷を見せ乍ら、開港延期の談判をやつたので、流石のオールコックも、安藤の熱心に動かされて、遂に之を承諾して、本國政府へ其意見を添へて申送る事になつた。英吉利公使が承知して呉れたから、亞米利加や和蘭も、それらに交渉が居いて、兵庫、大阪の開港は延期になつた。勿論、それに就ては竹内下總守、京極能登守の三人が開港延期談判の使節として、歐米各國へ派遣はされたけれど、大體に於ての話は既に纏つて居たのである。安藤は斯ういつた風の人で、却々の敏腕家であつた。  
 今から考へれば、當時の攘夷論は實に下らぬ議論であつたが、何しろ其時代に於て、唯一の人氣問題になつて居たのだから、大概な者は、此攘夷論の陰に隠れて、色々な仕事をして居たのだ。殊に朝廷の思召は最も強く、絶対に幕府の結んだ條約を認めない、さういふのであつたか

ら、京都、江戸の間は、明けても暮れても、使者の往復で、此一事を争ふて居たのだ。それが段々日月の重なるに随つて、面倒になつて來て、末には枝葉の議論の方が、多くなつた傾はあつたけれど、兎に角、攘夷開港の事は、全く徳川幕府の運命を支配する問題になつた。

(三)

京都には、島津久光が乗込んで來て、非常な人氣を背負つて居た。殊に朝廷が島津に對しての、御信任の厚かつたことは驚くべき程で、流石に今日まで、朝廷の内部に立入つて、絶大な權勢を握つて居た毛利も、是が爲に幾分か壓迫けられるやうな傾があつた。左様な事、毛利の方でも一生懸命になつて、島津の上に乗越えやうとする。島津の方では又左様させまいとして、事毎に此二藩の争が起つて來て、其間に挾つた朝廷は、此二藩の權勢争奪の目的に利用されて、實に馬鹿らしい程の矛盾を、繰返して居たのである。  
 毛利藩が幾度か「勅使を關東へ差向けて、攘夷の事は根本的に決めなければ可かぬ」と唱へて居た。之には滿廷の公卿も、一人として反對はなく、多少は佐幕派もあつたけれど、大勢に押されて、表面に苦情を言ふ者はなかつた。乍併、愈々勅使を關東へ差向ける事になれば其人物を選ぶ必要がある。大概な者が行つた所で、却々幕府の頭を押へ付けて來る事は難し

い。果して何ういふ人物をやつたものか、それに就ての苦心は、又一通りでなかつた。此時代には岩倉少將具視が、却々に勢力を有つて居て、朝廷の内部では、可なり重きをなして居たのだ。愈々勅使を關東へ差向けるになつて、それに適當の人物を得ない爲に、荏苒日を送つて居るやうなこゝになつては、大切な機を逸してしまふので、岩倉自から關東へ下向したい、さいふこゝを申出た。之には大分賛成者もあつて、岩倉は勅使として略々決まり掛つた。時に建仁寺の天章さいふ和尚が、朝廷へ密かに建白をして、岩倉の關東下向を拒んだ。それは悪い意味で、故障を入れたのでなく、其大要は、

「岩倉具視の如き人物を、此場合に京都から一日も離すこゝは、甚だ不利なものである、萬一の場合に、岩倉の如き者が居ないに困るこゝがあらうから、關東へは大原重徳を、下向させるこゝに致したならば宜からうと思ふ、大原は公卿の中でも、却々に度胸もあれば辯舌も確かな者で、幕府の老中位を向へ廻して、談判をして來るだけのこゝは出来る人である、岩倉を京都へ留めて、大原を關東へ遣すこゝにしたら宜からう」

さいふのであつた。全くそれに違ひないのであるから、朝廷の重立たる人々も、甚く感心して、廟議は直に一變して、愈々大原が關東へ下るこゝになつた。

既に大原が關東へ、勅使として下向するにあれば、其警護は何人に命じたら宜からうかとい

ふこゝになる。段々相談の末島津久光に之を命ずるこゝに決した。之を聞いた毛利の連中が、實に意外の感に打たれたのは、勅使を關東へ送るこゝに就ては、毛利藩が主張して愈々其事は決したのだ。然るに勅使の警護は島津藩が引受るさいふのでは、今まで苦心慘憺で、辛うじて決めた勅使下向は、薩藩の爲に骨を折つたやうな形になるので、毛利藩士の不平は一通りではなかつた。此時に、毛利藩の代表として、朝廷へ交渉の役を勤めたのが、例の桂小五郎であつた。愈々朝廷の御沙汰が勅使警護は島津に決まつた以上、之を今更覆へすこゝは出来ないものであるから、其處は智者の桂のこゝにて表面の警護は島津にさせても、内部の周旋方は毛利で引受けさへすれば、敢て差支がないさいふ考から、大活動を始めた。幸にして此桂の畫策は巧く行はれて、朝廷の御沙汰では内部に於て勅使と幕閣の周旋方は、毛利に於て充分に勤めろさいふこゝになつたので、毛利藩の連中も、稍や不平を抑へるこゝが出来た。桂が内部に於て、斯ういふ運動をして居る中に、久坂玄瑞や山縣狂介が、一味の者を集めて、盛に活動を始めたのは、大原勅使の從者として、其側に附いて行かうさいふのであつた。是は好い所へ眼を着けたので、縦令薩藩士が何百人、警護の役を勤めて居ても、大原の側に居て、用事を達す役を引受ければ、其方が萬事に都合が好いのであるから、桂も久坂等が、此運動を始めたこゝは知つたけれど、知らぬ體にして打棄てて置いた、然るに此事は早くも薩藩の方へ知れたから、

左様なことをされた日には、島津は油揚を攫はれるやうな譯になつて、島津は何の爲に勅使警護の役を引受けたのか、更に分らぬことになるのだから、盛に久阪等と競争して薩藩士の方から、大原勅使の従者たらんことを願つて出て、其競争は非常になつて来た。機を見ることに敏なる久阪等は、もう可かぬと思ふたから、其運動は中止してしまつたので、大原の従者は此二藩から一人も採らぬ、さういふことに決して、愈々文久二年の五月二十二日に、大原は京都を離れて江戸へ向つたのである。

勅使さへいへば、此上もない御客さんで、徳川幕府に見れば、随分氣象をして接待をしなればならない。今までは表面に尊敬して、内心で馬鹿にして居た勅使も、今度は特別の意味を以て来る勅使ではあるし、殊に大原重徳の爲人は、豫て幕府の方でも能く知つて居たから、今までの勅使とは、大分其趣が違つて、今度は容易ならぬ難題を持つて来るのである、さういふことは幕閣でも豫め覺悟して、其接待に掛つたので、今までの勅使受は更に進んで、鄭重な扱ひをするこゝになつて居たのだ。斯くて大原が、江戸へ着いたのは六月の七日であつた。

(三)

龍の口の傳奏邸が、勅使の關東へ来た時分に、泊る慣例になつて居たので、大原も亦傳奏邸

へ這入つた。それ／＼に幕府の方では、接待係を定めて、其待遇は非常に丁寧であつた。着府の旨を幕府へ通じて、老中に會見を求めに來たので、幕閣でも段々寄合をした末に、來る十日を以て、城内の白書院に於て、會見するこゝに極めた。愈々其當日になるに、老中は一同出席して、別に越前の松平春嶽、會津の松平容保の兩人が立會ふこゝになつて、大原勅使の來るのを、今や遅しと待受ける。總て時刻になるに、大原はやつて來て案内されて上席に着いた。一同は下席に手を突いて控へる、大原は一同に向つて、

「此度勅命を奉じて下向いたしたるは餘の儀でもない、先年來追々に外夷が渡來いたして、是が爲に萬民生を寧んぜざるの傾もあり、朝廷に於かせられても、叡慮を惱めらるゝこゝ一通りでない。曩に堀田備中守上洛の節、神奈川條約の件に就て、奏請する所はあつたが、總て御聽届けに相成らず、備中守も空しく立歸つた次第である、今や朝廷の思召は、愈々外夷を國境より一掃して、我國威を發揚し、萬民の心を寧んせしむるこゝを第一義として、茲に幕府の内部に、改革を加へるこゝを促す次第である。第一には一橋慶喜を以て將軍の後見職とし、越前の松平慶永を以て大老とし、列藩の諸侯の中より、別に相談役を選んで、外夷に關する大事を、總て是等の者の相談にて、決定を致すやうの思召である。將軍家茂は聰明の天資を備へては居るが、此攘夷の大事を決するには餘りに年少である爲に、朝廷に於かせ

られても、斯様な思召を懐いて御居でになるのであらう。想像いたす、就ては是より勅旨を傳達いたすに依つて、謹んで承はり居れ。」

と言ひ終つて、大原は勅命のある所を、書面に依つて讀み聽かせることになつた。

第一、大樹早ク諸大名ヲ牽ヒ上洛アル可ク、朝廷ニ於テ相共ニ國家ノ治平ヲ計議シ、下萬人ノ疑ヲ散セシメ、皇國一和ノ正氣ト爲シ、速カニ蠻夷ノ患難ヲ掃ヒ、上ハ祖宗ノ靈ヲ慰メ、下ハ義臣ノ歸嚮ニ從ヒ、萬民化育シ、天下ヲ泰山ノ安キニ比セラレンコトヲ

#### 思召候事

第二、豊臣ノ故事ニ基キ、沿海五箇國ノ大藩ヲ以テ、五大老ト爲シ、國政ヲ諸決セシメ、夷狄ヲ防禦スルノ處置ヲ爲サバ、環海ノ武備堅固、確然トシテ必ズ夷狄ヲ掃除スルノ功アラント、思召候事

第三、一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前前中將ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメバ、我

之を聽いて居た、老中等の驚駭は一通りでなかつた。是では恰で幕府は、朝廷の干渉を受けて唯其命の儘に働くの外はないことになるのだ。何れにしても斯様な大問題に、即答の出来る筈はないのであるから、其日は一時勅使に引取つて貰つて、是から閣議を開いて、如何に答辯すべきかを定めることになつた。

翌日、開かれた閣議には、尾州、紀州、水戸の三家も出席して、それに一橋、越前、會津の三侯が加はり、閣老は一人も缺席なく、段々々評議を凝したけれど、何分にも幕府に取つては重大な問題であるから、容易に決せずして散會した。十二日も引續いての會議であつたが、何の決することもなく早や十三日を迎へたのである。大原からは矢の催促で「来る十八日には、閣議の如何に拘らず、登城いたすから豫め斷り置く」といふ通知があつた。サア左様なつて見ると、愈々幕閣の狼狽は一通りでない。何等決定する所がないのに、勅使に乗込んで來られては、何うすることも出来ない、今暫くの間、勅使の登城を延して貰はうといふので、其談判の使者を選ぶことになつたが、誰一人として進んで此役を引受けやうとする者はない、そこで松平春嶽に是非いふて頼むと、病氣を申立て、辭退してしまつた。茲に於て、勅使の登城を延期させる談判すら出来なくなつたのであるから、幕閣の失態は非常なものであつた。

大原が、幕府へ對する態度の強硬であつた以上に、警護の役を引受けて來た、島津の活動は實に目覺しく、且つ強いものであつた。久光が自から臨坂中務大輔を、其邸に訪ねて、何處までも勅命に従へといふて、嚴談をした時には、殆ど喧嘩腰の態度であつた。流石の臨坂も久光を宥めて歸すのに、骨が折れた位であつた。島津の活動は、斯の如く激しかつたけれど、毛利は知らぬ顔の半兵衛を極込んで、更に何等の活動もしないのは、要するに、島津の失敗するの

を待て居たのであらう。左なきだに毛利に對して、面白からぬ感情を有つて居た、島津の家來は、毛利の冷然たる態度を見ては、彌々癩癩が煮くり返へるやうになつて、幾度か衝突はし掛けたけれど、是は幸にして物にならず、遠くの方から反目の姿で、日を送つて居たのである。登城の通告をした、十八日は愈々來た。大原は早朝から支度に掛つて、是から千代田城へ向つた。此時には流石に幕閣の方でも、相談が大分捗つて來て、脇坂中務大輔と板倉周防守の兩人は、大原に對面して、

「越前侯を大老に推すことは、強ひて異存は唱へぬが、一橋卿を後見職に据ゑることは、今卒に御答を申上げることは出來ぬ」

「こいふのであつた。茲に於て大原は、  
「其事は姑く措いて、第一の攘夷の件に就ては、如何いたす所存であるか」  
こ、急所を突いたので、脇坂も板倉も口を緘んで、何の答も出來なかつたが、暫くあつて脇坂は、

「其儀に就きましては、又十分に評議を凝した上、確とした御返辭を申上げまする故、尙數日の間、御猶豫を願ひ上げまする」  
こ、答へた。大原は非常に憤激して、

「是は怪しからん、先般より既に七日間も、空しく相待つて居るにも拘らず、未だ其事に就て何等の纏りたる評議もないこいふのは、甚だ怠慢の至りではないか、左様な一日送りの申譯は、今後に於ても御免蒙むりたい」  
如何に怒つて見ても、相手が緩慢なのだから、何うにも仕様がなない。大原は散々皮肉なこみをいふて、空しく引取つて來た。

初め大原が京都を出る時に、御請した勅命は非常に強いものであつた。従つて大原の決心は、京都を出る時から既に命に賭けても、此勅命は御承けをさせなければならぬ、こいふ意氣込であつたから、従つて、老中へ對する談判の如きも、非常に峻烈なものであつた。其勅命には、何ういふこみが認めてあつたかこいふに

朕 國家ノ爲メニ日夜憂ニ堪ヘズ、而テ幕吏苟モ安カランコトヲ儉ム、依テ今方サニ汝ヲ關東ニ下シ、遍ク朕ガ固有ノ志ヲ宇内ニ知ラシメント欲ス  
願クバ汝朕ガ腹心ト爲ツテ怠ルコト勿レ、且ツ營中廟論ノ日、幕吏曲直ヲ誤リ、島津ト爭論ニ及バンモ測リガタク、然ラバ汝大道ヲ以テ是非ヲ糺シ、天下ノ大事ヲ愆マラシムル勿レ  
今日ノコト朕ニ汝ニ委ス、汝努メテ 祖神ノ宸怒ヲ慰メヨ  
斯ういふ御趣意の勅命では、大原も命懸にならざるを得なかつた。又一面からいへば、朝廷が

攘夷に對して、如何に強硬な意見を有つて居られたか、さいふことも、此詔命に依つて、充分に推察が出来る譯だ。

幕府は一日送り、大原の登城を引延ばして居たが、愈々二十九日になつて、大原は最後の登城をなすべく決心をした。此日に老中の答が思はしくなければ、又延びるこゝになるのであるが、大原は何うしても延ばさせぬ、さいふ覺悟を有つて居たのだ。従つて此日は、最後の登城さいふ覺悟で出掛けたのである。

其前夜に雜掌の北川新彌さいふ人呼んで、今までの書類を悉く纏めて、封印の上之を托し、更に北川に向つて、

『明朝の登城は、如何なる事に相成るかも分らぬ、萬一のこゝがあつた時には、唯今預けた書類を携へて、直に京都へ立歸り、朝廷へ復命をするやうにして呉れ』

さいふのであつたが、言葉は極めて短いき、其覺悟は餘程に迫つて居るやうであつたから北川も之を聞き流しにして置こゝは出来ない。夜更くなつて、密に久光を訪ねて、此旨を傳へたから、そこで久光は、俄に腹心の者三四人を呼付けて、

『明朝の登城は充分に注意して、萬一の變に備へる覺悟をしろ』  
さいふこゝを傳へた程である。

二十九日は早朝から支度して、愈々大原は、千代田城へ乗込んで来た。久世大和守、板倉周防守、脇坂中務大輔を首め、老中悉く列席で、勅使受をするこゝ、大原は、

『今日まで勅命に對して、確とした御答もせず、荏苒日を送つて居るは、勅命を輕んずるの甚しきものである、今日は先般申渡した勅命に對して、即答を求むる爲に參つた』  
板倉は、恐るゝ席を進んで、

『段々御答の日を延引いたしますのは、何ごも申譯ありませぬが、何分にも幕府に取りましては、重大の事柄ばかりでございまして、輕々しく御答はなにかねまして、斯く延々には相成りませんが、尙一日の御猶豫を下さりますならば、明日こそ確とした御答を、申上げまする覺悟でございします』

『イヤ、それは相成らぬ、最早一日一刻も猶豫はならぬ、即答を召され』  
此談判を聞いて居た久光が、大原の言葉の切れるのを待つて、

『勅命は動かすべからず、唯其御沙汰に従ふの外はない筈である、然るに協議の上御答をするこゝは、抑も朝廷を輕んずるの甚しきものでござる、大原卿の言はるゝ如く、最早今日以後に御答を引延すこゝは、却て不敬に當らう、後日の御沙汰も如何あらうか、幕府の爲にも相成るまいと存する』

こ、極めつけた。もう斯うなつては仕様がな、切迫詰つて久世大和守は、  
 「左様ござりますれば、上様の恩召を伺ふて、更に御答を申上げます故、暫くの間御休息  
 を願ひ上げまする」  
 是から大原は別室に移つて、暫らく休息するこゝになつた。老中は悉く其席を去つて、俄に  
 將軍の御前で、會議を催すといつたやうな譯で、午後になつてから漸く評議が一決して、大原  
 の齎して來た勅命は、總て御承をするこゝに決したのである。  
 斯ういふ次第で、大原は懸命の談判に成功して、京都へ引揚げるこゝになつた。此引揚の時  
 に、島津の家來奈原喜左衛門が、東海道の生麥に於て、英人を三人打斬つて、大騒動を惹起  
 したのだ。勅使の事は、秘密の中に運ばれたのであるけれど、何時か外へ漏れたから、攘夷黨  
 の意氣達は、益々強くなつて來て、六十餘州の津々浦々の果に到るまでも、攘夷論でなければ  
 夜も日も明けぬ、さいふやうな有様になつた。大原重徳が勅使をして關東下向の頭末は是で終  
 った。

### 島津齊彬

幕末の諸侯で、後年に偉いと言はれて居る人は、可なり多くあるけれども、其の中に於いて

最も偉いと言はれて居るのが、高知の山内容堂、宇和島の伊達宗城、福井の松平春嶽、福山の  
 阿部伊勢守等の人々であつた。此外に、徳川御三家の筆頭たる水戸の烈公、即ち齊昭も、亦た  
 殿様離れのした偉い人である。此烈公に對しては、彦根の井伊直弼があつた、此兩侯の關係に  
 付いては、随分多くの學者が異説を立て、未だに善惡兩端の説があるやうだが、先づ其時代  
 に於いては、是等の人が、諸侯を代表し得るだけの、偉い人であつたには違ひない。  
 斯ういふ風に、其名前を列べて來るこゝ、これも同じ年配の、同じ鑄型から出た人のやうに思  
 ふであらうが、決してさういふ次第ではない。年齢の上にも、大分の相違はあるし、又其家柄  
 に付いても、當時の問題に付いても、決して一致した行動を執つて居たのではない。唯諸侯の  
 顔觸を見渡して、其中から優れた人を求めて來れば、是等の人に指を屈するの外は無い、さい  
 ふまでのこゝであるから、其覺悟で讀んで貰ひたい。  
 其中に於いて、薩摩の島津齊彬は、殊に一段と優れて居たやうに思はれる、父の齊興が六十  
 歳になつて家督を譲らず、是が爲に齊彬は、三十歳にもなつて既に夫人を迎へ、子まで生けて  
 居るのみならず、諸侯の間に於いても、評判の人物であつたのだが、齊興は強情な人で、まだ  
 隱居すべき年配でない、さいふやうなこゝを言つて、なか／＼隱居しなかつたから、従つて、  
 齊彬は空しく部屋住の若殿で、其日を送つて居たのである。

其頃の諸侯の當主としては、餘り惻巧な人を歡ばぬ傾きがあつた。それは何故かといふに、當主が餘り惻巧だに家來が思ふやうな働きが出来ないし、それに惻巧過るに、自然其才氣に任して、自分で何かして見たいといふやうな考が起るからそれが爲に身を誤り、家に瑕瑾を付けるやうなこも出来るので、先づ諸侯の當主としては、餘り惻巧でなく、又餘り馬鹿でなく詰り惻巧馬鹿の、中庸を行けるやうな人を、上乘にして居たのである、又何れ程惻巧な諸侯にしても、世間のこには餘り明るくないので、諸侯としての惻巧は、唯殿様としての惻巧で、世間一般に通用する惻巧とは、大分趣が違つて居るのだ。尤も、諸侯の當主にもあるべき者が、金錢の出納に自から携つたり、奥向のこに一口出しをするやうな調子では、所謂殿様の有難味が薄らぐから、何處の諸侯にしても、家憲としては左様いふこには、一切關係をさせずに置いたのである。其代り家老だとか、三太夫だとかいふやうな者があつて、それづくに殿様のなすべきこを、分擔してやつて居たのであるから、別に當主が、之に關係しないからこいふて、其家を保つて行くには差支は無かつた。斯ういふ面白い逸話がある、東北の或る諸侯が、參觀交代で、江戸の邸に詰めて居た時、登城の途中は、乗つて居る輿の戸を開かせて町中を練つて行く、其間に往來の町人が、色々の話をして行くのを、それもなく聞いては樂んで居た。是は其人ばかりでなく、何の諸侯も皆是こ同じであつたのだが、或日、城内の一室に

斯ういふ連中が集つて、色々な世間話を始めた。何でも他の知つて居さうもないこを、知つて居るのを誇りこして、一般の人が聞けば珍しくもないこを、左も珍らしさうに話して居る中に、其東北の諸侯が、

『米の時價は何程するか御承知であるか』

こいふ、突然の質問に、他の諸侯は何も答へ様も無い。苟も諸侯の當主にもあるべき者が、米の相場などを知つて居る道理は無いのだから、一人こして答の出来る者が無かつた。其様子を見て鼻高々こ、

『拙者は、米の時價を心得て居る』

『ハ、ア、それは大層なるこ御承知であるが、全體米の相場は、何れ程するものでござらうか』

『されば、兩に幾俵こいふのが、現在の價でござらる』

こ言つて平然して居るに、他の諸侯は皆感心してしまつたが、其中の一人が、

『時に其兩こ仰せられたのは、何兩のこでござらうか』

此質問で、グツ息詰つたのは、今朝登城をする時に路傍で、町人が話合ふて居た、米相場の話の聞いて来て、其儘に自慢らしく言出したのだが、兩に幾俵こ言つたのは何兩のこであ



るか、そんなことは分らないのであるから、質問されて息詰つたが、それでも知らぬ言はな  
いのが謂ゆる大名氣質で、

『それは百兩のこいひでござる』

と答へたので他の連中も、

『ハ、ア、さういふ相場のものでござるか』

と言ふて話は終つたといふことであるが、兩に幾俵いへば、一兩に付いて幾俵いふこと  
に決つて居るのだが、之を百兩と思つた所に、大名氣質が現れて居て面白い。斯ういふ半間な  
こいひを言ふたまで、其諸侯は馬鹿ではないのだ。伶俐な諸侯でも、此位に世事には迂かつた、  
こいひだけの例に此逸話を引いたのであるが、マア昔の諸侯の智慧は、大概斯んなものであつ  
た。

齊興は、さういふ細かいこいひに付いて、何れ程まで解つて居た人か、それは十分に分らない  
けれど、兎に角、島津家代々の當主の中では、英主であつたには違ひない。従つて非常に勝氣  
な、負嫌ひの氣象が、何事にも付いて廻つて、何うかするに、是が爲に失策をしたこいひもある。  
世嗣の齊彬が、三十歳にもなつて妻子もあり、諸侯の間に出して、少しも逸色の無い、こいひ  
程に立派な人であつた。それすらも認めないで、自分が六十歳以上になつて、まだ隠居をしな

いこいひで、頑張つて居た所は、確に偉かつたには違ひないが、幾分か其偉さを通り越して、  
我意我慢を張つて居た人だ、と言ふこいひも言へる。何ういふ偉い人でも、退くべき場合に退き  
譲るべき時に譲つて、そこで初めて、一家の平和を保つこいひが出来るのであつて、隠居しても宜  
い年配になつて、まだ隠居せずに強情張つて居る、其隙に悪い家來が乗じて来るに、飛んでも  
ない御家騒動が持上がるのである。

齊興が江戸詰の時分に、芝高輪の豆腐屋の娘を見初めて、是非彼を妾にしたいといはれたの  
で、家來が頻に奔走して、遂に其親元を説付け、家來の養女として、齊興の妾に出した。それ  
が有名なお由良の方といふのである。其腹に出来たのが普之進といふて、島津家の分家たる、  
重富へ養子にやられたのであるが、お由良の考にして見れば、自分が腹を痛めた子供であるか  
ら、普之進を是非、島津家の相續人にしたといふのは、人情に於いて當然なこいひである。齊  
興が何ういふ考で、三十歳にもなつて居る、齊彬に相續させないか、こいひは分らないか  
ら、何れ自分の氣に入らない爲に、あゝして置くのに違ひなからう、して見れば、自分の寵愛  
が深いのを幸に、普之進を薦めたならば、何うかなるまいものでもない、こいひやうな淺薄  
な考から、頻に味方を集めて、普之進に本家を相續させる計畫を立てた。昔からの御家騒動は  
往々斯ういふ點から起きるもので、芝居や草双紙にも、よく現れて居る通りである。

其時分から尊王攘夷、開國鎖港を段々喧しい議論が起つて、諸侯の間にも亦藩臣の間にもそれぞれに議論が分れて、これが爲めに何處の藩でも、非常に暗闘があつた。島津家も亦其御多分に漏れずして、尊王佐幕の兩派に分れて、激い軋轢が始つて居たのだ。齊彬は縦令部屋住であつても、さういふことに付いて、自分の意見を定むるには、毫も差支の無い人であつたから頻に尊王の意見を以て、屢々家來なぞにも、其意味の話をすることがあつた。所が國老の島津豊後が、極端なる佐幕派であつたから、齊彬を忌み嫌ふといふやうな傾きになつて來て、齊彬が齊彬に、家を譲らぬのを幸に、何うかして齊彬に代るべき人を、求めたいと思つて居た。所へ、お由良から相談があつたので、普之進を擁立て、相續人にするこゝは、別に謀叛といふ譯でもなく、島津家に瑕瑾の付くものでもないから、是ならば正々堂々と争つて行けるといふ考より、豊後が段々味方を集めて、普之進を擁立てることに決つた。事は忽ち外に漏るゝ、齊彬を擁立てる一派が承知しない、そこで激い争ひが起つて來た。けれど何分にも豊後の勢力が強いので、お由良が齊彬の寵を恃んで、朝夕側に付いて居て、色々に齊彬を讒訴するのであるから動もすれば普之進の方が、勝利を得るやうな傾きになつて來た。そこで内訌は、日を逐ふて盛になつて來て、遂にお由良を斃してしまはなければならぬ、といふまでに、勢は迫つて來たのである。

近藤隆左衛門、高崎五郎右衛門、大久保次右衛門、有村仁右衛門、赤山靱負、島津壹岐等の人々が、頻に協議を凝した末が、遂に人知れずお由良を亡きものにしてしまふのが、早手廻しであるといふことに決つた。それが或る行違ひから、忽ち豊後の方へ知れて大騒動になり齊彬の耳にも這入るゝ、齊彬は非常に怒つて「齊彬に家を譲らぬといふのは、予に考があればである、併し、縦令今譲らぬにしても未始終は、齊彬に譲らなければならぬ、左様なことを企て、私の争ひから、如何なる曲事があるにもせよ、予の愛して居る由良を、人知れず亡き者にしようとは、甚だ怪しからぬことだ、畢竟するに予を輕んずる所より、斯様なことも企てるのである、今後藩政を取締つて行く上にも、斯様なことを許して置く譯にはいかぬ」といふやうな意味から、到頭其事件に關係して居た、齊彬派の者は悉く謹慎を命ぜられて、追つて嚴罰に處せられる、といふことに内定した。

序に言ふて置くが、前の連名の中で、高崎といふのは正風の父である。又大久保次右衛門の倅は例の利通で、有村の子は櫻田門外に、井伊の首を取つた治左衛門、明治になつてからの海江田信義である。赤山と壹岐の二人は、國老格の立派な人物であつた。愈々齊彬派は押へられて、謹慎を命ぜられることになつた。其時に、同志の中の一人たる、藤井良節といふ者が、密に遁れて筑前の福岡に落延び、黒田侯に内見した。藩主の長傳は、島

津家から養子に行つた人で、齊彬は叔甥の間柄になつて居る。其關係から藤井が、段々島津家の内訌に付いて、哀訴する所があつた。そこで長博は一切を引受けて、藤井は當分、黒田藩に身を托するこゝになつた。前に述べた内訌に依つて、謹慎を命ぜられた連中は、間もなく切腹を命ぜられたり、或は遠島の處分になつて、其事件の一段落は着いたが、其儘にして置いては、第二の御家騒動が起らぬとも限らない、又必ず起るに違ひないのであるから、これに付いては黒田長博も非常に心配して、折柄、参観交代で江戸詰になるのを機会に、江戸の藩邸に着いてから、阿部伊勢守が老中をして居たのを幸ひ、平生から極く懇意に交際つて居たので、内情を打明けて、島津家救済のこゝを頼んだ。伊勢守はなかく賢明な人であつて、殊に其男振の好かつた所から、大奥の信用が非常に厚かつた。従つて將軍の信用も重く、非常に羽振の宜かつた人である。其伊勢守が引受けて呉れたから、黒田侯も安心して、萬事を任せて置いた。何れ島津家に瑕瑾を付けず、此問題は解決をされるものと思つて、密に時の來たるを待受けて居た。

其翌年に、齊彬が出府した。例に依つて、將軍拜謁の式が終つて、自分の部屋へ下るに、總て伊勢守が對面して、將軍よりの下賜品を渡して呉れた。諸侯が出府した時分に、各々國産を土産として献納する、同時に將軍からも、返禮として何か品物を呉れるこゝになつて居た。齊

興は其例に基いた下賜品だらうと思ふて、邸へ歸つてから開けて見て驚いたのは、此下賜品が茶の湯の道具が揃へてあつたので、即日隠居届を出して、島津家は齊彬に譲るこゝになつた。

縱令、年は老つて居つても、島津家の當主であるから、齊彬に對する下賜品は、武器である。さか或は馬具であるさかいふやうな物を、下されなければならぬ筈であるのに、茶器を下されたといふのは、お前は年も老つて居るこゝであるから、早く隠居して孫の守でもして、お茶でも立て、一生を送れ、といふ謎である、といふこゝが分つたから、齊彬は直に隠居してしまつたのだ。此取計ひをした者は、即ち伊勢守であつた。

斯ういふやうな事情で、齊彬は遂に島津家の當主になつたのであるから、本來から言へば、普之進は敵同志の兄弟で、何事に付けても、快く普之進を迎へぬのが當然であるのに齊彬には少しも、そんな厭な考が無かつた。妾腹の弟ではあるけれど、普之進に對しては、何事も譲るやうにして親切に交際つて居た。此の一事でも、齊彬の氣品の高い人だといふこゝは分る。殊に安政五年の夏、病を得て死ぬ時分、相續せしむべき男子の無い爲に、大分藩臣の間が動搖した。其時に齊彬は「普之進の子忠義を以て、家督相續をさせやう」と遺言をした。普之進は後の久光であるが、其久光の子忠義を以て、家督相續をさせろ、といふ遺言が、前に述べた御家騒動から考へて來て、普通の諸侯に出来るこゝではない。それを平氣で、一度仇敵であつた久

興は其例に基いた下賜品だらうと思ふて、邸へ歸つてから開けて見て驚いたのは、此下賜品が茶の湯の道具が揃へてあつたので、即日隠居届を出して、島津家は齊彬に譲るこゝになつた。

縱令、年は老つて居つても、島津家の當主であるから、齊彬に對する下賜品は、武器である。さか或は馬具であるさかいふやうな物を、下されなければならぬ筈であるのに、茶器を下されたといふのは、お前は年も老つて居るこゝであるから、早く隠居して孫の守でもして、お茶でも立て、一生を送れ、といふ謎である、といふこゝが分つたから、齊彬は直に隠居してしまつたのだ。此取計ひをした者は、即ち伊勢守であつた。

斯ういふやうな事情で、齊彬は遂に島津家の當主になつたのであるから、本來から言へば、普之進は敵同志の兄弟で、何事に付けても、快く普之進を迎へぬのが當然であるのに齊彬には少しも、そんな厭な考が無かつた。妾腹の弟ではあるけれど、普之進に對しては、何事も譲るやうにして親切に交際つて居た。此の一事でも、齊彬の氣品の高い人だといふこゝは分る。殊に安政五年の夏、病を得て死ぬ時分、相續せしむべき男子の無い爲に、大分藩臣の間が動搖した。其時に齊彬は「普之進の子忠義を以て、家督相續をさせやう」と遺言をした。普之進は後の久光であるが、其久光の子忠義を以て、家督相續をさせろ、といふ遺言が、前に述べた御家騒動から考へて來て、普通の諸侯に出来るこゝではない。それを平氣で、一度仇敵であつた久

光の子に島津家を護つた、其處に齊彬の偉い所はあつたのだ。

齊彬の在世中、最も心を入れて手をつけたのが、幕政改革の一事であつた。是が爲には一族の中から篤子といふ、偉い婦人を見立て、更に之を近衛左大臣の養女として、十三代の將軍家定の室にした。家定は病身で、篤子が興入する時分には、婦人の必要を感じぬほきになつて居た。それを承知で、本人の篤子にも納得させて、將軍の簾中にしたのであるが斯ういふ工合に婚姻政略から徳川家へ取込んで、幕政の改革を計らうとした。其こゝに着手せざる以前、篤子の興入したのを見たゞけで斃れたのは、何れ程遺憾なこゝであつたらうか、此計畫をするのに付いて、幕府と島津家の間を往來して、萬事都合好く運びを付けたものが、即ち維新の大局に非常な關係を有つて居た、例の西郷吉之助であつた。

西郷が、如何なる人物であつたかといふ事は、今更述べるまでもないが、兎に角、あれだけの人物を、藩中の輕輩から見立て、齊彬が自分の身邊に置いて、幕府や諸侯の間へ使ひさせたといふこゝが、頗る興味のある問題だと思ふ。

今の時勢は違つて、其時代には人間賢愚不肖よりも、家柄の善惡さか知行の高に依つて、其取扱の上にも非常な差があつたのだ。何んな偉い人でも、輕輩微祿の中から身を起したのでは、殿様と膝組で話をするなきといふこゝは、到底出来ないのであるが、齊彬は一度、吉之

助を家來の中から見出すこゝ、之をお庭番に取立て、始終庭先の縁端に腰を下しては、吉之助の對手に、天下國家のこゝを談じたのだ。斯ういふ遣方をして、詰らない身分の者の中から、吉之助のやうな者を捜し出した、其處に又齊彬の偉い所があつたのだ。之に付いて、チト異説のやうではあるけれども、僕が前年、鹿兒島へ行つた時、齊彬と西郷の關係に付いて調べて來たこゝがある。其中に斯ういふ面白い傳説があつたから、これを紹介して置かう。

齊彬が、まだ西郷を知らないで、江戸の邸に居た時のこゝだが、小石川の水戸邸へ、烈公から招かれて御馳走に行つた。其時、烈公に附いて居たのが、例の藤田東湖であるが、色色な世間話から、家來自慢をするやうになつた。時に東湖が、齊彬に向つて、

「殿の御家來の中に、西郷吉之助といふ偉い人があるさうでござりますが、此頃では何役を致して居りまするか」

こゝ、突然に聽かれて、齊彬が答に苦んだのは、何れ程偉い者か、まだ西郷の名前さへ知らなかつたのであるから、一寸答に澁んで、話を外せて其日は歸つて來たが、これから左右の者に就いて、聽いて見るこゝ、藩の御用達の西郷吉兵衛の俵に、吉之助といふ者がある、こゝいふこゝが分つた。併し、年齢もまだ極く若い、詰らない身分の者の子であるから、偉いといふた處で知れたものである。縦令何程偉からうこゝも、齊彬が直に呼んで話すこゝも出来ないから、其儘

に過ぎて、それから薩摩へ歸つて、或る時近郊へ獵に行つた。其歸途に多くの家來が出迎ひに来て、路傍に平伏して居る。其中に一人、目に着いた者があるので、左右の家來に向つて、

「彼は何者であるか」

「いふて御尋ねになるに、家來は直に答へて、

「西郷吉之助といふ者でござりまする」

と申上げたので、齊彬は胸の中に「ハ、……彼が此間の話にあつた西郷であるか」と思つて、俄に御庭番に引擧げた。夫から齊彬と西郷は親密になつたのである。事の眞偽は姑く措いて、傳説として頗る面白い、と思ふから述べて置く。

尤も之に付いて、もう一つ踏込む、尙ほ面白い話がある。明治になつてからの海江田信義即ち御維新前の有村俊齋が、江戸詰の時に、藤田東湖の盛名を聞いて、之を訪ねた所が、藤田の話が有村には充分に解らない。藤田は水滸の識者といふばかりでなく、天下に於いて屈指の學者である。其藤田に對して殆ど無筆に等しき有村が話の折合ふべき筈が無い。併し、熱心に訪ねて来るから、藤田は好い加減に扱つて居たのだが、或る時藤田が、藤田に對つて、

「勤王は何ういふことに基いたものであるか」

といふ奇問を發した。藤田は暫く考へて居たが、

「お前のやうに、さう物が解らなくては、何事を話すのも面倒であるから、太平記といふ本を讀んだら宜からう、今までに之を讀んだところがあるか」

「イエ、また見たことはありませぬ」

「それでは是から、太平記を空に讀めるまで耽讀して見なさい、さうすれば勤王の何者であるか、といふこの一斑だけは解る」

之を聞いた有村は、それから邸へ歸つて来て太平記を一生懸命に讀んで、到頭暗誦が出来るまでになつた。藤田も餘り煩いから、斯んなことを言ふて撥付けたのだが、これを眞に受けて有村が、遂に太平記を暗誦した、といふ熱心に感心して、それからは一層深く立入つて、有村に色々なことを教へたといふことであるが、藤田は有村に向つて、

「何うもお前では、薩藩の事情を聴くにも、十分なことが分らなくて困るが、誰か偉い人がありさうなものだが、お前が藩に於いて、偉いと思ふのは何ういふ人であるか」

と尋ねられて、有村は、

「そりや、吉つアさんが一番偉らうござす」

と答へた。

「ハ、ア、吉つアんは何ういふ人か」

『西郷吉之助いふものでござります』  
 そこで、初て東湖が西郷の名を覚えたのだ。折柄、齊彬が御客になつて、主人烈公に對座したから、そこで齊彬が何と答へるかと思ふて、東湖が尋ねて見たら、前に述べたやうな次第であつて、齊彬はまだ吉之助を、よく知らなかつたらしかつたので、東湖も話を止めて、其後は強ひて尋ねなかつたのである。斯んなことが縁になつて、吉之助が齊彬に見出されたことが、即ち此話の最も興味のある所であるが、此顛末に付いては僕の著述たる西郷南洲傳に、詳しく書いて置いたから、今餘り立入つた話はしない。大體に於いて齊彬が、何ういふ人爲であつたかといふことは、是だけで止めて置くことにする。

### 井上侯の報恩旅行

(一)

毛利家の世臣で井上五郎三郎、此人の先祖は毛利元就を争ふた程の豪族であつたが、元就の覇業が成つて後、井上一族の反抗を虞れるが爲に、片端から討滅して行く、其難を繼に免れて、毛利の家來になつてしまつたのが、井上家の先祖である。されば普通の家來に違つて、毛利家でも井上家に對しては、相當の取扱はして居たのだ。毛利敬親の代になつて、井上家

の當主は、五郎三郎といふ人であつた。其俸が、幾太郎といふて、五郎三郎の亡くなつた後に當主になつたのであるが、幾太郎の弟を聞多といふて、是は次男に生れた爲に、志路といふ家へ養子にやられて、文久三年の春までは志路姓を名乗つて居た。此聞多が後の井上馨のこゝである、されば家祿は薄かつたけれど、生活は相當に營んで居たのだ。縦令毛利家から相當の待遇はされて居たにもせよ、要するに百石未満の小身者の家に生れて、而かも彼れまでの身分になる、其長い歲月の間には、非常な波瀾もあれば、成敗の歴史にも富んで居る。兄の幾太郎は、洵に温順な性質の人で、其履歴にも世に傳ふる程のことは無かつたけれど、弟の聞多は強情我慢の天性で、若い時分から自我の念が強く、こんな所へ出て行つても、なかく他に負けて居ないといふ、其氣風が或時は害をなしたこゝもあるけれど、大體に於て出世の原因は此氣象に基づいたのだといふことは言へる。同じ様に出世した、山縣や伊藤が、擦傷一つ負はずに、明治政府の元老にまでなつた。其中で井上のみが、全身に十數箇所の刀痕を印したといふ所に、井上の活躍振も想像されるし、又其如何に強情であつたかといふ、證據にもなつて居る。維新の際に功勞があつた爲に、華族令が布かれた時、一躍して伯爵になつた。死ぬ時分には侯爵にまで陞つて居たが、多くの元老や大臣の中で、此人位よく他人の世話をした者は無い。従つて、此人の世話を受けた者は、誰でも深く其恩に感じて、神様のやうに有難がつて居たが

さういふ關係を有つて居ない方面の人は、井上の親切振を嘲つて、餘計な世話焼爺のやうに言ふて居た。他の世話はよくしたけれど、餘り立入つて世話を焼き過ぎる所から、時には世話をされる者から、邪魔者扱いをされることはあるけれど、本人は左様なことに頓着なく、一旦引受けたら自分の身のここのやうにして、どんな手段でも取つて、其引受けた事の責任を果して行くといふ調子があつたから、何うかするに世話をし乍ら、陰に廻つて反對されるやうなこどもあつた、井上の世話好きといへば、大概な者は知つて居るが、一度此人の世話になつた者は生涯頭の擧らぬこゝになつてしまつて、親分乾分の關係が結ばれてしまふ。其事情を知つて居る者は、可成く避けて、寄付かないやうにして居たけれど、日本の財界を三分して、少くも其二分を支配して居た、大きな仕事をする者は、何うしても井上の方へ引着けられて了ふから、彼が晩年の勢力は實に偉大なものになつた。大阪の藤田組や鴻池は言ふまでもなく、九州の炭山を有つて居て、一代の富豪と謳はれて居る、貝島家を首め、麻生、安川、中野、伊藤などの連中までが、井上に對しては頭の擧らぬ關係になつて居た。それから三菱の岩崎と相並んで、富豪の横綱になつて居る三井家の如きは、井上を最高顧問として戴いて居た、是等の富豪を動かして、何か一つの仕事をしようとする者は、何うしても井上の力を藉りなければならぬやうになつて居たのだ、さういふ關係から、井上の勢力は日に月に大いものになつて來て、

死ぬ時分の井上は、政治家といふよりは、財界の霸王といふ方が、適當であるといふ位に、我財界に於ての一大權威となつて居たのである。

三井の益田孝が、贅澤な生活をして、樂々世を送つて居ながらも、段々瘦せて困るに似たり所から、醫者に就いて其病源を聞いたならば、其醫者が笑つて、「貴下の瘦せるのは病氣の爲ではありませぬ、井上さんの雷怒で瘦せるんでせう」と言つたことがある、其位に井上は他の世話もよくするけれど、又疝癪の起きた時は、片端から怒鳴付けて、對手の身分が何程によくなつて居ても、左様なこゝには更に頓着しなかつたのである、そこで世間からは、内田山の雷爺といふて、陰口こそ利くけれど、其前に出れば誰でも悔々して居たものだ。

## (三)

桂太郎が名古屋の師團長をして居た時分に、香雪軒の娘のかな子といふ婦人に通じた。所が香雪軒では、大工の娘を貰つて育て上げたのも、心術を言へば家の弗箱にして、左團扇の材料に使はうとしたのである、それを貧乏師團長と紳名のある、桂なぞに根扱にされては、それこそ堪つたものではないのだから、何うしても桂の家にかな子を送らうとしない。桂は妻を失ふて間も無いこゝであつたから、何うしてもかな子を家に迎へやうとする、そこで香雪軒と桂と

の間に、紛擾が起つた其時も、井上が態々名古屋まで出掛けて行つて、香雪軒の夫婦を吐り飛ばして、かな子は自分の家へ貰つて来て、桂の妻にしてしまつたのだ、それであるから戸籍の裏帳を見れば、井上馨養女としてあるのが何よりの證據である、井上が、香雪軒といふ料理屋から、かな子を貰ふ必要は無い、詰り桂の妻にするに就いても、料理屋の娘を師團長の妻には出来ない、そこで井上が養女にして、此紛擾の始末を付けてやつたのだ。其時にも桂の負債を整理して、何うか斯うか、師團長の體面を保たせるやうにしてやつた。乍併、其負債を整理するに就いて、必要な金は一文も出して居ないので、多くは名古屋邊の富豪から、頭割に金を集めて、桂の貧乏を救ふてやつたのである。桂は井上に救はれて、其有難味を感じて居たらうが、肝腎の金を出した者は、桂に少しも悦ばれて居ないので、又九州の貝島家が、今日のやうな大い身上になつたのも、矢張り井上が、世話をしたのが原因であつて、それに就いては、長く貝島家に傳ふべき物語がある位で、今それを長たしく述べる暇も無いが、元來貝島太助は鶴嘴を持つて石炭山へ這入つては、春を擔いで石炭を運んで居た、一人夫に過ぎなかつたのであるが、其爲人は何處もなく大きく、文字は無いけれど物の理解もよく出来て、今日の如き富豪になる位の男であるから、何處もなく人に好かれる所があつた。豊前の行橋といふ所に、柏木勘八郎といふ素封家があつて、其主人は極めて温良な、よく他の世話をする人であつた、貝

島は其人に縋つて、少しづつ、の資本を引出しては、持山の石炭を掘つて居ただけれど、逆も左様なことでは收支の償ふ譯も無く、又有つて居る山は、極めて石炭の豊富な山であるから、之を大仕掛にして盛に掘つたならば、香に收支が償ふばかりでなく、大きな身上にもなれるといふので、段々柏木に縋つて引出した金は、終に數萬圓の多きに上つた、所が、柏木の方でも出来るだけの世話はしたけれど、自分の身上に障るやうな、金の出方も出来ないものであるから、今まで出した金が返つて来なければ、後の金も繰廻しをしてやることは出来ないといふやうな譯になつて、金主が金を出さなから、貝島の仕事も思ふやうに運ばぬことになつた。所へ井上が、九州視察で出掛けて行つた時、柏木の紹介で、此貝島に一度會つて見るに、如何にも其爲人が純朴で、眼に一丁字は無いけれど、色々な質問に對して、其應答が如何にも要領を得て居て、此男ならば世話をしてもやつても、其効があるに、敏くも井上は見込を付けて、貝島の持山を視察に出掛けた。所が人も山も、全然井上の氣に入つてしまつて、そこで三井の支配人に命じて、貝島へ金を貸出させるやうにしたのである。時恰も日清戦争が起つて、石炭の値が一時に高くなつて来た。此機會に乗じて貝島は、三井の資本に依つて、盛に石炭の採掘を始めた。それが好く當つて、事業は日に増し擴がつて行く。貝島の住家のあつた關係から、直方といふ町も、今日のやうに盛なものになつて来た。約言へば貝島が、大きくなつた爲に、直方が盛に



なつて来たので、直方の興廢は、殆ど貝島一家の興廢に依つて定まるいふ位の有様になつた。されば今日でも直方へ行けば、貝島は殆ど其王様の如き勢力を有つて居るのである。其後日露戦争が起つて、又大きな金を儲けた。工業の發達に連れて、石炭業が益々盛になつて行く所から、遂に莫大な負債も、三井家に悉く辨濟して、今日では全く借金無しの貝島家になつて、世間の評判では、二千萬圓以上の資産がある、と言はれて居る位になつた。乍併、其大きな貝島家の出来たのは、全く柏木三井上の力であつて、今日でも貝島家が、此兩家に對しては深く敬意を有つて居る位で、兎に角、井上は一度信じて世話を始めるに、其處まで人を引立てるだけのことはした。

けれども、親切に他の世話をしても、井上が一度引受けて夢中になるに、自他の別がなくなつてしまつて、頼みもしないこゝにまで世話を焼くやうになるから、そこで世話をされ乍ら、井上を嫌ふ人も出来るいふやうな譯で、井上も馬鹿でないのだから、其位のことには知つて居るけれども、それを承知の上で、執拗く世話をするいふ所に、又井上の面白い點はあるのだ。唯茲に一つ困ることは、他の世話をして其人を信用するに、公私の別が無くなつてしまふまで世話をする。其實例を挙げれば、大阪の藤田組に對するこゝの如き、又三井家に對する世話の如き、時々場合に依つては、政府の財政方針まで曲けさせても世話をしたり、或は政權を利用

して、三井家の事業を助けるこゝもした。世話をされた人は喜んで居るであらうが、一向さういふ家に關係の無い、一般の國民から見れば、井上といふ奴は實に怪しからぬ。自分が世話をして居る商家の爲に、天下の政權まで利用するに、國賊に等しき奴である。いふて、憤慨する者もある。是は強ちに憤慨する者ばかりが悪いとは言へない。井上の親切も、澆季の世に珍らしい程ではあるが、其處まで立入つて他の世話をするには、自分の位地に顧みて、少しは遠慮しなければならぬのであるが、井上は其點になるに、少しも頓着なく、世間の批評に構はずし、くやつて行くので、左様な所から井上に對する世間の批評が、善惡の兩面に分れたのである。

## (三)

長い間の生涯には、他の世話をしたらうが、又他の爲に世話をされたこゝもある。殊に維新前の騒動の時分には、まだ身分も出来て居らぬし、家も左まで富んで居なかつたのであるから、東西に奔走して、浪士生活をする時代には、随分他人に迷惑を掛けたこゝもあつた。明治四十二年に大い病氣に罹かつて、一度は誤つて訃報を傳へられた位に難かしかつたのが、醫者の丹精で元の健康に復するに、直に旅行を企てた。其際に四十年前の恩人の子孫を訪ねて、厚く報恩をしたといふ美談がある。井上の悪く言はれる點は、世間によく分つて居るから、僕は殊更

に、井上の人情に厚い、美しい點だけを述べて見やうと思ふて、報恩旅行の顛末を述べやうと思ふのである。

文久三年の八月十八日、京都に一大政變が起つた。それは何ういふ譯かといふに、初め毛利家では桂小五郎を以て、政務座役といふ役にして、京都の藩邸に詰めさせることにした。此桂は後の木戸孝允のこゝであるが、まだ二十六七の若盛り、智慧も湧くやうにあつた時代のこゝで、藩の公金を盛に振撒いて、貧乏な公家を巧く取入れて、朝廷の評議を左右するだけの實權を握つてしまつた。其結果、攘夷の御沙汰を眞向に振翳して、徳川幕府を苦めたこゝは、一通りでない。現に文久年間に前後二度までも、勅使が關東へ下つて、幕府へ攘夷のこゝを迫つて居る。此こゝは全く桂が、朝臣を煽動してやらせた狂言であつて、是が爲に幕府は非常に苦められた。十四代の將軍家茂が上洛したのもそれが原因であつて、其前後に於ける桂の活動は實に盛なものであつた。従つて幕府が、毛利家を憎むこゝは一通りでなく、何か機會があつたらば、京都から毛利を追拂つてしまはうと、そればかりを工風して居たのである。

然るに、多くの朝臣の中にも、毛利の遺方が餘りに惡辣であるといふて、密に不平を懷いて居た者もある。宮様の中にも、同じ考を有つて居た御方があつた。中川宮朝彦親王が、毛利家に對しての惡感は一通りでなかつた。殊に毛利家は、攘夷の一點張りで、朝意を動かして居

たのであるが、中川宮は開國の意見を有つて居たから、根本に於て毛利家と、意見を異にして居たのである。此御方は粟田口に邸があつたので、粟田口宮ともいひ、又青蓮院の法主であつた關係から、青蓮院宮ともいひ、彈正尹といふ肩書があつた爲に、尹の宮ともいふたのである。現今の久邇宮家が即ちそれである。世を擧げて攘夷論に熱中して居る時、獨り宮方の中で、開國の意見を有つて居られたといふ丈けでも、既に普通の宮様でなかつたといふこゝは言へる。それに巧く喰込んで、中川宮の力に依つて、毛利の勢力を京都から驅逐しようとしたのが、會津中將であつた。會津侯は言ふまでもなく、幕府の唯一の味方であつて、當時の藩主たる容保が、非常に潤達な生れで、頗る才物であつたから、敏くも中川宮に縋つて、毛利反對の運動を始めるこゝになつた。桂は如何に精巧なやうでも、幾分の間隙があつたものか、何時か知らず朝廷の勢力は、中川宮の爲に打壊されてしまつて、それが事實になつて現はれたのが、文久三年の八月十七日から八日へ掛けての政變になつたのである。

今まで毛利家の爲に、手足ぎなつて働いた公家は、悉く朝廷の御勘氣を蒙つて、謹慎を命ぜられる。近衛、鷹司、三條を首めとして、其時に御勘氣を受けた者は、儻指するに暇の無い位であつた。同時に毛利大膳大夫は、禁裏守護職を罷免され、其藩士は京都に在住するこゝさへも禁止されてしまつた。吉川監物や毛利齋岐守は、桂と共に采配を振つて、藩士や浪士を一

纏めにして、長州へ引揚げるの止むなきに至つた。其際に御勘氣を蒙つた、二條首め七人の公家が、矢張り京都を遁れて長州へ落ちた。之を世間では、七卿の長州落と稱して居る。

乍併、毛利家の方からすれば、何の爲に此御勘氣を蒙つたのか、其意味が解らない。今まで朝廷の御爲には、何んなことでも否やを言はずに、御用を達して居たので、それが唯一晩の中に、御不興を蒙むるまいふのは、甚だ其意を得ぬ。殊に朝廷の御思召に従ふて、攘夷の爲に働いて居た七人の公卿が、身を置くに所が無いまでになるまいふのは、甚だ以て其意を得ぬことであるから、兎に角、此七卿の爲に御勘氣御赦免の嘆願をしようまいふことになつて、翌元治元年の晩春、もう夏にならうまいふ時分に、毛利家の家老國司信濃、谷田右衛門介、福原越後の三人が首領として、四百餘名の藩士を率ゐて、京都へ押掛けて来た、それを幕府の方では朝廷へ願つて伏見で喰止めやうとしたから、茲に於て衝突が起きて、七月十九日の九門の戦ひとなつたのである。毛利の家來が何ほき働いた所で、在京十一藩の兵を、向ふに廻はしての戦ひであるから、遂に散々の敗北を遂けて、久阪玄瑞、寺島忠三郎、入江九市、來島又兵衛等の連中は討死する。久留米の水天宮の神官をして居た、眞木和泉守は參謀長の格で、此一軍に加つて居たのであるが、此人も遂に敗軍となつてから切腹してつた。何か機會があつたならば毛利を打倒してしまはうまいふ考で居た所へ、斯ういふ失策が出来たのであるから、此機會を逸してはならぬと、愈々

毛利家へ對し、其罪狀を數へて嚴重な交渉に及んだのが、最初の長州征伐になつたのである。

尾張中納言は征討總督として、藝州廣島まで下つて、愈々開戦まいふ場合になつたのを、薩藩の西郷吉之助が、密に之を憂ひて、尾張侯を説いて仲裁役に立つた。是は薩藩と長州藩が、昨年の政變の爲に、甚く感情が悪くなつたのは、後日の爲に良くないから、此機會に於て長州藩と和解をして置く必要がある、まいふ考で、西郷が仲裁役を勤めたのである。幸にして尾張侯が深く西郷を信じて居たので、到頭此仲裁は成立つて、尾張侯は兵を率ゐて引揚げることになつた。其代り毛利家の三家老は切腹して、其首は廣島の國泰寺の門前に曝された。之に就いては吉田松陰の門下生であつた連中が一時に起つて、さういふ不面目なことをしてまでも此戦ひを和睦しなければならぬまいふ筈はないのであるから、今後は飽までも幕府に對して、對抗し得るだけの準備をしなければならぬまいふので、尾張侯が兵を率ゐて引揚げて了つた其後で、盛に開戦の準備を始めた、左なきだに尾張侯が、和睦をして歸つたのに不平を懐いて居る佐幕派の連中は、得たり畏し將軍を説いて、遂に二度目の長州征伐の軍を起すことになつた。此の前後に於て井上は、非常な活動をして、毛利の藩論の紛々として居たのを、開戦論に纏りを付けた、其事が原因になつて、袖付橋の遭難となり、身に重傷を負ふて倒れて、其疵療治を兼ねて征長軍を迎へる準備の爲に、九州へ行く様になつたのが、例の別府の温泉に足を止

めて、蘇維いふ博徒の乾分になる物語の端緒となつたのである。

(四)

今では日本全国を通じて、温泉場を稱するものは非常に数も多く、大概な人は暑いにつけ又寒いにつけて、温泉行を試みるやうになつて来て、今が温泉の最も流行の頂上であらうと思ふ。併し、昔の温泉へ行く人、今の温泉へ行く人は、其目的が全く違つて居る。昔の人は何か病氣があつて、自宅では充分の保養も出来ない、せいふので、已む事を得ず温泉行をするのだが、今の人は何の病氣もなく、人並外れて達者な者までが、動もすれば温泉に行く、畢竟を言へば、贅澤な遊びをするのは温泉に限る、せいふたやうな譯になつて居て、大概な者は、怪しい女を連れて行くのである、夫だから身體の達者なものが温泉へ行つて、歸つて来ると時は何か病氣を背負ひ込んで居て、夫から醫者にかゝるやうな事になる。病氣があるから湯治に行つて癒す、せいふのなれば、分つて居るが、湯治に行つた爲めに病氣になつて来るなどは、昔の人に話しても却々眞正にするものではない。少しばかりの金を持つて、ブラ／＼遊んで居るもので、温泉行を試みぬものはない位に、温泉が榮えて来る、温泉宿の方でも、遊客を迎へる爲めに、種々な設備をして、今では稍々名を知られて居る温泉場には、總て遊ぶ機關が備は

つて居て、面白く時間を送れるやうになつて居る。其代りに金の費る事は一通りでない。されば眞正に病氣があつて、保養に行く者の爲には随分迷惑な次第で、外觀を張つた贅澤遊びの爲めに出掛ける湯治客も、同様な取扱ひを受けるのだから堪つたものではない。株や米の相場で俄に儲けな成金連中が其んなころへ行く、百圓紙幣なさを自慢らしく振廻して、茶代のレコードを破るこことがある。温泉宿の方でも、さういふ事に馴れて終つて、今では十圓や二十圓の端多金では、茶代を買つたやうな顔もせず、却つて遣らない方が宜い位なものだ。少し位違つて嫌な顔をされるよりは、寧ろ遣らないで嫌な顔をされる方が徳用だ、せいふ考へになつて、此頃では茶代を遣らない人も出来たやうだが、夫は餘程我慢の強い人でなければ出来ない事で、大概な者は少しの茶代を出して、帳場の番頭に遊い顔をされて居るのである。温泉場を言へば、熱海、箱根が最も能く聞えて居る。夫から伊香保や有馬が古くから知れて居るが、近年になつて北越の方面に、大分評判の温泉場が現はれて来た。山陰に行けば城崎、いふ立派な温泉があつて、總ての設備も、此頃では整ふて来た様に思ふ。ズツと離れて九州へ行く、いふ別府温泉がある。單に温泉としては日本一であらうと思ふが、併し夫は人々の思ひやうで、いや他に猶且偉いがあると言へば、強て争ふ氣もないが、今日まで僕が歩いた温泉場では、別府位温泉に豊富なところは見當らなかつた。縣廳の出来て居る大分から二里ばかり離れて、前に大

きな瀧を控へ、その方に四極山といふて、昔は大友宗麟が城を築いたといふ美しい山があつて、後方は一帯に山を負おひ、山海の眺めに富んだ、氣候の良い、眞に温泉場としては適當な土地である。最近十年の間は、日に二十戸平均に人家が殖えて来て、今では見渡す限り家が列つて終つたが、夫でも温泉の量には少しの影響なく、何様な所でも、穴さへ掘れば直ぐに湧出すといふのであるから、別府の人は湯の上に住んで居るやうなものである。門並列んで居る温泉宿も、只の五十や六十の数ではなく、夫々に大きな湯槽を持つて居る外に、中流の家でも湯槽の一ツ位は有つて居る。夫から最も人を喜ばせる砂風呂といふのがあつて、是は海岸の砂地に、人の身體が入る位の穴を穿つて、其中に寝て居る、尻の下から暖かい湯が出て来る、其氣持のよいことは格別だ。満潮になれば波は其處まで来るのであるから、只だ干潮の時を見て、砂の中に潜つて湯に浸る、いふ事になつて居る。是は全く他の温泉場に見る事が出来ない事であつて、獨り別府温泉の誇りになつて居るのである。温泉は概して透明で、厭な臭氣もなく、只不思議なのは、一間か二間離れたところに湧き出す温泉が、夫々に成分の違つて居ることである。何れにしても是程に湯の量の豊富なところは他にない。暇に金の有る人は、一度は行つて見るべき温泉場である。

(五)

却説、井上は高杉等の勸めに依つて、傷療治の爲めに、別府へ潜む事になつて、下の關を出る時に、お静といふ藝妓を連れて、船路を二日餘りで別府へ入つて来た。其頃は草葺屋根の百姓家にも等しい温泉宿が、眞の五六軒あつたのみで、大概は浴客が自炊して湯治をするやうになつて居た。其中に於て稍や人に知られたのが、若松屋といふのであつた。夫へ井上は泊る事になつて、是からお静を對手に、暇のあるに任せて、山遊びをしたり湯に浸つたりして、其日を送つて居たのである。若松屋の主人は彦七といふて、却々氣概のある、斯ういふ商賣をして居る人には、珍らしいほごに見識を持つた、今で言へば公共心に富んだ人物であつたから、別府の若彦と言へば、近郷近在の人にも知られて居て、今でこそ日名子を初め、大きな旅館も澤山出来たけれど、其頃は若彦が先づ評判の宿であつた。

井上は、下の關在の郷士の俵といふ觸込みで泊り込んで居たのだが、何となく其の舉動格好が、普通の郷士なごき異つて居るのを、早くも見て取つた若彦は、特に注意して待遇して居たのだ。其頃は井上聞多といふ名が他國にまで響いて居たのでは無いから、其儘名乗つて居ても差支はないのだけれど、春山花輔と變名して泊つて居たのである。處が或日の事、内湯にばかり入つて居たのでは興味が薄い。今日は外湯へ入らうと思つて、夕方からプラ／＼出掛けて有名な桶湯の前へ来た。中を覗いて見るに、誰も入つて居る者が無いから、其處で井上は此

湯に入る事にして、只一人好い心持に入浴して居た。是も他の温泉場にはないやうであるが、別府には、楠湯、不老泉、其他二三ヶ所に大きな湯風呂が町の中央に設けられてあつて、其處へは何様な者でも一文無しで、勝手に入つて差支ないやうになつて居るのだ。只昔から今日に至る迄、此の一事を廢さずに行つて居るのは、此土地ばかりである。楠湯は即ち其の一ツであつたから、大きな湯風呂の中に、井上は只一人浴つて、好い心持に休んで居る。聽て烈しい足音が聞えて、ドカ／＼入つて来たのは、此附近の人足らしい風態をしたものばかりで、着物を脱ぐが否、湯槽へドブ／＼飛び込む、其無作法な有様いふたら、殆んどお話にもならない程で、井上は人が入つて来るやうだから、其方を背にして首まで漬つて、ヂツミ動かずに居る。恰で頭から浴せるやうに、湯の飛沫がか／＼つて来る。此様な者を對手に、愚圖愚圖いふたミころで仕方がないから、ヂツミ堪へて入つて居る。やがて滿らぬ事から喧嘩を初めて、湯の中で大立廻になつた。傍杖をくつては迷惑するから、湯槽から這ひ出さうとはしたが、何しろ喧嘩が烈しいので、這出すこも出來ぬので、暫らく其の成行を見て居た。仲裁する者があつて、漸く喧嘩は治まつて、仲直りに一杯やらうといつたやうな事をいふて、夫々に衣物を着て出て行く。井上も少しく経つてから上つて、是から衣物を着やうとする。意外にも自分の脱いて置いた衣物はなく、汚い着物が一枚残つて居るばかりだ。さては今のドサクサ

まぎれに、着替て行かれたかミ、氣は付いたけれミ、最早時が経つて居るし、對手のない喧嘩は出來ず、井上は澁々ながら残つた衣物を着て、若彦へ歸つて来たが、氣持の悪い事は尋常でない。

若彦の前まで来るミ、早くも宿の主人が、

「オヤ、さうなさいました、大層穢い衣物で、ハ、ア、さては風呂場で間違へられましたな」

「ウム、如何にも其通りぢや」

「夫ですから外湯へお出でなさるなら、朝の早い内が宜しいミ申上げたのでございます。逆も今時分行つた日には、此邊りへ稼ぎに来て居る、亂暴な輩が、一時に立て込みますから、御身分のある御方は、逆も入つて居られるものではありません」

「全く其通りであつた、私が入つて居るミ、後から来たものが喧嘩を初めて、頭から湯は浴びせられるし、散々な體で、一同が引揚げて行つた後で、出ようとするミ此衣物が一枚残つて居て、私の衣物は無くなつて居たのぢや」

「さうですか、夫れは飛んでもない事でございます。併し、別に御大切なものはなかつたのでございませうか」

「其處で、少し困つた事が出來たのは、何時でも彼れに預けて行く願卷を、さうした譯か、今

日に限つて持つて行つたのぢや。夫が衣物と一緒に失つて了ふたのぢやよ」  
聞いた若彦は眼を圓くして、

「夫は大變でございます、餘程入つて居りましたのですか」

「イヤ、金は僅かぢやが、他に持合せがないのだから是には頗る困つた」

「夫は何も申上げやうがございません、マア兎に角、此方へ」

と言つて、是から若彦が、自分の座敷へ連れて行つて、猶詳しく事情を聞いてから、  
「宜しうございます、さういふ譯なれば是から役場へ届けまして、夫々に手配りをいたす事に  
致しませう」

さいふのを聞いて、井上は驚いた。假令自分は、お尋ね者になつて居る、さいふ程の兇狀持  
ちではないにしても、毛利藩の井上聞多と言へば、幕府の役人等には、幾分か知られて居るの  
だから、此始末を届けた爲に、萬一の事があつては、迷惑であるから、役場へ届ける事文は止  
めさせるのが可い、と考へて、

「其の手續をかけずに、是は此儘にして貰ひ度い」

「そんな譯にはなりません、正直者の集まつて居る別府の温泉場で、さういふ奴が、遠方から  
お入來になつたお客様の物を、持つて逃けたなぞさういふ事が知れます、是から御身分のある

方がお出で下さらぬやうになります、一刻も早く其の悪い奴を捕まへて、二度ミ斯様な事の  
ないやうにしなければなりません」

「お前のいふのは道理ぢやけれど、夫では却つて手續をかけて氣の毒ぢや、奪られた私が我慢  
さへすれば宜いから、さうか其の悪者を、追廻す事だけは許してやつて呉れ」

「イエ、さういふ譯にはなりません、何でも是は調べさせます」

「若彦が強情張るのを、漸く井上は宥めて、届けを出すだけは止めさせたけれど、さて差  
當つての困難は、他に一文の貯へもない事である。座敷へはひつて来る、お静も是を聞いて  
流石に弱い女の心から、もう涙ぐんで居るのは、知らぬ他國へ來て、一文無しになつたさういふ  
のでは、如何に井上を頼りにして居るかは言ひながら、此の先がさうなる事かと思へば、心細  
くなるのは當然だ。」

## (六)

「二三日考へた末、お静を下の關へ歸して、高杉に金の都合をさせ、同時に征長軍の一條も何  
ういふ事になつたか、其事情を知らせて貰ふことにした、お静は一人で歸るは駄ださういふて、  
頻りに苦情をいふのを、叱り付けるやうにして、若彦から借りた旅費を持たせて、若彦の親旅

が下の關へ行くといふのを幸ひに、其人に頼んで同じ船で歸す事にした。  
 處が、お靜は下の關へ行つたけれど、其後の便りは更にない、何日まで経つても、お靜の着いた事も言うて来なければ、金も送つてよこさぬから、さア困つたのは井上で、此上は何もかして小遣錢を造る工夫をしなければならぬ、若彦は能く事理の分つた男で、小遣錢位は何時でも御用達ます。こいつては呉れるが、豈夫に夫ばかりを頼みにする譯にも行かぬ。何でも構はぬから勞働をして、金の來る迄の繋ぎに、幾らかの小遣錢を取らうと思つて、若彦に相談するこゝ。

「夫は旦那様の仰せですが、私は結構な事だこ申上げる譯にはなりません。さう御心配をなさらずに、日々のお小遣ひ位は、私の方で心配をいたしますから、お國許の御使ひが來る迄は、安々としてお待ち遊ばしたら如何でございますか」

「イヤ、お前の親切は能く解つて居るが、私も一人前の男で、豈夫にお前の懐ばかりを當にして居る譯にもならぬ、夫に今迄は随分放蕩に放蕩を仕盡したもので、此通り恐ろしい傷を受ける位の亂暴も働いて來たのであるから、親許でも豈夫に喜んで金を送るまい、お靜が歸つて苦心しても、思ふやうにならぬので其返事もないのであらう、マア兎に角、何かする事に仕よう、お前の取持で何か出来るやうにして貰ひ度い」

何止めても聞かないから、其處で若彦が、

「宜しうございます、夫なれば此の土地に、今賣出しの灘龜といふ親分がありますから、其人のこころへ御案内致す事にいたしませう」

「ハ、ア、親分といふ何ういふものかね」

「宇佐八幡の側に、長洲といふこゝろがありまして、其處で生れた漁師の子供ですが、なかなか度胸のある、腕ツぶしの強い、喧嘩の上手な奴でありますので、此の土地へ來た時は、詰らない奴のやうにも思つて居りましたが、何時か知らず多くの子分子方を持つて、今日では別府の灘龜と言へば、何處へ行つても押しも押されもせずに通つて行く、博奕打の親分になつたのでございます、此頃では道普請だとか、大きな家を建てる者は、皆此の者へ頼み込んで、人足の世話をして貰ふやうになりました。此邊りで人足稼ぎでもしようといふには、灘龜の手にかゝらなければ何も出來ないといふやうな譯で、立派な親分になつて居るのでございますが、少し仔細があつて、私は其の灘龜を世話してありますので、只今でも私には一目置いて挨拶をするやうになつて居るのでございます、其處で、旦那様の事を頼み込みましたら、まさか悪い扱ひもいたしますまいから、私が是から一寸行つて相談して参ります」

「ウム、夫は何よりぢや、是非頼む」



若彦は灘へ、井上の身の上を頼みに出掛けた。

## (七)

今の若彦の話の内にあつた、長洲といふ土地は、宇佐八幡から二十町ばかり離れた所で、戸數も相當にあり、漁師も却々に多く、其方面では相當に繁昌した土地だ。今では立派な町家をなして、確か郡役所も此邊に置かれてある筈だ。今の政友會の松田源治は、此町から出て來たもので、極貧しい人の子であるが、苦學力行して、あれまでに身分を立てたのであるから、恰で此土地の人は、宇佐八幡の申子のやうにして、自慢をして居る位である。灘は満らない漁師の子であつたが、子供の自分から氣性の勝つた、肯かぬ氣の悪戯者で、町でも實は持て餘して居た位である。ところが不圖した事から仲間の漁師を殺して、一度は牢にまで入つたけれど、幸に殺された漁師が、極悪い奴であつた爲めに、町の人が盡力して、灘の身體に故障のないやうにして、殺し得の殺され損ないふ裁判で、放免される事になつたのだ。けれども、假令對手は悪くとも、人一人を殺したのだから、土地に住む事だけは遠慮させて、何がしかの金を拵へて、町を離れさせる事にした。夫れから灘は各所を漂浪して、廻り廻つて別府へやつて來た。遂に度胸を腕づくで男を立て通して、其名を人に知られる事になつたのである。別府灘

に沿ふた一帶の地を灘と呼んで居る、本名は永井龜吉であるが、人呼んで是を灘と稱へて居たのだ。

『エ、親分』

『何だ』

『若彦の大將が來ましたぜ』

『ウム、さうか、若彦の旦那が來たつて』

『左様でございます』

『宜し、此方へお通し申せ』

目に一丁字はないけれども大きな親分になつただけ、自分の恩を受けた人に對しての禮儀位は心得て居る。若彦を案内させ、自分は下席へ退つて、

『エ、旦那、御無沙汰ばかりしまして申譯がありません、此頃では何うか斯うか、人様のお世話にもならず、飯も食へるやうになりました、その代り馬鹿に忙がしいので、つい存じながら御無沙汰をして相済みません』

『其の御挨拶では、却て痛み入る、お前さんが漸次男を賣出すので、私も陰で喜んで居るのですよ』

「有難う存じます、是れいふのも旦那のお蔭でございますから、始終家の奴等にも言つてあるのでございます」

「イヤ、お前さんのやうな心掛けの人は、さう世間に澤山あるものぢやない、夫だからつまり此様な顔役にもなれたのでせう、さて親分」

「へエ」

「チト折入つてお頼みがあつて来たのだが、是非承知して貰ひ度い」

「何でございますか、旦那の仰せなれば火の中へでも飛び込まなければならぬのでございませう、全體其のお頼みいふのは……」

「他でもないが、私の家へ此頃来てお在のお方が、是非お前さんの世話になりたいといふ、其の仔細を精しく話すにも及ぶまいが、概括んだ事を話せば、下の關の在の郷士の御息さんで、何か若氣の至りで間違ひをして、身中に大きな刀傷があつて、其の傷療治の爲めに此方へおいでになつたに聞いて居るが、何しろ面白い氣性の立派なお方だけれ、此の間桶湯で災難に出會つて、お國許へ使ひは出したけれども、まだ其の返事が無い、私はいろくにいふてお止めをしたのだけれど、物堅いお方なので、私のいふ事をお肯入れにならないで、何でも一稼ぎして國許からお便りのあるまでは、自分で小遣錢を稼ぎ出すといつて、何とい

つても肯かないから、其處でお前さんに頼んだら可からうと考へて来たのだが、暫くの間お世話をして下さる事は出来まいか」

「宜しう御座います、お世話をして差上げませう、冷飯食ひの十人や二十人は何時でも居るのでございますから、一人位餘計に居たからといふて、私の身上が痛む譯でもないんでござい

ます、ハツハツハ」

「夫ぢや何卒お願ひ申す」

「併し旦那、其人は家へ来て居るのでせうか」

「イヤ、さうぢやない、私の家から毎日通ふやうになるのだが」

「其奴は可笑いね、博奕打の子分に、宿屋から通ふ人が出来るなんざア、餘ッ程變なもんだ、宜しうございませう、お遣はしなさいまし」

「夫ぢや、後ほご私が連れて来るから」

「へイ、お待受けいたします」

斯ういふ次第で、愈々灘總が承知して呉れたから、若彦は井上にも次第を話し、是から直ぐに灘總の三ころへ連れて行く。一通りの挨拶が済んで、井上は何處までも、春山花輔といふ名で、灘總の盃を買ふ事になつた。即ち博奕打の親分子分の盃をしたのであるが、明治にな

つてから侯爵井上馨が、博奕打の乾分になつた事があるなどは、實に珍談の一つにして数ふべき事だと思ふ。

(八)

井上は、遂に灘龜の乾分になつて、毎朝早く若彦の家から、灘龜の部屋へ通ふやうになつた。灘龜は、初て井上を見た時から、食ふに困つて據所なしの人足は思へなかつたけれど、類に若彦が頼むので、曾ての恩に報ゆる爲に、井上の身を引受けてしまつたのだ。井上は飽までも春山花輔といふ偽名で押通してしまつたのだから、乾分の奴等は花公と呼ぶ者もあれば出生が下關附近だといふので、唯長州と呼ぶ者もある。初の中は井上も何もなく變な感じはあつたけれど、段々交際して居る中に、仲間の様子も分つて来るし、又武士としては味へぬ面白い所もあるので、多少は興味を以て交際して行くやうになつた。何うせ親の雪隠へ這入らない、諸國の無頼漢が集つて居るのだから、禮儀作法などの重んぜられる譯もないが、併し、斯う云ふ人達には、又特別の禮儀作法があつて、それは存外に固く守られて居るものである。日の経るに従つて、井上にも追々其呼吸が解つて来るが、何うしても其仲間の人になつて、萬事同じやうに學んで行く事は出来ない、先祖代々の武士であるといふ觀念があるから、口頭では巧い辭を

言ふて、頭は安く下けるけれど、心の中では「何の此蟲輩が」といふ感は始終ある。灘龜が故郷の長洲へ行つた後で、乾分が寄つて集かつて、到頭井上を賭場へ引張り出した。厭だといふのに無理遣に、博奕の仲間入をさせて、確に懐には相當の金があるを、睨んで掛かつたのだから、何うしてもそれを奪らさずに通すものでない、若彦から親分が頼まれて、特別の扱をして居る乾分である、云ふ所に免じて、今までは我慢もして居たが、其恐い灘龜が留守になつて、花公の懐に金があるを見ては、もう我慢が出来ないから、遂に引張り込んでしまつたのだ。丁度其二三日前に、高杉から漸く音信があつて、「まだ秋の方の模様は左までに迫つて居ないから、緩り湯治をして居る、そのうちには迎ひの者を出すから」と言ふて来た。其節五十兩ばかりの金を送つて来たのを、井上が胴巻に入れて居た。それを乾分の誰か瞥み見たから、斯ういふこゝになつてしまつたのだ。所が、愈々博奕を始め見るに、案外にも全て斯様なこゝは知らない井上が、トントン拍子に勝利を得て、連中の金を残らず捲上げてしまつたから、之には流石に閉口して、何うするこゝも出来ない。遂に其日は博奕が潰れて、井上は懐を暖めて歸つてしまつた。サア左様なるに、何んな強算段をしても、もう一度引張り込んで、勝れた金を奪還さすには置かぬ、彼奴の懐に這入つて居る金は残らず捲上げてしまへ、といふので二日程経つて、又總掛りで井上を攻めに掛かつた。前に勝つて居るから、今更厭は言へず、井上も

亦面白く勝つたので、幾らか娯楽にもなつたものか、快く盆莫産の前に坐つて、博奕を始めたのだ。先日の結果に懲りて、今日は常振が、寶賽を拵へて来て、振込んだから堪らない。幾ら井上が金運の強い男でも、寶賽に掛つては一堪りもなく、忽に先日勝つた金を吐き出した上に、自分の持つて居た五十兩も残らず捲上げられてしまつた。灘龜に代つて、留守を預つて居る乾分が、流石に見兼ねて、五兩程の金を包んで呉れたが、それまでも張込んで、遂に無一文になつて、井上は悄然若松屋へ歸つて来た。其様子が何もなく可怪いので、若彦から段々聴かれて、井上も據所なく、實に斯々博奕の話をするに、若彦は眼を圓くして、

「旦那のやうな御方が、左様な所へ立入つた日には、何千兩あつても足りるものではありませんね、彼奴等は年中、左様な悪い事ばかり考へて居る連中ですから、今後は決してさういふ所へ立寄られないやうになさいまし、マア奪られたものは仕方がありませんが、今後は何んなことがあつてもさういふ事をなすつてはなりませんね」

「イヤ、お前にさう言はれるに、何とも面目次第もない、餘り皆から勧められるので、初の中は厭々やつて居たのだが、少し面白くなつて来て、遂に自分から進んだやうな譯で、斯うなつたのぢや、併し勝負は時の運といふから、詰り拙者に運がなかつたのだらう」

と言つて、平然して居る。其鷹揚な様子を見ては、若彦も益々同情せずには居られなかつた。

斯ういふ事情で、無一文になつた井上は、毎朝のやうに灘龜の部屋へ出て行つて、それから後は例の工事小屋なぞへ連込まれて、重い杵を擔がせられたり、帳面を扱はせられたりして居る。随分辛いこともあるけれど、それは自分の爲と思つて、井上もチツと辛抱はして居るが、此時の苦勞は一生忘れられない、その後にも言ふて居た位だから、可なりに辛かつたに違ひない。そのうちに灘龜が歸つて来て、此事情を聞くに、大層怒つて、乾分の一三人を呼付けて、激く詰責けたけれど、今は後の祭で何うすることも出来ぬ。そこで改めて、井上には是から後、人足の真似はするに及ばぬから、帳面の方だけを引受けて呉れる、さういふことになつたので、幾分か人足をするよりは、賃錢も餘計貰へるし、體も楽になつたので、井上は結局、それを喜んで勤めて居た。併し、其様なことでは小遣錢は足りないのだから、何うしても取締をして居る者から、前借をするやうにもなる。借りて使つた時は、甘いものゝ一度や二度は食ふだらうが、其の後は矢張り小遣錢が無くなつて、ビイ／＼して居たのだ。其事情が若彦に知られて、それからさういふものは若彦が、毎朝井上の出掛けて行く時に、娘の初いふのに申附けて、天保錢を一枚紙に包んで井上に貢ぐやうにした。其貢は井上が別府を立去る日まで、一日も休まず、毎朝のやうに持つて来て呉れたのだから、井上も若彦の親切には、深く感じて居たのである。今日こそ天保錢の一枚位は、あつてもなくても同じことだが、其時代のことにすれ

ば、天保銭が一枚あれば、湯に這入つて、髪結床にも行き、腰掛飯屋で三皿四皿の肴を食ふてまた幾らか残るさいふ時代のこゝであるから、井上が毎日貰つた、一枚の天保銭は、井上の身に取つては、容易ならぬ恩恵であつたに違ひない。

斯くて二月餘を過す中に、或日のこゝ、若彦の店頭へ立派な武士がズツミ這入つて来て、『免せ』

『へエツ、入らつしやいまし』

『お前の家に、春山花輔さいふ御方が御泊りになつて居る筈ぢやが、唯今御在宿であらうか』  
之を聴くミ、番頭は驚いたやうな顔をして、姑くは其武士の様子を見て居て、容易に答をし

ない。

『コレ、春山殿は御在宿か尋ねて居るに、何故返事をせぬか』

『叱るやうに言はれて、番頭は尙悔々然しながら、』

『へー、春山様は御逗留でござりますが、唯今は親分の所へ行つて、お不在でござります』

『ナニ、親分……親分は何者か』

『へい、灘總の親分でござります』

『フ、ム、其灘總さいふのは何者か』

『へい、此附近では一番の俠客でござります』

『ハ、ア、其灘總か申す者の方へ參つて居られるのか』

『左様でござります』

『まだ御歸宿には間があるぢやらうか』

『左様でござります、其日の仕事の都合に依つて、早く御歸宿になるこゝもありませんれば、又遅くなるこゝもござりまして、一樣には申されませぬが、まだ御歸宿の時刻ではござりませ

ん』

『フ、ム左様か、然らば其灘總なる者の宅まで案内をして貰ひたい』

『へエ、畏りました』

折柄、若彦が不在であつたから、番頭は唯變だとは思つたけれど、客が武士だから慙ひに隠し立てをして、後で因着が起つては困ると思つて、是から其武士を案内して、灘總の宅へやつて来た。

『へい、今日は』

『オー、若彦の番頭ぢやねいか、何しに來たんだ』

『エー親分は、御在宅でござりますか』

「ウム、親分は、今小屋の方へ行つて居るぜ」  
 「ア、左様ですか、それでは彼方へ伺ひませう」  
 多くの土方人足が、集つて居る小屋がある、其處へ武士を連れて来た。折柄汚くらしい、仕事衣を着て、腰に矢立を差し、手に帳面を持つて出て来た井上を見るに、彼の武士は思はず頭を下けて、

「これは井上先生でござりまするか」

「言はれて、井上は其武士を見たが、顔に見覚えはあるけれど、名は知らぬ人だ。」

「拙者は、高杉隊長の仰せを受けて、先生をお迎ひに参つた者でござりまする」

「フム左様か、それは御苦勞でござつた」

此應接を見て居た、若彦の番頭は、愈々解らなくなつた。今までは宿料も拂へない、變な客人だと思つて居た位で、別に大した人とは思つて居なかつたのだが、今訪ねて来た武士は、此邊で容易に見るここの出来ない。立派な人物である。而も今までの横柄な言葉と違つて、花柄に向つての言葉は、誠に懇懇を極はめたもので、又花柄がそれに對する返答の如何にも横柄であるのを聽いては、何だか薄氣味の悪いやうな感じも起る。所へ、灘龜が出て来て、此有様を見たから、

「イヤ花柄、何うしたんだ」

「オー親分、實は郷里から迎ひの者が参つて、今話をして居る所でござりますよ」

「へエー、御郷里から御迎ひが……」

「左様ぢや」

「マア、此方へ御這入りになつたら宜しいでせう」

流石に灘龜は、多くの人から親分を尊敬されて居るだけに、文字こそないけれど事理は解つて居る。自分の部屋へ連れて来て叮嚀に挨拶をして控へた。井上は彼の武士に向つて、

「之に居られるのが拙者の親分で、灘龜を稱しやる御人ぢや、今日まで長い間一方ならず御厚志に預つたのであるから、足下からも然るべく御挨拶を願ひたい」

「左様でござるか」

「言ひ乍ら、其武士は叮嚀に、両手を突いて頭を下けた。灘龜は何だか分らず、是も同じく兩手を突いた儘、頭をも擧げ得ぬ。」

「此度、井上先生の御迎ひを致して、拙者が罷越したのでござるが、今日まで先生が大い御世話に相成つたごいふこと、何れ御歸國の上は、改めて御禮を申上げられるでござらうが、今日直に御同道申すことに致すから、左様御承知を願ひたい」

「へい、私には何だか些事も事情が分りませぬが、全體此御方は……」  
 「ウム、此御方は毛利家の御家臣で、井上聞多殿に稱しやる、我々の爲には萬事の御指揮を賜はる、大切な御方ぢや」

「へい、さういふ御身分の御方でありましたか」  
 「言ひ乍ら、井上の方へ向直つて、」

「御覽の通りの拙らぬい奴でございますから、今日まで旦那様を、左様な貴い御方にも存せず飛んだ粗相な御取扱ひを致しまして、何れも申譯がございませぬ、何うぞ御勘辨を願ひます」  
 「イヤ親分、何うか其手を舉げて下さい、それでは御挨拶が出来ない、假令郷里の身分は何うあらうとも、當地へ来て、親分乾分の盃を取交して、斯く御世話になる以上は、何處までも貴下は親分で、拙者は乾分でございます、唯今御聴き及びの通りの次第であれば、是より郷里へ立歸りまするが、何うぞ今後にも、井上の名は御記憶下さるやうに願ひたい」

「何れも恐入りました、マア兎に角、本宅の方へ御出でを願つて、御出立はそれからのことに願ひませう」

「折角の御厚志ではあれ、迎ひの者も急いで居るし、又船の都合もあれば、取敢ず若彦へ立歸つて、それからのことに致さう」

「それでは恐入りまするから、何うぞ拙宅まで御出でを願ひたいのですが、如何でございませうか」

「こ、押問答をして居る所へ、若彦は、一旦家へ歸つて、井上を立派な武士が迎ひに来て番頭が案内して、灘總の方へ行つたさいふこを聞いたから、直に駈付けて来て、此有様を見るこ、井上の身分に付て、幾分は自分も察して居たが、それ程の位地のある人にも思つて居なかつた。そこで「マア兎にも角にも」さいふこでは是から灘總を伴ひ、井上と彼の武士をも、共に若松屋へ引取るこにしたのである。」

「若彦へ歸つてから、井上が自分の身分に付て、概略を物語つたので、愈々灘總は恐入つて、親分乾分の盃を返さうと言ふ、それを強ひて井上は押へ付けるやうにして、一旦取交した盃は返さぬ、何れ時節があつたら、其盃は返さうと言ふて、何うしても承知をしない。それを若彦が中へ這入つて、一時自分が預るさいふこにして、是から別れの酒宴を催すこになつた。愈々船に乗込む時には灘總は固より、乾分の重立ちたる者は皆見送りにやつて来て、今までに變つた井上の容姿を見るに付けても、先日の質賣博奕のこを思出すこ、慄然とする程恐しいが、今更に其事を繰返して謝る譯にもならず、怖々もので居たのは、なかくに興味のあつたこであらう。」

一言に長州征伐とはいふが、是は唯一度で済んだのではない。前後二度あつたこと、前の長州征伐は、西郷吉之助の盡力に依つて、纔に戦難を免れて、二度目の長州征伐が、實地の戦争をするこゝになつたのである。元治元年の九月にあつた、京都九門の戦の時長州藩の陣から打出した大砲の弾が、紫宸殿の屋根を壊したり、聖上の御座所間近き庭園に落下した、さういふやうなこゝがあつて、それが朝敵の罪に問はれたのである。それから文久三年の五月に、下關海峡に據つて、英米佛蘭四國の商船に砲撃を加へたので、翌年は四箇國の軍艦が、十八隻で攻込んで来た。此二つの事件が、毛利家の罪状になつて、老中の小笠原重政守が、越前守島田重豪に出張して、談判が始つたのである。所が、毛利藩の方では「御所の中へ落ちた砲丸は、朝廷を侵す爲に撃つた弾ではなく、徳川の兵と戦つて居た場合の逸弾であるから、此一條を以て、直に毛利家が朝敵である、さういふこゝは甚だ無理な御咎めである、又下關の異船砲撃の一條は、會て朝廷から異人の黒船が見えたらば、二念なく撃つてしまへ、さういふ詔勅が、毛利家へ下つて居るから、其詔勅に基いて、砲撃を加へたのであつて、決して毛利家の私心を以て爲したこゝでないのであるから、若し是が幕府に於て悪いさういふならば、朝廷へお談判があつて

(九)

然るべきである、毛利藩は決して幕府から咎めを受けるやうなこゝはないと主張して、なかなか此談判が難しかつた。そこで幕府は兵を起して、毛利を征伐するこゝになつた。其時に西郷が、此戦争をさせてはならぬさういふ考で、征討總督の尾州侯が、自分を深く信じて居て呉れるのを幸に、之を説付けて、遂に周防の岩國に潜行して、吉川監物を説付け、吉川の盡力を以て毛利家を説伏せたのである。藩の議論も此時は區々であつて、容易に決しなかつたから、そこで遂に國司信濃、益田右衛門介、福原越後の三國老に切腹を命じて、其首は尾張總督の本陣へ送り届けて、毛利家からは別に使者を出して、今までの事を謝罪した。斯ういふ事情で、尾張總督は遂に兵を引揚げて、長州征伐は一旦解決を告げたのである。

然るに此幕府と毛利家の反感が、段々難しくなつて来て、藩論は遂に二派に分れ、一方は飽までも戦つて、其理非曲直を分たうさういふ、又一方は此場合に天下の大兵を敵として戦へば毛利は遂に滅亡をする外はないのであるから、縱令多少の箇條は掛けられるにしても、和睦した方が得であるさういふ。此二つの議論が衝突した結果、藩中の騒動となり、遂に山口の城内に御前會議まで開いて、紛紜の末が、開戦論の方が勝利を得て、愈々幕府の兵と戦争を開くこゝに決した。之に付て専ら議論の役を引受けたのが井上であつて、高杉等は其陰にあつて、大に藩の有志を説いて歩いた。之が爲に御前會議では大勝利を得て、硬派が勝を制したのであ



る。後に歴史家が此連中を正義派と稱し、又非戦論者を俗論派と稱へて、殆ど正邪兩黨の區別を立て、しまつたのである。そこへ西郷の仲裁談を持ち込んで、俗論派は勝を制して、正義派は屏息してしまつたのだ。尤も其間に、井上が例の袖付橋で斬られて、九死一生の重傷を負ひ、高杉晋作が筑前の博多へ去つて、一時身を隠したり、其他正義派の連中は片端から或は閉門、或は謹慎、それ〴〵御咎めを蒙つて、活動の出来ぬ身になつた。伊藤俊輔の如きは、是が爲に所在を晦ました、さいふやうな騒動があつて、三國老も餘儀なく切腹をして毛利家の爲に犠牲になつたのである。

所が、博多へ逃げて居た高杉が、疾くも此始末を聞いて、是は打棄て置くことは出来ない、少しも罪科なき三國老が切腹をさせられて、而も其首は敵の陣へ送られる、さいふやうな運命に陥つたのは、全く自分等の熱誠の足らざるの致す所であつて、殊に是が爲に、君侯御父子が寺院へ蟄居せられるさいふに至つては、最早一時の安きを得むが爲に、逃亡をして居ることは出来ぬあつて、是から高杉が萩へ立歸り、同時に今までの有志を密に歴訪して、盛に開戦論を鼓吹し、俗論派の剿滅を策した。此高杉の熱誠が遂に同志の決心を固くさせる原因になつて、慶應元年の正月三日に、下關の奇兵隊が、一時に蜂起するに至つた。此時に奇兵隊の監督をして居たのが今の元帥有朋、其時分の山縣狂介であつた。高杉は下關へ来るに、

折柄の大雪を冒して、山縣を説付け、遂に奇兵隊四百餘名を率ゐ、水陸の二手に別れて、萩の城下へ攻込んだのである。海からは高杉が行き、陸は山縣が行き、さうして水陸の兩道から並び進んで、非常な苦心を以て、城將粟谷隼人の首を揚げ、敗兵を悉り纏めて、之に説諭を加へ、萩の城下は悉く正義派の勢力に歸した。毛利侯は寺院に引籠つて居たが、高杉等の迎ひを受けて、再び城に入り、是から高杉の内閣が出来て、正義派は萩の藩政を動かすことになつた。サアさうなつて見るに、國境の兵備を整へ、飽までも幕府に對抗するさいふ勢を示した。此報知を得た幕府は、事茲に至つては打棄て置くことが出来ぬから、更に毛利家へ使者を送つて嚴重な談判をしたけれど、毛利家ではけんもほろろの挨拶をして、總べて幕命を拒んでしまつた。幕府も段々評議を盡した末に、毛利征伐さいふことに決して、それから關西三十一藩の諸侯に出兵を促し、將軍家茂が自から采配を振つて、長州征伐をすることに決したので。高杉が博多へ逃げたのは、井上が斬られてからであつて、更に博多から立歸つて来て、再び正義派の勢力を造つて、萩の藩政を左右するやうになつた時は、井上は牢へ這入つて居たのだ。そこで高杉は、井上を牢の中から助け出して、藩の重要な位地に据ゑることにした。別府へ出養生を兼ねて、一時身を潜めたのは、これから後のことであつて、二度目の長州征伐が、愈々決した時に、高杉は井上を別府から呼戻すことになつたのである。此長州征伐の結果は何うな

つたかさいふに、幕府が速戦速敗の有様で、長州藩の勢力は實に偉いものであつた。加之、將軍の家茂が俄に病が重くなつて死んだ。戦争には敗ける。將軍には死なれる。長州藩の勢力は強い。斯ういふ譯で、何うにも身動きの出来ないことになつたから、家茂の次の將軍として、一橋慶喜公を推して朝廷の御許可を受け、それから慶喜は、長州征伐中止の、ことを決して、勝安房を懇々談判の使者として、藝州の官島まで送り、茲に井上等と談判の末、無條件で戦争は相退きいふことに決めて、勝は引取る、毛利藩も戦争に勝つた上に幕府からは何等の制裁も加へられないといふので、長州藩士の鼻息は實に素晴らしいものであつた。

其前後に方て、例の薩長聯合の策を、土州の阪本龍馬が立て、美事に是も成立し、維新の大舞臺は、薩長二藩の手に依つて幕を開けることになつた。井上は其前後に於ても、非常な奔走をして、毛利藩の爲に盡した、同時に朝廷の御用にも立つて、明治政府が初て出来た時に、參與の職に昇り、それから大藏省へ這入つて、一旦は辭職して、又政府に這入り、それから引續いて侯爵の位階を得るまでになつた。五十年の歴史は、實に瀾瀾として、生氣が漲るやうであつたことは、多く人の知る所である。

## (十)

明治三十二年に伊藤博文が、別府の温泉に行つて、暫く滞在して居た。其時に土地の古老から、井上が慶應の昔に暫く来て居た、といふ物語を聞いて、伊藤は井上との關係上、頗る興味を有つて、更に踏込んで調べさせて見る、其當時の關係者は、まだ幾分か生存して居る、といふことでも確め得たので、東京へ歸つて來てから、井上に其話をして聴かせた、井上は薩長の乾分になつて、暫く別府に居た當時のこゝを追懐すれば、何とも言へぬ感に打たれて、其時分の關係者を一度は訪ねて、昔の恩義に報いたい、といふ考もあつたのだ。所へ伊藤からの話があつて見る、益々其氣になつて、是非一度はこゝを考へ起したこゝもあるが、何時も公私の用事が重つて意の如くならず、思ひ乍らもツイ歳月を過ぎて、明治四十四年の五月になつた其前年に大病をして、既に一度は誤つて訃報を傳へられた位で、今度はかりは逆も助かるまいと誰も彼も思つて居たが、命運の強い井上は醫藥の手當が届いて、死神の手から離れて、當分は心配なしといふことになつた。併し、追々に老る齡であつて、自分も幾分か心弱くなつて來た故もあるだらうが、兎に角、別府行は斯様な場合にも、幾度か思出されて、愈々決行することになつたのである。

井上が三井家の後見役をして居たことは、殆ど公然の秘密で、誰一人として知らぬ者はない。従つて九州行の用向の一つとして數へられて居たのは、大牟田の三井俱樂部に泊つて、三池炭

坑の視察をするこゝであつた。尤も井上の爲には最も密接の關係がある、直方の貝島太助、是は前にも一寸言ふた通り、井上の爲にあれだけの大きな炭山王になつたのであるから、貝島の方でも井上の九州下りに付ては、必ず其の本邸へ迎へて幾日かを送らせるこゝになつて居たのだ。恰度、大阪の鴻池に、忌はしい夫人の家出事件があつて、其解決を付ける爲に、井上が鴻池へ立寄つた。それから山口へ廻り、例の高杉晋作の建碑式へ臨んで、更に九州へ下るこゝに豫定になつて居たのだ。大牟田の三井俱樂部では、井上が来るこゝに、非常な準備をして待構へて居る。井上は貝島の邸へ行つて、數日を過ぎた後、それから三井俱樂部へやつて来た。炭坑主の重立つた者は、大概集つて来て、三井の店員と立交つての酒宴は、實に豪奢の限を盡した。其時に井上は、不圖した酒の機嫌から、懷舊談を始めた。其左右には貝島を首め、麻生太吉、伊藤傳右衛門、中野徳治郎、安川敬一郎等の炭坑王が控へて居る。又例の自慢話かこ、中には迷惑相な顔をして居た者もあつたが、此晩の話は全く今までは違つて頗る興味のある慶應の昔に別府で放浪生活をして居た時の物語であるから、是は頗る一同も感興を引いて、膝を立直して聴くこゝなやうな譯で、井上も勢み込んで話して居る中に、例の灘龜の乾分になつて、博奕をして負けたこゝや、土方人足で非常に苦勞をした、詳しい物語があつた末、井上は貝島を顧みて、

「實は俺も、もう此老壽ではあるし、昨年のやうな大病を患ふては、此後の壽命も大概知れて居ると思ふから、今の中に別府へ行つて、昔の恩人に面會をして、當時の恩を謝して置きたいと思ふ、就いては誰か然るべき者を遣はして、其様子を探らして貰ひたいが、何うであらうか」

「言ふのを聞いて、貝島は、『宜しうございます、直に店の者を遣はして、よく探らせました後、申上けるこゝに致しますせう』

「ムウ、何うか左様して呉れ」  
そこで貝島は、店員の高山徳太郎といふ者を呼び、委細を申含めて、別府へ急行させるこゝになつた。其報告のあるまでは三井俱樂部に滞在して、待合せて居るこゝ、其翌日に高山が歸つて来て、委細の報告があつた。其大要は、

「灘龜は、明治三十五年の八月三日に、六十七歳で最期を遂げたが、其末路は實に氣の毒な程に落魄を極めて、昔の友達であつた漁師の家で、碌に醫藥の手當もせず死んでしまつた、又若松屋彦七は、是も明治十二年八月十八日に六十六歳で死んで、其妻はそれより前に死んだ、仲の龜四郎が相続したけれども、是も既に故人になつて、今では若彦の孫に當る者が相

續して、若龜にいへば別府でも、人に知られた宿屋になつて居る、毎日のやうに井上の前へ、天保錢を持つて来た初いふ少女は、六十に近い齡になつて、まだ生きて居る、其俸は現に古河所有の餘田の炭坑に勤めて居る。

こいふことが分つて見るに、井上が訪ねやうと思ふた、恩人は悉く死んでしまつて、僅に初が一人残つて居るだけである。そこで愈々別府へ向つて、故人の墓参をすることになつた。貝島や麻生も頻に同行したいといふ望がある。それは井上も快く承知して、別府滞在中は、麻生の別荘に泊ることに定めて、五月二十九日に大牟田を立つて、別府へ向ふことになつた。

縣知事の千葉貞幹は、此報を得て自から別府まで出て来て、川口内務部長と黒崎警部長に萬事を托して、尙十分の調査を遂げて、井上の来るのを待受けて居た。所へ、井上が乗込んで来たので、サア別府の町の騒動は一通りでない。左なきだに新聞地同様の温泉場まで、他府縣の身分ある人が来れば、町役場の役人までが出掛けて、歓迎をすることになつて居る場合であるから、井上侯爵が昔の恩人の墓参に来るこいふやうなことは、一代の美事としても喜んで迎へなければならぬ、こいつたやうな譯で、殆ど全町を擧げて、國旗を軒頭に掲げて、井上の歓迎をするこゝになつた。井上は麻生の別荘へ這入つて、是から今の當主若松屋龜四郎首め、例のお初、其御のお衆等を先きに、灘總の最期まで世話をしたこいふ、漁師の妻なども皆打揃ふて、

井上の前に出て、是から懷舊談が段々出た末に、井上は若松屋へ出掛けて行つて、昔泊つて居た座敷へ這入つて、大いに懷舊談をやつて、人を泣かせましたし喜ばせました。それから紀念の寫眞を撮り、又揮毫した額は若松屋の樓上に掲げられてあるが、『千辛萬苦の場』と認めてある。何處までも干渉好の井上は、若龜にいふ屋敷が甚だ宜しくないから、矢張り若彦と改め、自分も彦と改名しろ、こいふやうなこゝまで、世話を焼いて、それから墓参りをするやうに、土地の有力家を招いて、不老泉の樓上に盛な宴會を開き、若彦のこゝを頼むやら、僅か二日の間の騒動ではあつたけれど、別府開けてからの賑ひであつた、未だに人が傳へて居る。三十一日には愈々東京へ歸へるべく下關へ向つたが、此時にお初を下關まで連れて来て、更に餘田の炭坑に行つてゐる俸の義之を呼付けて、母子相別れて住居して居るのは、人倫の大本に悖るのであるから、是非同棲して居るやうにしなければならぬ、肉親も及ばぬ意見を加へて、更に貝島に頼み込んで其店員にすることに、此義之は洵に幸運な男で、是が爲に今では、貝島家から多くの學資金を得て、亞米利加へ炭山や鑛山のこゝに付いて、學術や實地のこゝを研究する爲に留學して居るのである。

詳しく述べれば、まだなかく、長くもなるが、兎に角井上の別府行は、斯ういふ事情であつた。過ぎし五十年前の舊恩を思ふて、其故人の迹を弔ふたり、子孫の爲に色々世話を焼いて

歸へる。其處に井上の井上たる特色が現はれて居て、頗る妙味があると思ふ。其當時、或新聞紙の如きはそれ程有難いと思つたならば、何故もつて早く報恩に行かなかつたといふ様な、三百理窟を捏ねたけれど、早く訪ねたから報恩になる、遅く訪ねたから報恩にならぬといふ、左様な區別があるべき筈はない、縱令死際であつても、それを忘れずに居て、斯ういふことをなせば、先づ人間の美事善行として賞讃するのが當然である。

江藤新平

(一)

江藤が生れたのは、佐賀の城下であるから、例の猫騒動で誰でも知つて居る、鍋島藩士である。藩士といふやうなもの、極身の低い武士で、足輕に少し毛の生えた位のもので、其貧しい生活の状態はお話にもならない位であつた。然ういふ貧苦の中に人々成つて、非常に刻苦勉勵の結果、徒らに武術にのみ力を入れて、更に學問を重んじなかつた、舊幕時代の輕輩としては、驚ろくべき程の學問があつた。明治政府になつてから、鍋島藩から出た人で、參議になつた者が三人ある。即ち第一が江藤で、第二が大木民平、是は後の喬任の事である。第三が大隈八太郎、今の重信が即ち其人だ。斯う三人揃つて大臣になつたが、其内に於て最も身分の

輕かつたのが江藤である。乍併、其經世の大才、天下の事に就ての見識が、頗る高かつた爲に、一番下積になつて居た江藤が、到頭一番上の位置に坐ることになつたのである。帝都を江戸に遷して、東京を改稱したのは、明治二年の事であるが、其遷都の原因は、江藤の建白に基いたのである。夫が何ういふ間違ひか知らぬが、大久保利通のやうに一般に傳へられて了つて、江藤の事は、口にする人もない位の有様で、現に莫都三十年祭を行つた時分にも、大久保に對しては、東京市民も敬意を拂つたが、江藤の事は誰一人として、何といふものもなかつたのである。遷都の計畫は、大久保の胸中から割り出されたのだ、といふ事に定つて了つたのだ、尤も僕は其時分から、江藤の建白に基いて、帝都が遷されたのである、といふことを深く信じて居たから、其の當時、横濱で演說會を開いて、盛んに江藤の功績を賞し、東京市民が今に於て、江藤の功績を認めず、却つて大久保を、遷都論の主唱者なるが如く囁立るのは、甚だ間違つて居る、といふ事を、公衆に向つて訴へた事がある。此演說は非常に喝采を博したので、是なれば東京へ問題として擔ぎ出しても、確にものになるといふ心算で、東京中の人がお祭り騒ぎで夢中になつて居る處へ乗り込んで、演說會を開いて同じ様な議論をする、所謂江戸ッ子の變形たる東京市民は、何ぞ考へたか非常に立腹して盛んに僕の演說を妨げた。併し僕は強情にやり通して了つたけれど、誰一人是に耳を藉す者はなかつた、僕と同じ様な調査を

違けて、又同じ様な考へを有つて居た人は澤山にあつたらうが、いづれも大勢に壓されて、其議論を唱へる者はなかつた。畢竟、東京市民が奠都三十年祭に大久保を祭つたのは、大久保の身にして見るに、却つて有難迷惑の感があつたらうと思ふ。

多くの事は言はずとも、此一事だけで江藤は、確かに一見識あつた人物だ、さういふ事は出来る。維新の變亂が治つて、まだ其の餘熱が熄まらない時分に、斯ういふ思ひ切つた意見を、朝廷へ申立てるさういふやうな事は、普通の者には一寸出来ぬ體當だ。又彰義隊が上野に籠つて、非常な勢ひで江戸市中を押廻して居た。夫を何ういふものか、大西郷が更に取締りを仕ないさいふ爲に、江藤が惣々江戸から京都へ引返して、是を太政官の問題にしたので、遂に大村益次郎を江戸へ下して、遠慮會釋なく、彰義隊征伐をやつて了つた。大西郷が彰義隊を嚴重に押へ付なかつたさういふにも、一分の理窟はあるが、兎に角、錦の御旗が江戸城に樹てられ、征討總督の有栖川宮殿下が、入城せられたにも不拘、其目と鼻の先に、彰義隊が跋扈跳梁を極めて居る以上、朝威のある所を示さなければならぬのである。夫を大西郷が更に爲なかつたさういふので、江藤が大村を、江戸へ下させる運びをつけたのだ。其事の善悪は姑く措いて、那の當時に、夫だけの事を計つて、問題に爲し得たさういふだけでも、江藤の手腕は認める事が出来るだらう。また其他に意々東京が帝都さういふことに定まるに、戦後の日本國を、如何に處理したら良い

か、さういふやうな意見を、長々書いて政府へ建白して居る。又戦亂の後を受けた、關東や奥羽諸州の民心を治めるには、何ういふ風に策を建てたが可いか、さういふ事を、細かな點から論じて、今の語でいふに、社會政策上の事にまで言及してある。江藤は一代の經世家であつたに違ひない。

然るに征韓論の軋轢から、佐賀へ歸つて旗揚げをしたので、遂に夫が破れてから捕はれて、梟首に行はれて了つたのだ。其の旗揚げは江藤の心から出たものでなく、不平士族に擁せられて、據るなく犠牲になつたものではあるが、要するに謀叛人たる事は免れぬのであるから、梟首の處分を受けたのは當然であるかも知れないが、併し、大西郷の末路が彼の通りであるのに、而も其の子孫は侯爵の肩書を得て、世に時めいて居る。之れに比べるに江藤の一族が、陋巷に窮死せんとするの有様で、見るも無慘な生活をして居るのは、實に同情に堪へぬ。夫が先般崩御せられた、皇太后陛下の御耳に入つて、惣々江藤の未亡人に對して、莫大なお手當金が下つた。江藤の遺族をして、今日の如き窮境に陥らしめて、之を顧みなかつたのは其だ其意を得ない。是は江藤が、長州派の政治家と仲が悪くて、例の足尾銅山事件に就いて、井上侯爵を牢に打込んで了はうしたり、其他様々の問題に就いて、薩長藩閥の政治家に對抗した、其の憎しみが死後にまで及んで、斯ういふことになつて居るのであらう。然うして見るに、江藤の遺族は、

實に氣の毒なものであると同時に、大西郷が銅像になつて、上野公園に立つて居るにも拘はらず、江藤獨り特赦の恩典に浴しただけで、近頃になつて復位の御沙汰が下つたのみだといふに至つては、如何にも残念な次第である。

大西郷と江藤を比ぶれば、其人物の上にて、多少の區別こそあるが、一代の經世家にして天下國家の事に盡した點に於ては敢て他人に一步も譲らない位の功績はあつたのである。維新の際に於ける功績を追想して、江藤の一家にも相當のことがあつて、然るべきだと思ふ。現に皇太后陛下より御下賜金のあつた、さういふ點から考へて見ても、此理窟は確かに言へるのである。

斯ういふ風に、江藤は種々な偉い仕事を遺して、只だ其末路は如何にも悲愴であつたが、人物としては立派な政治家である。只惜むらくは稍々理窟が多く、偏狭な處があつて、多く人々を容れなかつた爲めに、餘り世間からもヤイ／＼言はれなかつたが、其爲人功績の上から言へば明治の功臣として第三位に下るべき人ではなかつた。

## (二)

其末路の事は兎に角、明治政府が出来てから一足飛びに、參議兼司法卿になつた當時の江藤

は、實に素晴らしい勢であつた。今日のやうに法律思想が普及されて、何れの學校でも、時の法律を咀嚼し得るだけの知識は與へて呉れる時代とは異つて、其頃は長く續いた、武家天下の末であつたから人民などは法律を知る必要もなく、従つて政府は明かに法律事項を作つて、一々夫に當籤めて、人民を取締つて行くには及ばない。牢へ入るべき者は入れて了ふし、斬るべき者は斬つて終へば、夫で澤山であるといふやうな考へから、人民を見ること全然埃のやうで、今の人權問題などは逆も物にならず、斬捨御免といふやうな事が行なはれて、斬る人も斬られる方も何とも思はない。人間の命が一山百文で、賣買の出来るやうな時代に立つて、如何に政府が改つて、政治や法律が新になる場合はいへ、司法卿になつた江藤が、直ちに新しい法律を布いて、人民を取締りをして行かうとした、其のやりくちには敬服せざるを得ないので。況して前にもいふ通り、法律思想が一般に普及せられなかつた而已ならず、現に高位高官の人といへども、法律の頭腦などは少しもなかつた時代に、江藤が如何に偉くも、矢張り其類は免れなかつたらう。然るに、新律綱領と改定律令を作り、直ちに之を實施して、人民を取締つたさいふ處に、江藤の偉い處はあつたのだ。今日から其法律を見たならば、非難すべき處も多に違ひないが、其時代としては、それだけの法律を制定するだけでも容易なことは無い、また何程の大才があつても、當時の政府に居る以上、薩長藩閥のおかけを被らなければ

ば、逆も其位置を保つ事は出来ないのである。然るに江藤は、却つて薩長藩閥の政治家を迫出して、天下は天下の天下也といふ原則に従つて、藩閥以外に人を求めて、大に王政維新の實を揚げやうとした。夫であるからイザいふ時には、十分の身方がなければならぬ。反對の政治家を倒して、自分が政權を握る時分に、十分に身方を造つて置かなければ、何の役も爲さぬのであるから、江藤は頻りに其點に就て苦心をしたものだ。尤も斯ういふ事は昔に江藤ばかりでなく、今の大隈なども、後になつてから非常に考へたもので、盛んに學校から出たばかりの若い人物を集めて、自分の足下を嚴重に築固めたのである。されば明治十四年の政變に依つて、大隈が内閣を飛び出した時に、跡から尾いて来た者が、何様連中であるかと言へば、中野武營、中上川彦次郎、尾崎行雄、犬養毅、矢野文雄、田中耕造、牟田口元學、小野梓、島田三郎、小松原英太郎等の人物であつた。夫より少し年を老つて、維新の事變にも際會したのでは、北島治房、河野敏謙、前島密等の人々であつた。大隈が政府を退いた爲めに、是だけの連中が、金の糞のやうに、ぞろぞろ尾いて来たといふ點から考へても、當時の大隈は、確かに進歩した政治家であつたに違ひない。殊に尾崎や犬養などは、慶應義塾を出たばかりで、漸く廿歳を越えて二歳三歳位の、まだ嘴の青い身の上であつたにも拘はらず、さういふ連中をミシク引上げて、少書記官であるさか、或は大書記官であるさかといふ様な位置を與へたといふ所に、

大隈の優れた點はあつたのだ。但し今日の大隈は、其處進んだ考へを有つて居るか居ないか、僕にも保證は出来ない。

江藤が焦れば焦るほき、疍癩が起きて来るのは、此事は確かに天下の爲になるさ考へて、案を出すさ、直ぐに薩長の政治家が、寄つて集つて押潰して了ふ。如何に江藤が辯論を闘はして自分の案を通さうにしても、多勢の力で押倒して了ふのだから、只だ一人の力では何うする事も出来ない。其所で深く考へた結果、自分の身方を、政府部内に多く造つて置なければならぬ既に官員になつて居る者を引入れやうにしても、夫は出来ない相談であるから、其所で民間に漂流して居る浪人や書生の中から、然るべき人物を見出して、追々さ役人に引上げた。イザいふ時に、夫等の人物を率ゐて、大いに争ふ考へであつた。

### (三)

淺草の三筋町に江藤の妾宅があつた。夫は踊りの師匠をして居た美人であるが、英雄は色を好むといふ昔からの諺の通り江藤も其方に掛けて却々達者な人であつたから、夫位の高きでは満足が出来ずに、牛込の神樂坂にも、若い美しくいのを圍つて置いたので、官廳が休になる前の晩から出掛けて、休の日一日だけは、美人を相手に命の洗濯をして居たのである。今日



も毎時の通りやつて来て、其美人を對手に酒を飲んで居るに、庭を隔て、隣りの家の板塀がある。其の向ふに汚ない下宿屋があつて、折角の座敷が、其二階から見下しになるので、塀の上へ高く目隠しをしたけれど、夫でも伸上つて見られれば、座敷の中が全然見えるのだ。美人が頻りに夫を氣にして、何所かへ引移つて貰ひたいに、頻りに江藤に請願みだけれど、其座敷には一向頓着のない江藤は、更に移る氣色もなく、相變らず隣りの二階から見える座敷で飲んで居た。

所が、その下宿屋の二階に、一人の薄汚ない書生が居て、頻りに江藤に美人が、飲んで居る様子を見て居たが、暫くするに欄干を越えて屋根へ出た。夫を江藤が、盃を手に爲ながら見て居るに、其書生はコロリと屋根の上へ横になつて、肘枕でグウ／＼寝込んで了つた。熱々見て居た江藤は、美人に向つて

「オイ」

「ハイ」

「那れを見い」

「見て居ります、本當に變な書生でムいますね」

「俺が来た時には、必し那の書生は屋根へ登る、今も此座敷を凝乎／＼覗き込んで居たが、ア、

して屋根の上へ寝て了つたが、宛然猫のやうな奴ぢやの、ハッハ、ハ、ハ、」  
 「本當にさうでございますよ、且那樣がお出でになりませんが、ア、いふやうに屋根の上へ寝てるんでございます」

「然うか、さうするに俺に擲擲顔にするのでもなく、平常から屋根に寝て居るのか」

「左様なんでござりますよ」

「ソリヤ益々面白い奴ぢや」

「言つて、暫時考へて居たが、

「オイ、那の書生を一寸呼んで來い」

美人は目を圓くして手を振りながら、

「呼んで來いつて、此のお座敷へでございますか」

「左様ぢや、此の座敷で無うて、何處の座敷へ呼んで來るつもりか」

「夫はお止し遊ばせ」

「何故か」

「何故かつて、那樣薄汚ない書生なんぞを呼んだつて仕様がなぢやござりませんか、夫に且那樣がお居でにならない時分には、那の二階から此方を覗き込んで、種々な悪口を言つたり、

時々蜜柑の皮なごを投り込むですもの、何んなに氣味が悪いか分りやしません、夫が懇意になつて、チヨイ／＼やつてでも來られた日には、お留守をして居る妾が堪りませんから、何か那樣者は近づけないやうに仕て下さいまし」  
馬鹿なことを言ふな、假令俺が來て居らん時でも、狂人ぢやあるまいし、其様無茶な事をする筈も無からう、縱令有つたにしても、貴様が對手にさへならなければ宜しい、兎に角、俺が會つて見やうと思ふのぢやから、呼んで來い」

「夫だつて御前……」

「馬鹿ッ、貴様は俺の言ふ事を肯かんのか」

「一喝されて美人は、」

「いえ、さういふ譯ではないのですけれど」

「夫なれば呼んで來い」

「ハイ、夫ぢや呼んで参りませう」

遊々ながら立上つた美人は、今臺所に働いて居る下女を呼んで、

「きよや、お隣りの下宿屋さんへ行つて、毎でも屋根へ出て、寝てお在になる書生さんに、御前様が何か御用がお有んなさるさういふから、直にお出下さいと言つて、連れて來てお呉れ」

「ハイ承知致しました」

下女は直に表へ駈出した。暫時するに屋根の上に寝て居た書生は、ムク／＼と起上つて、直ぐに二階へ這ひ込んで行つた。恐らく下女が迎へに行つたので、此方へ來る爲であらう。

(四)

朝晩は大分冷たい風が吹いて、氣の早い者は重衣をする時分に、久留米絰の單衣一枚で、巽も編目もメチャ／＼になつた、例へていへば、圓行燈を押潰したやうな小倉の袴を穿いて、頭は宛然百舌の巢かなんぞのやう、煙突を掃除する刷毛のやうに汚ないのを手入もせず、見たばかりでも餘り快い氣持のしない書生が、何の遠慮もなくつか／＼と座敷へ通つた、江藤は手にした盃を膳の上に置きながら、じろり見る、途端に書生は、ヒョコツと頭を下けて、

「ヤ、何か御用ださうですからやつて來ました、ハッハ、ハ、」

何が可笑いか、大きな口を開いて笑つた。側に見て居る美人は、忌な顔をして脇を向いて了ふ

江藤は流石に苦勞の果の人にて、さまで氣にもせぬものか、ニコ／＼笑ひながら、

「君にはまだ初対面ぢやが、我輩は江藤さういふものぢや」

「ハ、豫て承つて居ります、參議兼司法卿として天下に高名な貴所が、數次此美人の所へ歩

を運ばれる事は、那の二階から始終見て居りました。初対面の人に挨拶をするにしては、如何にも無作法千萬な、本人の江藤も驚いたらうが、是を聞いて居た美人は、眞赤な顔をして次の間へ狐鼠々々出て行つた。書生はニヤリニ笑つて、其後姿を見送つたまゝ、

『時に何か御用ですか』

『イヤ、別に用事でもないが少し話して見たいと思つて来て貰つたのぢや』

と言ひながら、書生の方へズツと盆を出しながら、

『ヤア一杯何うちや』

書生は周章て手を振りながら、

『イヤ、酒は少しも飲まないのです』

『併し一杯位は飲くだらう』

『夫が駄目なんです、高い金を出したものを、薬を飲むやうな思ひをして飲むにも及ばないのですから、御免を蒙りませう、併し甘い物なら却々人後に落ちんです。ハ、ハ、ハ、』

『フ、ン、さうするに甘黨かね』

『さうです、しるこや牡丹餅なら大分食けるです』

『さうか、夫ぢや甘い方にしよう』  
盆を下に置いてボン／＼と手を鳴した。次の間へ逃けて行つた美人は、其所へ出て来て、

『何ぞ御用でございますか』

『ウン、お客さんは酒の方がいかなのぢや、牡丹餅を澤山買つて来い』

『ハイ』

美人は元の座敷へ姿を隠した。

『君の姓名は何いふのか』

『僕は福島範治といふ者です』

『而て、生國は何處か』

『信州松本です』

『ハハア、信州の松本かね』

『ハイ』

『松本は良い處ぢや、我輩も會つて那の邊へ行つた事がある、見受ける處苦學でもしてるのかね』  
『さうです、自分の口から苦學といふては可笑しいですが、併し學費が積かないのですから、食事も疎にせず、苦しみながら讀書して居るのですから、まあ苦學ですな』

處へ美人は、菓子鉢に牡丹餅を盛あけて持つて来た。

『サア君さうぢや、一つ食ふたら……』

『夫ぢや早速頂戴します』

甘いものが好きの爲めに酒を断つたので、牡丹餅を見るに、嬉しうな顔をして、三ッ餘り、

口ぐさ食けた。

『成程、甘い方は却々達者にやれるね』

『此牡丹餅は二軒ある菓子屋の先の方の家で拵へたのですな』

是を聞いた江藤は、

『食ふたばかりで賣つて居る家が、何處だといふ事を當てるのでは、餘程其道に掛けては苦勞

をしたものぢやね』

『苦勞といふ程でもないですが、まあ此位な事は分つて居るです』

『夫程好きなら遠慮は要らぬ、どんぐり食うたらさうぢや』

『遠慮なく頂戴します』

復たムシヤク食ひ始めた。

(五)

遠慮もせずに牡丹餅を食つて居る、書生の顔を凝乎と睨めて居た江藤は、

『君には初めて會つて、まだ交際もしないのぢやが、一寸訊ねて見たい事がある』

『ハア、何ういふ事ですか』

『夫は外でもないが、君は何日見ても、屋根の上に寢て居るが、全體何ういふ譯で屋根の上に

寢るのか、第一に危険ではないか、若し轉り落ちたら命にも關はると思ふが、君は平氣で寢返

を打つたりして居るが、實に熱く練習したものぢやね』

流石に書生は眞赤な顔をして周章で牡丹餅を頬張つた。

『まあ、左様急がず緩くり食うたら何うぢや、残つたのは下宿へ持つて歸つても差支へない

のぢや、今訊いて居る屋根の上に寢るのは、何ういふ理由だといふ事を聞かして呉れ』

『ヤツ、こりや驚きましたな、其様滿らん事はお聞きにならんでも可いでせう』

『左様でない、餘りの不思議に訊いて見たいと思ふのぢや』

『困つて了うですな』

『少しも遠慮は要らぬ、まあ話して見たら何うぢや』

『左様ですな』

書生は暫く考へて居たが、

「宜しい、夫では申しませう、實は東京へ来てから、早稲田の北門舎へ入つて居るのですが、學費が續かない爲めに退學して、今では彼の下宿屋の二階に籠城して、獨學でやつて居るので、頃日和蘭陀の辭典の極良いのが入りかけて、何うかして是を買つて置きたいと苦心は仕たのですが、何分にも苦學生の事で、金の都合がつかない、併此辭典が一冊あれが、教師は無くとも本は讀めるのですから、種々に苦心仕たのですが、是を買ふだけの金が出来ないので、據らなく替の着物も、不用になつた書物も、其他手當り次第に賣り飛ばして了つたのですが、夫でもまだ金が纏らないので、到頭寢道具まで、賣つて了つて、漸く辭典は手に入つたのですが、此頃の時侯で、夜になるに寒くて逆も寝られないのです、其所で、だんく工夫を仕た末、夜は讀書して居るに幾分か寒さを感じないから、眠らない事に定めて了つたのです、所で夜が明けて太陽が出るに、直ぐに屋根へ出て寝る、巧い工合に太陽が、背中の方からボカ／＼温めて呉れる、背中が温まつて時分に、ゴロリと寢返りを打つ、此度は腹の方から温めて呉れる、誠に都合が好い寢道具がはりの太陽ですが、夫でも雨の降る日なきは、屋根に寝る事も出来ず、其時は晝夜起きて居るにいふやうな譯で、格別珍らしい仔細がある譯でもないのです、屋根の上で寝る原因は斯ういふ理由なのですよ」

「併し、如何に然ういふ事情から馴れて居るにはいひながら、寢返りを打つても落ちないといふのは、實に偉い喃」

「それは帯に細引を結へて、廊下の欄干へ確かり結んであるのです」

「ウム、左様か、成程夫では落んやうになつて居るのぢや、ハツハ、ハ、ハ、」

「飯より好きな牡丹餅を御馳走になつたばかりに、此様満らない事まで訊かれるやうな事になつたのですな」

「まあ、さう恥入らんでも可い、然ういふ事は誰にも一度はあつたとぢや、吾輩も鍋島藩士でこそあれ、家が貧しくて藩の學校に入る事も可能ず、君と同じ様な苦學をした者ぢや、今の物語を聞いて他事は思はぬよ、就ては君に學資金を貢がうと思ふがさうぢや、受けて呉れるか」

「えッ、何と仰しやるのです」

「學資金を貢がうといふのぢや、如何に若い時分でも、身體の威勢に任して無理な事をするに折角學業が成つて、是から大いに天下の爲めに盡さうといふ時に身體が悪くなつて、何事も成さずして一生を終る不幸な人も世にはある、君が夫まで苦心して勉學するにいふのだから、吾輩が學費を貢がうといふのぢや」

「全體何ういふ理由で、左様いふ親切な事を爲さうといふのですか」

「別に理由といふてもないが、君の苦學するのと同情して、學費を貢いで進ぜやうといふだけ」

の事ぢや』

『ハ、ア』

何ぞ思ふたか書生は腕を拱んで考へた儘更に答へをせぬ。江藤は聊か焦かしく思つて、

『何うちや、受けるか受けないか』

『さうですな、こりやア折角の思召しですが、其お志だけを受けて置いて、學資の方は、お断りを致します』

『そりや何ういふ理由か』

『自分の快くない贈り物は受けたくないのです』

『何ぞ、自分の快くない贈り物は受けたくないといふのか』

『左様です』

『快くない贈り物は、何ういふ理由か』

『サア、然ういふ風に聞き直つて言はれるぞ、何とも申譯がないのですが、實は然ういふお助けを受けるほど、貴下と僕との間に縁故がないのです、謂ば路上に行違ふた人位人の薄い關係で、學資を出して呉れるといふのは誠に有難い事ですが、僕は全體官吏にならうといふ志願なので、若し官吏になつた後に、苦學して居た時分に世話になつた、所謂恩人から壓制

られて、自分の心にもない行動を執らなければならぬといふやうな事は如何にも心外でありますから、夫で辭退するのです』

キツパリ言ひ切つて、書生は膝に手を置いた儘、江藤の顔を瞞めて居る。此一言を聞いた江藤

は心から感心した。今まで自分が、様々の方法を以て、將來に見込のある人物を引上げたこと

はあるが、是程までに苦しんで、學問をし居る書生が、學資を貢いでやるといふのに、斯うい

ふ立派な答へを仕て断はるこいふ、其の見識の高いのには流石の江藤も感心したので、

『君の志が官吏になるこいふのであつて、若し官吏になつてから後吾輩に頭を抑へられるの

が嫌だこいふのなら、強ひて吾輩のいふ所に従ふには及ばんぢやないか』

『併し、お世話になつて見れば、豈夫左様もならんすからな』

『イヤ、吾輩は然ういふ押付けは大嫌ひである、若し、他日志を得て、君が官吏になつた時

分に、吾輩と所論を異にしたならば、随意の行動を執つたら可からう、強ひて吾輩の言ふ所

に従ふには及ばぬ、夫だけの約束で、學資を貢がうこいふのならば受けて呉れるか、何うちや』

『夫程にしてまでも學資を出したいこいふのですか』

『左様言はれるぞ、吾輩が如何にも好事のやうであるが、君の答へが餘りに立派であるから、

然ういふ人を苦しめて置くのは、如何にも残念ぢやと思ふて、今のやうな約束を仕て、學資

を出さうといふのぢや」

「ヤ、有難う、夫までの思召しならば、敢て辭退せずにお助けを受けませう」

「何ぞ、夫ぢや學資の貢ぎを受けて呉れるといふのか」

「ハイ、有難く頂戴 仕ります」

「併し、只今仰せになつた事は、堅くお約束して置きます」

「そりや吾輩も男子だから間違はない」

「僕の心の許す限りは貴下に對しては、決して背きませんけれども、意見が異へば貴下の仰せでも従ひませんから、改めてお断りして置きます」

「よし、能く話は解つた、夫ぢや學資は出してやらう」

「御厚意は謹んで感謝します、就ては三月ばかり下宿料が滞つて、今立退きを命ぜられて居るのですから、差當り其方から片付けて頂きたいもんですが如何でせうか」

是には江藤も驚いた。小氣味の好いほき立派に断つた者が、話が決して受ける事になるに、滞つて居る下宿料を直ぐ拂つて呉れるなきは、普通の書生には却々言へる事ではないに、江藤はすつかり氣に入つて了つた。

斯ういふ次第で、福島は遂に江藤の世話になる事になつて、夫から志を得て官吏になつた。此

福島が、今の陸軍大將福島安正の前身で、江藤は福島に就ては斯ういふ面白い逸話があつた。徒に氣位ばかり高くて、其實は金の前には鳧の様にグニャ／＼になつたり、権門に出入する事を無上の榮譽と心得て居る今の學生殊に校主が總理大臣になつたからといふて、急に其學校へ入學する様な、卑い料簡を有て居る現代の青年は、大いに此逸話を以て、自分の模範にするが可い。誰にしても福島安正は、我陸軍中の最も有名なる軍將の一人として知つて居るだらうが、司法省に滿らない官吏を仕て居た事は、大概の者は知るまい、若し福島の官歴を調べて見る人があれば、司法省に十何等出仕といふ、滿らない役を仕て居たといふ事が分る。夫は前に話した通りの關係から、江藤に知られて一度司法省の官人になつたが、其後陸軍に轉じて、自分の希望が軍人になりたかつたのであるから、到頭立身して今日の身分になつたのである。

(六)

明治六年に起つた、征韓論が非常な問題になつて、遂に岩倉、大久保、木戸の一派と、西郷の一派が何うしても折合がつかずに、三條太政大臣は夫が爲に重い病氣に罹つたので、其代理として岩倉が、太政官に首席を占める事になつた。乃で征韓論が日一日と難かしい事になつて來た結果、岩倉等の壓迫が功を奏して、西郷等の意見は行はれない事になつた。於是、西郷

初め板垣、後藤、副島、江藤の五人は、共に職を辭す事になつたのである。當時の征韓論の人氣は、實に素晴らしいものであつた。少しでも天下國家の事を、念頭に置いて居る者は、皆征韓論に同意して居たのであるから、佐賀の士族なごも、愈々征韓論が負けたといふ事を聞き傳へるに、非常に憤激して、

「政府が左様いふ事情から朝鮮征伐をやらなければ我々の獨力を以てやつて見せる、我々が自から率先して義勇兵を募り、自費を以て朝鮮に渡つた上に、朝鮮國を征伐して、日本政府へ黙納したら差支へなからう」

といったやうな理窟から、朝鮮征伐の事務所を設らへた。乃で政府も、捨て置き置く事が出来なから、其鎮撫を試みるに、益々士族は反抗して、一大騒動が起るやうな状態になつて來た。於是、江藤は是を他所に見る事が出来ぬので、自から國許へ歸つて、其騒動を鎮撫しようとした。其時に板垣は、

「君が今佐賀へ歸つて、士族の不平を抑へやうとするのは不得策であるから、此際は東京に留つて、歸國する事は中止して貰ひたい、若し君が歸れば鎮撫の効は奏さずして、却つて不平黨の爲めに抑へつけられて、君は其犠牲になるに極まつて居る、吾輩の忠告を容れて、歸國するだけは止めて貰ひたい」

と言つて、諄々説きつけたけれども、江藤は遂に夫を肯き入れずして生國へ歸つて了つたのである。所が佐賀へ歸つて見るに、不平黨が待構へて居て、到頭江藤を仲間へ引張り込んで、明治七年二月十五日に旗上げをした。江藤の心では、此不平は鎮撫し得るものと考へて居たのだが、さて歸つて見るに、さういふ譯にもならず、板垣が豫言した通りに、自分は謀叛人の首魁になつて了つたのは今より考へて見ても實に氣の毒なものであつた。此舉兵に就ては、江藤一人の力では無論出来る譯もない、曾ては秋田縣の知事を勤め、現に侍從武官長をして居た島義勇が、是も政府の内命に依つて、鎮撫の爲めに歸國して居たのが、却つて不平黨に味方をする事になつて、江藤と握手仕ただの元來佐賀の士族が一派に分れて居た、其憂國黨と征韓黨が合同して、兵を擧げるこゝになつたのである。如何に島が戦争の名人であつても、江藤が如何に戦法を修めて居ても斯ういふ事情から俄かに思ひ立つた謀叛の成功する譯がない、殊に大久保は、此謀叛を永引かして居るのだから、其の西郷黨と若し款を通ずる事になつたならば、夫こそ天下の由々敷き大事になるのであるから、一日も早く江藤の亂を鎮めて了はなければならぬ、さういふ見込で、當時の大久保は内務卿であるから軍事に直接の関係は有つて居ないのだけれども、態々下關まで出張つて、自から戦争の世話までやいて、見る／＼中に江藤の舉兵は、鎮壓されて了つたのである。



夫から後の事情を話せば、却々長い事になるから一切略すが、只だ死刑に處せられた時の内情だけは述べて置きたい。

土佐の山内の家臣に、河野益彌といふ人があつた。是は後に樞密院顧問官になつて死んだ。河野敏謙の事であるが、後藤象次郎の紹介で、江藤の所へ便つて来て、暫く食客をして居た事がある。併し書生といふのではない、既に維新の際に於ても志士として、一人歩きの出来た河野の事であるから、深く其人物を見込んで、江藤が司法省へ世話をしたといふ丈の關係ではあるが、江藤は河野の爲めには非常な恩人である。

然るに江藤が、高知縣の甲浦で捕縛されて、佐賀へ送り付けられてから、愈々臨時裁判所を設けて、此連中を處分するといふ時に、裁判長になる者が無い、夫を大久保が、河野を説き付けて、無理に裁判長にしたのである。假令大久保が何う説き付けたにもせよ、河野が此裁判を引受けるといふ事は、人情に缺けて居る。夫にも拘はらず河野は、遂に其裁判長として佐賀へ下つて、到頭江藤に死刑、而も當時の法律から見れば、絞首、斬罪、梟首の三ツに區別されて居る、其内で最も重い梟首にしたのだから、河野は官人として、私情を抛つて公の爲めに盡

した、と言へば夫まであるけれども、天下の事は左様理窟通りには往かぬもので、何も河野が裁判を仕ないから、他に裁判のしてがないといふのではなし、大恩人の江藤の首を斬る事を受け合つたのは、河野にして甚だ怪しからぬ事だ。其代り河野は到頭出世をして、農商務卿から樞密院顧問官にまでなつた。後世の人が河野と江藤の關係を調べるに就ても、河野は恩人の江藤を罪に落して、政府へ巧く摺込んだのであると言はれても、一言の申し譯はなからう。乍併、河野も雖も人間であるから、江藤を梟首にした後の心持は快くなかつたに違ひない、到頭氣が變になつて死んで了つたのであるが、夫にしても、江藤が自分の食客に仕て置いた、謂は子分同様な河野敏謙から、梟首の申し渡しを受けたのは、何程心外であつたらうか、察しやるだに氣の毒なものである。

前にもいふた通り、斯ういふ事情で死んだ江藤の遺族は、見るも哀れな有様で居たが、此頃になつて江藤の志は、全く朝廷に叛いたのではなく、當時の事情が斯ういふ行きが、りになつて引込んだのであるといふ事が、識者の間に認められる事になつた。孰れ江藤の仲の悪かつた元老が悉く此世を逝つたならば、江藤に對する特別のお取扱ひもあるだらうし、其遺族も樂しく此世を送る事が出来るやうになるだらうと思ふ。

傑人 高杉晋作

(一)

毛利家が關ヶ原の戦役に敗れて、危く家を潰されやうとした時、分家の吉川の盡力で、辛うじて廢滅の悲運は免れたけれど、其代り山陰山陽の兩道に跨つて、十一箇國の領主であつたのが、僅に長防二州に押込められて、三十五萬石の中大名になつてしまつた。而も其居城は、二州の最も奥まりたる萩に限られたので、領内の政治さへ思ふやうに見ることが出来ない、さういふ窮境に陥つて、毛利家の困難は、日一日に加はつて來たが、幸にして歴代の藩主にさまでの暗君もなく、左右に従ふ家來も相當に根氣もあれば、智慧もあつて何うか斯うか、慶親の代にまで續いて來た。其長い間の苦心は、唯藩の財政を整理して、少しでも金を残して、倉庫を充實せしむるさうなことにあつた。其財政整理の有様を詳しく話すことは出来ぬ、非常に長くなるし、又本問題に遠ざかつて行くから、それは節略するが、兎に角、藩士に與ふべき食祿を減じて、勤儉尙武の氣を養ふさうな方にはばかり力を入れ、同時に領内の民から取上げる年貢は、可なり嚴重に扱つて居た。出すものを出さずに、取るものは嚴重にするさうなことから、是で身上が善くならなければ不思議である。長い間の貧乏は、嘉永の頃になつて、漸く一段落となつ

た。其時は金蔵に金も澤山積込まれ、倉庫に米穀も溢るばかりある、さういふやうな有様で、五年や十年は他藩と争ふても、軍費や兵糧に、事を缺くやうな虞はないまでになつた。

其頃の藩士に、村田清風さういふ人があつた。是は餘ほさ偉い人物で、文武の兩道に通じて居たのは言ふまでもなく、藩の士風を導いて、尙武の氣を旺にせしめたさういふ點に就ては、此人が第一の殊勳者であつた。

西北に風よけをして幕を張れわが日の本の櫻みる人

さういふ歌がある。是は清風が當時の時勢に就て、感慨を漏したのであるが、攘夷尙武の氣を養ふて、皇國の防備を嚴重にしろさういふ意味は、能く此三十一文字の中に現はれて居る。又此人の歌に、

敷島の和心を人は蒙古のつかひ斬りし時宗

元寇の昔、北條時宗が元朝の使節を打斬つて、筑紫の海に十萬の大軍を殲滅したさういふ、當時の歴史に時宗の武勇が、如何に偉かつたかさういふことは、此一首の歌の中に現はれて、恰も外夷の壓迫に苦んで居た、當時の士人をして激奮せしむるに足るの歌である。古人も言ふ通り詩は志也で、小難しい理窟を捻つて居るよりは、斯ういふ風に詩や歌の力で、人の心を激勵するさういふことは、あゝいふ時節には最も大切なことであつたらう。清風がこれ程の人物で

あつたかさいふごも、亦其志が何ういふ點にあつたかさいふごも、唯一首の歌に依つて  
 知るこゝが出来る。殊に、  
 来て見れば聞くほぎでなし富士の山釋迦も孔子もかくやあるらん  
 ミ、喝破した一首の如きは、清風の爲人の可なりに大きかつたこゝを、窺ひ知るこゝが出来  
 る。

此人の氣節や學風を慕ふて、第二世の清風たらんこしたのが、吉田松陰である。時代の差で  
 松陰は、清風の教養を受けるこゝは出来なかつたけれど、其書讀したものや、他から傳聞いた、  
 清風の平生に私淑して、深く年少の時分から清風を慕ふて、努めて其人たらんこした松陰の志  
 望は、遂に空しくならなかつた。尤も、松陰を幼少の時から深く見込んで、嚴重な教訓を垂れ  
 たのは、玉木文之進といふ人である。是は松陰の實父杉百合之助の弟であつて、玉木家を相  
 續した人だが、乃木大將を十三歳から十七歳まで、膝下に置いて仕込んだのも此人だ。非常に  
 嚴格な氣風で、如何なる重役御一門ミ雖も、不都合なこゝがあれば少しも假借なく、斷々乎や  
 り付けてしまふといつたやうな風があつたから、藩中の人には鼻を擡まれて居たけれど、又其  
 剛直清廉の氣風を悦んで、此人の教養を受けた者も少なくはなかつた。松陰に、あの熱烈な氣  
 き、激越な調子の加味されて居たのは、全く玉木の薰陶に基いたものであらうと思ふ。木戸孝

允があれ程の人物で、而も王政維新の際に於ける活躍から、明治政府に入つて内閣顧問になる  
 までの勢は、實に素晴らしいものであつたが、獨り玉木に對しては、一目も二目も置いて先輩ミ  
 して敬意を表して居た位だ、晉に敬意を表して居たばかりでなく、努めて玉木の指撥玉に觸ら  
 ないやうにして居た點から見ても、玉木がこれ程に嚴格な人であつたかさいふごが想はれる  
 それに就いて、斯ういふ珍談がある。木戸が内閣顧問といふ肩書で、萩の城下へ歸つて來た時  
 分に、或友人の宅で、頻に話し込んで居る所へ、玉木がやつて來たさいふごの聴くミ、木戸は  
 顔色を變へて、裏口から飛出してしまつた。其慌て、飛出す様子が、如何にも可笑かつたけれ  
 ども、笑ふ譯にもいかず、玉木を然るべくあしらふて歸へした翌日、其人が木戸に會ふて、  
 『昨日は何故あのやうに慌て、御歸りになつたか』  
 ミ言つて尋ねるミ、木戸は苦笑をして、

『玉木の爺、何を言出すか分らぬから、先づ觸らぬ神に崇なして、逃けた方が宜からうと思ふ  
 て、御挨拶もせずに飛出した譯ぢや』

『それは何うでも宜いミして、何を其やうに恐れられるのですか』

『實は之を咎められたら面倒ぢやからなア』  
 ミ言ひつゝ、木戸は、着て居る羽織の袖を揃んで見せた。木戸の着て居るのは縞紗の羽織であつ

た。

「成程、それを見ては、玉木の老人も、決して黙つては居ますまいなア、それにしても閣下程の御方が逃出すまいのは、餘りに不見識ではありませぬか」

「イヤ左様でない、玉木の言ふことは時代遅れでも、其言ふことに間違ひはなく、腹の底から出て来る吐言には反抗ふことは出来ぬからな、アハツハ、ハ、ハ、」

玉木の攘夷思想は明治になつても、矢張り續いて居たのだ。従つて異國から渡つて来た、羅紗の羽織を着て居る木戸は、玉木に見付かつて、吐り飛ばされるのが厭だから逃げたのである。

明治六年に前原一誠が、萩の城下で兵を起した。其時に玉木の養子になつて居たのが、乃木將軍の實弟眞人であつた。前原の計畫が敗れて、眞人が討死したといふことを聞くに、玉木は杉家の墓前に、潔く割腹して相果した。今の教育を受けた人に言はせれば、左様な頑固翁は、逆も人らしくも思ふまいが、明治になつた當時の武士の家に生れた人には、時として斯ういふ傑物があつたものだ。松陰は此人の薫陶を受けて、其氣風に感化せられ、併せて村田清風の學風を慕ふて、それに私淑しやうとしたのだから、あくいふ性格の人物になれたのである。其松陰が玉木の創設した、松下村塾の閉鎖してあつたのを引受けて、再び開いたのである。松下村塾といへば、松陰が創設したものゝやうに、思つて居る者もあるだらうが、實は叔父の玉木が、

經費の關係から一時閉鎖して居た、これを松陰が再興したといふに過ぎないのである。併し玉木の松下村塾は世間に少しも認められなかつたけれども、松陰が引受けて、僅の間に三百人からの門人を養ふて、其中から盛に人物が出て来たので、初て松下村塾の聲價は、天下に認められることになつた。

松陰が佐久間象山と相談して、外國へ密航しようとした。その計畫は中途に敗れて、幕府の爲に捉はれ、一度は江戸傳馬町の獄舎へ繋かれたけれど、幸にして刑罰を免がれ、毛利藩へ御預けといふ、軽い處分で済んだ。初め野山の獄へ入れられたが、間もなく出されて親類預けといふことになつた。其場合に松陰は藩廳へ願書を出して、吉田家が先祖代々軍學指南を仕て居たのを名として、私塾を開設することを願つて出るに、間もなく許されて、松下村塾は茲に再興された。松陰が獄から出て、塾を開いたのが二十八歳で、安政五年の疑獄に連坐して、江戸の牢舎で誡られたのは三十歳である。松下村塾の主人として、三百人の門人を仕込んだのは、僅に二年の短日月であつたけれども、其短い月日に、此小さい塾舎から出た人物が、多く維新の變亂に際して、毛利家を代表して働いた人々であるから、松陰の精神は、其人々から廣く世に紹介せられた譯になる。試みに二三の人名を擧げて見れば、

高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤俊輔、井上聞多、山縣狂介、野村和作、入江九市、品川彌二郎

寺島忠三郎

等の連中であるから、其中の一三の者を見ただけでも、松陰の教育が、きれ程に優れて居たか、さういふことが分る。

久阪玄瑞は通稱を義助といふて、三百の門人中で、最も優れて居た立派な人物である。學問も却々に深かつたし、見識もあれば氣節も高く、實に多くの人の儀表になるべき素質を有つて居た。其爲人には、深く松陰も目を掛けて、特に教訓を與へ、遂には自分の妹を久阪の妻にした程であるから、此一事を以て見ても、松陰が久阪を愛して居た程度は想像される。高杉の父は小忠太といふて、若殿長門守の傳役をして居た關係から、相當に勢力もあつたけれど、此父を有つて居ながら、晋作は少しも家門の力に依つて、身を立てやうといふやうな氣もなく、獨立獨歩、己が爲さん欲する所を爲さうとする念の外は、何の考もなかつた。其己が爲さん欲することを爲し遂げやうといふ氣象が、總ての場合に現はれて來て、利かぬ氣の高杉も、總ての人にも目指されるやうになつた。松陰も深く其氣象は愛して居たけれど、何分にも武術の修業ばかりして居て、少しも學問の方に志さぬから、高杉の顔を見る毎に、松陰は、「お前は、なかく秀い氣象を有つて居て、多くの人の上に立つことは出来るだらうが、惜い哉、學問の力が足りないから、久阪には遠く及ばぬ」

類に激勵した。それが爲に高杉は例の負けぬ氣を出して、何の久阪がさういふ氣で勉學したか僅の間に他の十年振も讀んでしまつて、何時か久阪と肩を並べるまでになつた。そこで松陰は、我塾の双壁だと言ふて、他に誇るほぎであつた。又此兩人も、其修業の上に於てこそ競争はするやうなもの、平生は極めて睦じく、恰で眞の兄弟のやうにして、天下國家の事を談論して、日を送つて居た。併し久阪は、元治元年の京都の戰爭で討死してしまつたから、高杉に比べるに、世を逝るこゝが早かつたので、餘り多くの人には認められず、其最期の如きも、左まで人の注意は引かなかつたが、高杉に比べて、少しも遜色の無かつた人物である、さういふことだけは言へる。

けふもまた知らぬ露の命もて千歳をてらす月を見るかな  
 是は久阪が、討死する少し前に詠んだ歌であるが、晉に斯ういふ慷慨の歌ばかりでなく、俗語に於ても亦立派な作が澤山にある。其中に於ても最も人口に膾炙されて居るのが、  
 立田川むりに渡れば紅葉が散るし渡りにや聞えぬ鹿の聲  
 歌の意味が解らずに、井鉢の縁を叩き乍ら、向鉢巻でカン／＼歌はれてしまつては詰らないものだが、當時の志士が幕府の目を忍んで、密に勤王の爲に盡した、其境遇の一斑は、此俗語の中に現はれて居る。

高杉が吉田の門に入ったのは、僅に十九歳であつた。今の青年の十九歳といへば、まだ親の臍を嚙つて居て、東西南北の方角すら、自分で決めることの出来ない位のもので、如何に時代の違ひはいいひ乍ら、斯様にも人間の位が違ふものか、と思はれる程である。今の教育に従事する人は、唯時代の相違で致方がないといふやうな簡単な申譯で済して居ることは出来ない。如何に時代が違つても、其時代に釣合ふて、矢張り昔の人が十九や二十で、天下の重きを擔ふだけの氣概を持たせ、其道々に就いては修業をさせることにしなかつたならば、日本の前途も氣遣はれる。如何に學問が複雑になつたれば、早くて二十五、遅ければ三十まで、學問をして居て、限りある人生の半ば學校生活に終つて、愈々世の中に一本立になつた時は、もう年齢人生の峠を通過して居るさういふのでは、如何にも馬鹿らしいやうな氣がする。久阪の死んだのが二十二か三の時であるが、其前年に毛利侯へ奉つた、回瀾條議を題した建白書を見て、今の其年配の人に比較して見るに、唯驚嘆するの外はない。

(三)

松陰が門人に對して、何事かを教へる時は、非常に嚴格であつたが、其平生は極めて親切な、優し味の深い取扱をするので門人の方でも松陰を、恰で父のやうにして心服して居た。然る

に松陰の身に取つて容易ならぬ事件が起つて、遂に松陰は、是が爲に刑場の露を消ゆるやうな、恐しい事件が起つて來た。それが有名な安政の變獄である。

當時の幕府は、井伊大老が威權を專にして居て、何事も自分の思ひ通りに行つて居た。所が、將軍家定の權限を定める問題と攘夷の密勅と、此二つの事から井伊は、一層に其威權を振ふて、幕府に反對する者を、片端から断々乎やり付けてしまつた。縱令幕府に反對はせずとも幕府の不利益になるさ見たことは、手厳して壓迫けたのみならず、それに關係した者は、恰で怨敵の如き取扱をして、是が爲には水戸の烈公も、亦尾州侯も謹慎を命ぜられ、越前の松平春嶽や、烈公の愛子一橋慶喜なども、處分されたさういふやうな譯で、井伊に對する一般の反感は日を送ふて激しくなつて來た。是は主に、將軍權限の問題から起つた處分であるが、京都の方では、攘夷の密勅に關聯して、幕府の處置を非難するこゝが、日を送ふて激しくなつて來る。若し此儘に打棄て置いたならば、何んなことになり行くか、それを心配の餘りに井伊は、當時の老中間部下總守を上京せしめて、攘夷勤王の説を唱へて居る、諸藩の有志者や浪人を、片端から引捉へて、牢へ打込んでしまつた。尙甚しきは公卿堂上方の家來までも、殊數繋ぎにするさういつたやうな、辛辣な處方をして、一時は百餘名の人を獄に入れた。梅田雲濱、橋本左内、頼三樹三郎、六物空海、鶴殿民部少輔、安島帶刀、鶴岡吉左衛門、同幸吉、藤森弘庵等を

首め、苟も幕府の役人を見て、不都合と思ふた者は、遠慮會釋なく引擧げてしまつた。其中の梅田が長州萩へ乗込んで来て、密に松陰と會見したといふことが、嫌疑の原因となつて、それから毛利家へ交渉になつたのだ。尤も、此疑獄の起つたのは、安政五年の秋であるが、年を越えて、翌年の五月になつてからの交渉で、其間には多少の時日はあつたけれど、兎に角、松陰を差送れといふ内沙汰が下つた。本来から言へば、斯ういふことに就いては、藩の威權として、一應は拒んでも差支ないのだけれど、此時分の毛利藩には、まだ佐幕の空氣が、深く滲みて居た時分であるから、一も二もなく松陰を江戸へ差送ることになつた。それに就いて面白いことは、前にも言ふた松陰の叔父に當る、玉木文之進の目玉が光つて居るので、若し之を送るならば、必ず玉木が故障を言ふに違ひない、さうしては面倒であるからといふので、玉木を藩命に依つて田舎の方へ使ひにやり、其留守に松陰を送つてしまつた。玉木が萩の城下へ歸つて来て、之を聞くと、重役の屋敷へ怒鳴り込んで、猛烈な談判を始めたので、係の役人が玉木の前に入を命ぜられ、毎日のやうに評定所の調べを受けて、遂に同年の九月二十一日に首を斬られて、其死骸は小塚原の刑場へ捨てるやうにして葬られてしまつた。

此松陰が、江戸へ送られる事が決つた時の、松下村塾の騒動は實に大いもので、中にも品川彌二郎は、まだ年少の時分であつたが、憤慨の餘り身長よりも長い刀を引提げて、政務座役の周布政之助の邸へ押込んで行つて、飲めもせぬ酒を呷り乍ら、大騒動をやつたといふやうなこともあつて、一時は門人が、何んな騒動を惹起すか、藩の重役も非常に懸念をした位であつた。

(三)

其後、文久二年の春になつて、長州藩が京都の實權を握るやうになつてから、大原三位重徳卿が、攘夷實行の命令をなすべき勅使として、關東へ行くことになつた。其砌に幕府へ對する、大原勅使からの談判の箇條の中に、過る安政五年の疑獄に刑死された者は、愛國の至誠ある志士であるから、總て改葬して其後を厚く祀るやうにといふ意味の一箇條があつた。幕府に見れば、斯ういふ朝命を拒んで、飽迄も彼の時のことは、幕府が正當の處分をしたのだ、といふて主張すべき筈であつたが、何しろ朝廷の勢が強いで、さういふ理窟を捏ねることも出来ず、唯々諾々として、大原卿の傳へた朝命には、總て服従して御拜詔をしてしまつた。茲に於て小塚原へ葬られた、松陰を初め頼、橋本、其他の人々を改葬する議が起り、長州藩では松陰の養ふた門人が、威權を利かして居たので、早速毛利家の別邸の在つた、今の世田ヶ谷の松

陰神社、あの所に改葬することに、其役を引受けたのが高杉晋作であつた。

長州藩としては、松陰を改葬するだけで宜しいのであるが、併し、之を取扱ふ者が、高杉初め松陰門下の志士であつたから、恩師の松陰を改葬する場合に、恩師と共に刑死された天下の志士を、其儘に抛つて置くことは、義にして見るに忍びぬことである、さういふ意見から、同時に一同を改葬することに決し、高杉は此場合にも、自分の思ひの儘に振舞つた。藩の重役に多少の議論があつたけれど、高杉の威勢に恐れて、格別の干渉はしなかつた、松陰等の死骸を桶に入れて、従僕に擔がせ、高杉は先頭に馬に乗つて、長い槍を携へて、白晝公然、世田ヶ谷へ引揚げて行く。其雄姿の堂々たる有様には、何人も驚かざる者はなかつた。恰度、上野の三橋へ掛かつた時に、其中央の橋を渡らうとするのを見て、此邊を守つて居る、幕府の役人が、『アイヤ、其處へ御通りになる御武家、暫く待つしやい』と、呼止めた。高杉は馬上の儘、顧眄つて、『何事でお召るか』

『貴殿が今渡られる中の橋は、上様御成の外、通行を許さぬことに相成つて居ることは豫て御承知でもござらうが、念の爲に御注意申す』  
之を聽く、高杉は冷笑を浮べて、其役人を後目に掛け乍ら、

『御注意の段は千萬添けないが、残念ながら其御注意は守る譯に相成らぬ』  
『是や怪しからぬ、本来を申せば、其不都合を咎むべき筈であるのを、當方に於ては身分ある御方と見て、多少の御遠慮を申して、注意を致したのぢや、然るに注意を容るゝことが出来ぬことは何事でお召るか』

高杉は益々落付き拂つて、  
『折角の御注意ではあるが、それに従ふことが出来ぬさういふに、何の不思議がある、注意は注意、肯かぬことは肯かぬ申すに、別段の不思議もござるまい、ハツハツ、ハ、ハ、』  
『重ね々不都合千萬な、して其桶の中には何を入れてあるのでござるか』  
『此桶の中には、傳馬町の牢内に於て、無憾な最期を遂げた、憂國の志士吉田寅次郎、頼三樹三郎等の屍骸が納めてあるのぢや』

『エツ、何と言はつしやる、死骸の運搬をするのに、此中の橋を通らるゝさういふのか』  
『勿論』  
『悉々以て怪しからぬ、左様な不淨のものは通すことは罷りならぬ』  
『何ミツ、通すことは相成らぬさ』  
『左様』



「ウム、よくも申した、愈々通さぬならば、刀の手前、腕に掛けても通つて見せるが、何うぢや」  
「言ひ乍ら、携へて居た槍の鞘を拂つて、ピタリ馬の平首に付けて向直つた。其勢が如何にも荒々しいので、咎めては見たが、役人も幾分か躊躇の態で、

「貴殿の御姓名は何言はつしやる」

「拙者は毛利大膳太夫の家臣高杉晋作でござる。交渉の筋もあるならば藩邸へ御出で下されば、

何時でも御面會申す」

「言ひ乍ら、後を振り返つて、

「ソレツ参れ」

「號令を掛けたから、他の者は早桶を擔いで、ドンドン中の橋を通つてしまふ。高杉は一同の通り過ぎるのを見て、役人の方に向直つて、

「今日の事、拙者に於て一切御答へ申す故、御交渉の筋もあらば、何時でも御出で下され」

「言ひ放つて、馬を急せ、早桶の後を追ふた。咎めた役人も呆氣に取られて、其後姿を見送るばかりであつた。

假令、幕府の威信は地に墮ちて居たにもせよ、苟も將軍の外に通行を許さぬといふ三橋の中、  
中央を早桶を擔いで平氣で通つて、自分の名前まで名乗つて、一切の責任を引受けるから、何時でも交渉に來いと言ひ通して立去つた。此高杉の行動の如きは、普通の武士に出来ることではなく、高杉なればこそ、初て斯ういふ思切つたことにも出來たのであらう。

(四)

文久二年の十月から十二月に掛けて、高杉が發起した蜂討が二つある。一つは全く失敗して、中途で止めてしまつたが、一つは立派に成功して歴史上の事實となつて居る。其の失敗した方は何ういふのかといふに、横濱の寄留地へ來て居る異人は、武州金澤の景色が佳いといふので、土曜日から日曜日に掛けて遊びに行き、日本の家を借受けて、其處に一日の快樂を盡すのだ、といふことを聞き傳へて、金澤へ押掛け此異人を斬つて、攘夷の血祭にし、その歸途に横濱へ立寄り、異人館に火を放つ計畫で、十月十二日の夜、高杉初め、久阪玄瑞、品川彌二郎、寺島忠三郎、赤根幹之介、山尾庸三、白井小助、有吉熊次郎、長嶺庫太、大和彌八郎等の連中が押出した。

然るに此事は、土州藩の武士半平太も、仲間の一人に加つて居たのだが、容堂侯の御側を勤めて居た、小南五郎右衛門に不圖したことから、此計畫を漏したので、小南は驚いて之を容堂

に告げた。そこで容堂は毛利の世嗣長門守へ、密に之を知らせたので、それから毛利の藩邸でも大騒動になり、高杉等を捜して見るも、もう既に立出たことだったのであるから、順當に手續を履んで、彼等を押へることもならず、長門守は根來上總、山縣半藏、寺内外記の三人を連れて、馬上で一行の跡を追ふことになった。それはもう夜半のことであつたが、到頭蒲田の梅園の手前まで来て、高杉等の一行に追付き、長門守が自ら説諭を加へて、金澤襲撃のことは断念させた。それから成功した焼討事件は、同じ年の十二月十三日に、高輪御殿山の英吉利公使館へ夜討を掛けて、未だ出来上つたばかりの公使館に、火を放けて美事に焼いてしまつた。其事が露顯して、高杉等が行つたことであること知れ、幕府から藩へ對して、嚴重な談判が起つた。そこで藩の重役が心配して、一同を逃すことになり、それら道分つて、長州へ逃けて行くことになった。其時も高杉は正々堂々、東海道を上つて行く途中、例の函嶺の關所へ掛かつた際に、關所の役人へ、長州藩士高杉晋作、明に姓名を名乗つた。然るに役人は、藩邸の證明を與へた旅券がない、さういふのに苦情を付けて、彼は言ふも、高杉は刀の柄に手を掛け、

「旅券は持つて居らぬが、茲に武士の魂は持合して居る、旅券が無くて悪ければ、魂を御覽に入れやう」

と言つて、詰寄せた。其勢に關所の役人は、腰を抜かすばかりに恐怖して、高杉を其儘に通してしまつた。何れの場合に於ても、高杉は斯ういふ態度で進んで行つたから、血氣の壯士は、高杉の意氣に感激して、何時も其指揮命令の下に働いたといふことだ。

(五)

文久三年の政變で、長州藩の勢力が、京都から美事に驅逐されてしまつた。是は會津中將、中川宮が結托して、毛利の隙に乗じてなしたことであるが、其事の是非は姑く置いて、流石の長州藩も、此時は散々の爲體で、在京の藩士を率ゐて引揚げるの外はなかつた。其際に、三條中納言以下七卿が附いて來た、之を歴史の上では七卿の長州落と稱して居る。然るに此事を此儘に濟せて置いては、長州藩の面目にも係るし、又三條以下の七卿に對しても宜しくないといふので、愈々京都へ乗込んで、朝廷へ哀訴歎願をする事になった。國司信濃、益田右衛門介福原越後の三國老が頭領になつて、四百餘名の藩士は、甲冑物具に身を固め、恰で戰爭をするやうな仕度で押出して行つた。其時にも藩論が二つに分れ、上京を助ける者も、之を抑へやうとする者との間に、非常な軋轢があつた末、兎に角、穩かならぬ行装をして押出すのは宜くないといふことに決つた。其領が見えたから上京を急ぐ側の者は、逸早く長州を離れて、も

う途中まで出掛けて行つた。其行動の迅速なこゝは、實に驚くべき程であつた。高杉の父が、長門守の傳役をして居た關係もあるが、高杉の家は毛利家の世臣である爲に、藩に於ても相當の信用はあつた。旁々以て高杉は、新知百石を與へられて、一家を成すこゝになつた。是は破格の登用であつて、當時はなかくの評判であつた。そこで上京、反對の連中は、一同を途中から引戻させた方が宜いといふこゝになり、其頭領は三國老であるが、萬事は來島又兵衛が采配を振つて居る、といふこゝが分つたから高杉に命じて又兵衛を引戻すべく、其使者を命じた。高杉に於ても、此際に不穩のこゝをするのは面白くない、といふ考は有つて居たので、直に使者の命を受けて、是から一行の跡を追ひ掛け、遂に來島又兵衛に會つて、懇々中止のこゝを勸告した。所が又兵衛は、烈火の如く憤つて、

『貴様のやうな腰拔は、百石ばかりの知行を貰つて、一生の計は茲に成れり。濟し込んで居たら宜からう、我々は左様な譯にはいかぬ』

と罵られたので、高杉も赫となり、

『是や怪しからん、百石の知行に安んじて、一生の計が成つた。拙者は悦んでは居らぬ、殊に腰拔は何事であるか』

『腰拔はいつたのが悪いか』

『如何にも怪しからんこゝぢや、其腰拔の仔細を聴かうか』

『ウム、よし言つて聽かせやう、よく胸に手を置いて考へて見ろ、貴様はまだ二十を越えて一歳か二歳、一生の計を立てるやうな年配にはなつて居らぬのぢや、僅ばかりの知行でも、特別の御手當に預る。何事も因循姑息になつて、大事を取るやうになる、其證據には、我々が此度の上京は、平生に於て貴様等と闘はして居た議論を、實際に行ふこゝになるのであつて、我々に力添をするのが相當であるのに、却つて止め立をするといふのは、矢張り百石の知行が嬉しいから、さういふ馬鹿なこゝをするのぢやらう、斯う言はれるのが口惜しかつたら、貴様も腹を切つて死ぬ位の稽古をして置くが宜い、併し此調子では腹を切るこゝさへも出来ないであらう、ハツハ、ハ、ハ、ハ』

『イヤ、それは是下の申すこゝが違つて居る、京都へ行くといふのも遣らぬといふのも、等しく御互の意見であつて見れば、之に依つて腰拔だとか、臆病だといふこゝは決らぬ筈ぢや、それを一概に腰拔に罵るのは怪しからん、拙者も高杉晋作ぢや、腹の切り様位は心得て居る』

『それは偉いな、それ程立派なこゝを言ふのなら、潔く死んで見せるが宜い』

『死ぬべき時が來れば、何時でも死ぬ』

『偉い、それでなければ、天下の壯士は言へぬ、感心した』

是では全で嘲弄かされて居るやうなものだ。高杉もまだ若く、血氣盛の時であつたから、來島の爲に翻弄され、ブン／＼怒つて、到頭其儘引揚げて來た。是が爲に武士の面目を立てなければならぬ、さういふ所から、藩廳の方へは使者の復命をせずに、其儘姿を晦して、京阪の方へ出掛けてしまつた。此行爲が宜しくないさういふので、後に牢へ入られるやうなことになるのである。斯ういふ場合にも、高杉の氣象が現はれて居て、洵に面白い逸話だと思ふ。

## (六)

初は極端な攘夷論を唱へて居たが、幕府の使節に附いて上海へ行つて來てから、急に今までの攘夷論を棄て、開國的意見を持つやうになつた。尤も是は高杉ばかりでなく、其他の人でも一度海外の土を踏んで歸つて來た者は、皆さういふ風に變化はしたけれど、兎に角、文久二年の當時に、上海まで行つて來ただけで、世界の大勢を悟つて、今まで唱へて居た攘夷論を擲つたのは、高杉が普通の頑固連で、其思想の上に於ても、大分距離があつたさういふ證據にはなる。尤も其師匠の松陰も、攘夷論は唱へて居たが、それは開國的攘夷論さういふのであつて、攘夷の精神を以て開國を行へ、さういふのであつたから、一般の排外思想から起つて來た、頑冥なる攘夷論とは、大に其議論の根本が違つて居た。其薰陶を受けて居た高杉であるから、自然に斯う

いふ徑路から開國の意見になつたのかも知れないが、高杉は自分の主張に固い人ではあつたけれど、又他の説を容るゝだけの寛容があつたには違ひない。

それは別のこゝとして、高杉の平生が何うしても、藩の重役と相容れぬ行動が多いので、幾度か重役の間の問題にもなつたが、何しろ高杉の父は、長門守の傳役であるし、其家柄からいへば、高杉は實つて居なかつたけれど、毛利家の世臣であるさういふやうな、關係もあつて、旁々高杉に對する處分は、思ふやうに出来なかつた。併ながら今度のやうに、自分の勝手に脱藩するやうなこゝがあつては、もう看過して居るこゝが出来ないから、そこで重役會議の結果、高杉に對しては相當の處分を加へるこゝになつた。脱走した高杉は、藩廳の御咎めのある位のことでは覺悟の上であつたから、江戸へ着いてからも、相變らず諸藩の志士と交つて、盛に倒幕の主義を鼓吹して居た。そのうちに藩廳の内講が決つて、自分を押へるさういふやうな氣振が見えたから、そこで一時は身を隠すの考になつて、同志の多い水戸へ走るこゝになり、クリ／＼坊主になつて江戸を脱した。其時に千住の並木を、駕籠に乗つて通るこゝ、恰度其處へ通り掛つたのが品川彌二郎で、恩師松陰の墓参に行つた歸途、通り過ぎる駕籠の垂から、刀の鏢が出て居る。彌二郎はそれに眼を着けて、思はず後から追従つた。

「高杉ぢやないか」